
魔法戦記リリカルなのはSchool?～10年後の物語～

酔仙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはSchool? ～10年後の物語～

【Nコード】

N7903V

【作者名】

酔仙

【あらすじ】

ヴァロット達の卒業から10年、スクールは開校から12年目の夏を迎えようとしていた。

スクールは既に最強の魔導士を育てる教育機関としてその地位を確立し、

管理局からは絶大な信頼を寄せられ、生徒達は引く手あまたの武装隊員として将来を囑望されていた。

でも、1年生の連中は相変わらず問題児が多く困った事を起こす

のもまた日常だった。

そんな彼らは先生や先輩達の強さに引っ張られ高みを目指して成長する。

ちよっとお馬鹿でちよっと熱血でほのぼのとした日常の彼らを描いていこうと思います。

時に恋愛有り、時にケンカや実戦、大事件も起きたりします。

その度に現れてその強さを見せ付ける卒業生達、

その神にも匹敵する強さを見て、自分達の弱さを噛み締める生徒達、そのギャップに苦しみながらどう成長していくのか？

彼らの成長を温かく見守ってやって下さい。

なのはですら最早ちよい役、卒業生達チート過ぎ、はやてさんはロード・オブ・ザ・魔王、

やばいキャラ多数、スカさん復活？、ヴァロットは最強のチート、何故ガンダム？、

ナカジマ家増殖しすぎて最早收拾付かず、新世代キャラ続々登場っ
て感じです。

登場人物紹介1（前書き）

今度の主役は、空手野郎と剣術少女だ！

登場人物紹介1

主人公

今度の主役は、空手野郎と剣術少女だ！

1-1

ジョン・ハミルトン16才(男)

空手を習っている。学園のトラブルメーカー

ケンカ次元世界1を目指す男、体力と根性はなかなか見上げた物。

グラナガン都市予選で優勝賞した経験の持ち主、その後出場したミ

ッドチルドシリースで、

スクールの生徒にフルボッコにされ現実の厳しさを知る。

根はまっすぐな奴なんだが……馬鹿でスケベ、単細胞、結構熱血、

憎めない奴、

リンに気があるのだが……

デバイスは小手型アームドデバイス。

1-2

リン・ヤマザキ16才(女)

宮ノ内示現流を習う、クラスのムードメーカー

ちよっと抜けた所がある。

明るくて天然な性格。

デバイスは新素材で作られた日本刀「飛梅」

兄は生徒会副会長

父は日本出身、北辰一刀流7段、現在管理局で剣道教室を開いている。

幼少の頃より父に鍛え上げられた為、剣の腕はかなりの物、

加えて宮ノ内示現流を学んでいる為かなりの強さがある。

新素材オリハルコングラファイト合金…

EC兵器に対応する為開発された合金、硬度9・97を誇り、強度はダマスカス鋼をも上回る。

ただし、余りの硬度と強度故、一旦成型すると形状の変化や、大きさの変化が出来ない欠点を持つ。

その為、常にデバイスをそのままの大きさで持ち歩かなければならない。

使われているのは熱硬化シリコン、オリハルコン、ミスリル、カーボン

チタニウム、コバルトなど数十種類の金属を絶妙の割合で配合している。

オリハルコングラフアイト合金は元々ヴァロットが研究していた物、ダマスカス鋼以上の強度で、量産可能な素材として開発された。

一旦はヴァロットが研究を放棄した物の、マリーさんがそれを引き継いで完成させた。

コスト的には安くはないが、日本の職人にダマスカス鋼の刀を発注するより安い。

学校関係

教師

ロサード・デ・ラグリマ27才

1ー1担任、ソリスと結婚し子供が一人いる。

ソリス・デ・ラグリマ（ソリス・カオール）27才

1ー2担任、ロサードと結婚し、子供が一人いる。

子供の名前はロベール7才

ビリー・ブラック57才

1ー3担任

奥さんと二人暮らし、
娘が居るが、本局勤めで一緒には暮らしていない。

ピノ・不破 (ピノ・グリーンジョ) 25才

1ー4担任、

お見合いの末、ケン・不破と結婚、

1児の母、息子ジョージ3才

最近現場復帰した。

月村 雫 26才

2ー1担任、

現在結婚相手を物色中。

エリオ・モンディアル 30才

2ー2担任、キャロと結婚し二人の子供が居る。

ティアナ・グランセニック (ティアナ・ランスター) 37才

2ー3担任、ヴァイス・グランセニックと結婚し、子供が一人いる。

子供はジェラルル 6才

キャロ・モンディアル (キャロ・ル・ルシエ) 30才

2ー4担任、エリオと結婚、2児の母である。

子供は、マティス 9才、パルティ 8才

ヴィータ???才

教頭先生、相変わらず中間管理職として頭の痛い毎日を送っている。

高町なのは 40才

我々が校長先生、最近は卒業生達の活躍で、現場に出る事は一切無

い。

娘プレオは士官学校2年14才

息子ユウキは9才

娘ヴィヴィオは現在聖王教会に暮らす。

ヴィヴィオに娘が居る。既におばあちゃんだ。

アステイ・ロシェット（アステイ・スプマンテ）27才

転送講座の講師、最近現場に復帰した。

8人の子持ち↓ロシェット家で紹介

ヴァンサン・ロシェット1佐27才

指揮官研修を一手に引き受ける。

詳しい事は、ロシェット家およびスペシャルフォースで紹介

陳 劉邦

中国拳法の特別講師

チャチャイ

ムエタイ・ムエボーランの特別講師

佐藤さん

剣術の特別講師、宮ノ内示現流を教える。

スー・与那覇

校医・空手の特別講師

12代目生徒会

会長

2-4FB

クロスリード・カマンサック17才（男）

12期生最強を誇る使い手、御式内、御神の剣を習っている。

魔力も非常に高く、既にSS級有ると言われている。

統率力が高く、先生方からの信頼も厚い。

指揮官適性試験でも10年ぶりに満点合格している。

執務官補佐の資格を持っており、この冬の執務官試験でも満点合格の期待が掛かる。

とても出来る人、あだ名はミスターパーフェクト

副会長

2-2GW

ヒビキ・ヤマザキ17才（男）

宮ノ内示現流を習っている、既に佐藤先生と互角なぐらいに戦える。

非常に物静かな性格、でも、怒った瞬間性格が変わる。

あだ名は大魔神、オリハルコングラファイト合金の剣（日本刀、銘：吞龍）を持つ

妹を溺愛している。「妹に付く悪い虫は俺が斬る！」

第1書記

2-3CG

カティ・サーク（女）

かなりの美少女、男子からの人気が高い。

でも怒ると所構わずぶっ放す。

TRG-21狙撃銃型アームドデバイス所有、

マルチポートで実弾も撃てる。

多彩な砲撃の持ち主、装弾数は10発

第2書記

2-4FB

ラフロ・イグ（男）

アフロではない、ラフロだ！
でも髪型はアフロだ！

エマルジョンコレクトSDの使いこなしはかなりの物、
他に変な収納魔法を持っている。

アフロの中にいろいろな物を収納している。

御式内を習っている。あだ名は勿論アフロだ！

第1会計

2ー2GW

アード・ベック（男）

太極拳・棍術を習っている。

太極拳の様につかみ所のない性格

だが、計算高く意外と黒い1面がある。

デバイスは鉄棍（エナジーパック仕様）

第2会計

2ー1FA

イスズ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、一番人数が多い世代。

ISは振動破碎、技名は削岩拳、削岩機のような衝撃波を打ち込んでくる。

ムエタイ・ムエボランを習っている。

かなりきっちりした性格（A型体質）で、僅かな服装の乱れや、
物の置き方が悪いのが許せない。

だから、常に拭き掃除をしたり、整理整頓をしている。

一番ギンガに近いIS特性を持っている。

第1庶務

2ー3CG

グレン・モーレンジイ（男）

H&K・MP5のアームドデバイス、連射性に優れている。マルチポートで実弾も撃てる。装弾数30発。多彩な砲撃の持ち主、他に幻惑魔法を得意とする。

第2庶務

2-1FA

アヤメ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、一番人数の多い世代。

ISは振動破碎、周波数1Hz、そう人造魔王一味のアルファの量産機の一人、

技名はジャイアントインパクト、ただアルファほどの破壊力はない、でも非常にタフな所や、大雑把な性格はそっくり、スクラティを超える大食漢、

デバイスは小手型アームドデバイス、

李氏八極拳を習っている。

ジャイアントインパクトを発願に乘せる事でアルファ級の破壊力を出せる。

1年生

1-1

ジョン・ハミルトン（男）

冒頭で紹介したのでパス

マリー・ボーン（女）

ジョンの事が気になっている、

太極拳を習っている、かなり非凡な才能の持ち主
鎌型アックス（カルトベーター）を使う。

http://www.rivertop.ne.jp/rivertopsabu/omosiro/buki/axs/t66.html

バランタイン・ファイネスト(男)

こいつもかなりのスケベ、女子からスケベ3人衆と呼ばれる内の一人、

デバイスは、ツインブレイドhttp://www.rivertop.ne.jp/rivertopsabu/nif/wt054dx.html

御式内を習っている、かなり非凡な才能の持ち主

ツバキ・ナカジマ(女)

スクラティの妹、一番人数の多い世代。

ISは振動破碎、スクラティと同じウルトラソニックウェーブを足から打ち出す。

李氏八極拳を習っている。結構積極的な性格

1-2

ジョニー・ウォーカー(男)

空手を習っている。

デバイスはトンファー型デバイス。

リンの事が気になるのだが……

リン・ヤマザキ(女)

冒頭で紹介したのでパス

フェイマス・グラウス(男)

クロウナイフのデバイスを持つ(エナジーパック仕様)

(http://www.rivertop.ne.jp/riv

[ertopsabu/nif/jd01.html](#)

かなりねっちこい性格、太極拳を習っている。

ツグミ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、一番人数の多い世代。

ISは振動破碎、高周波を圧縮して打ち出してくる。
スバルに最も近いIS特性を持っている。

空手を習っている。

1-3

デュワーズ・ホワイト（女）

大型アーチェリーのデバイスを持っている。

魔力の矢をつがえて飛ばしてくる。

多彩な砲撃が持ち味、

近接戦闘用に、御式内を習っている。

ジャック・ダニエル（男）

M82A1対戦車ライフル型デバイスを持つ、装弾数11発、
デバイスが大きい為普段はモードリリースしている。

連射が利かないが、その分大きな砲撃が可能、

実弾も撃てるマルチポート仕様。

銃衝術以外に空手を習っている。

ヘンリー・マッケンナ（男）

S&W M500二丁拳銃のデバイスを持つ、
左右合わせて10発（片方で5発）しか装弾出来ない。

ビリー先生からファイブオンワンを叩き込まれる事になる。

銃衝術、ムエタイの両方を習っている。

実弾も撃てるマルチポート仕様。

サクラ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、ISはエネルギードレイン、相手の魔力を吸い取ってしまう。

砲撃専用デバイス、ボウモアキャノンを持っている。

ガンマの量産機ではないかと思われる。

普段はデバイスがあまりに大きい為、モードリリースを余儀なくされている。

1-4

4組は全員ストレージデバイスで、オリハルコングラファイト合金製の小太刀と杖（いずれもアームドデバイス）を渡されている。

ブラントン・ゴールド（男）

御式内を習っている

女好きな性格、かなりのスケベ、ジョンと一緒に何かやらかす事が多い。

今の所まだ魔力は低い、この先どれだけ伸びるやら？

ジム・ビーム（男）

御式内を習っている。

かなりの悪戯者で、とんでもない悪戯を仕掛けてくる。

ナギに気があるらしい。

ナギ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、ナカジマ家にしては珍しくISの発現が見られない。

代わりに転送能力を持っている。御式内を習っている。

かなり引っ込み思案な性格、御式内はかなりの腕前（小学校の頃からスクラティに叩き込まれた）

デルタの量産機ではないかと思われる。

エヴァン・ウィリアムス（女）

御式内を習っている。

他に幻術を使う。

山田ウィルスに冒されている。

自らを腐女子と称する山田信奉者、

山田2号的な性格、余りお近付きになりたくない。

士官学校

FAモミジ・ナカジマ

プレオの同級生でチームメイト。

スクラティの妹に当たる。

明るく活発な性格、人当たりが良く悪戯者

よくプレオと一緒に悪戯をする。

3才の頃からの付き合いでプレオと最高のコンビネーションで動ける。

小さな頃からスクラティに御式内を叩き込まれ、既に御神の剣も使う。

ISはまだ発現していない。

ウェンディによく似ている。

GW高町・プレオ

校長先生の娘にして士官学校生徒会長。

カリスマ的美少女であるが、かなりの悪戯者。

よくモミジと組んで悪戯を仕掛ける。

統率力に優れ、高い魔力を持っている。

ナカジマ家の子供達と一緒に育ったせいかわち的には余り良くない。小さな頃から御式内と御神の剣を叩き込まれている。

多彩な魔法が持ち味、性格的にはヴィヴィオとヴァロットをミックスした感じ

物怖じしない大胆不敵な性格と言うべきか？

未だにピーマンが克服出来ていない。

CG テイント・ペスケラ

プレオとは中学の頃からの付き合い、

どっちかというと後先考えず突っ走るタイプ、

砲撃馬鹿という感じ、高町家に遊びに来る様になってなのはに鍛えられた。

高い魔力と多彩な砲撃が持ち味で、かなりの無茶をする。

槍型インテリジェントデバイス「ガ・ジャング」を持っている。

御式内杖術を習っている。

FB カエデ・ナカジマ

プレオの同級生でチームメイト。

スクラティの妹に当たる。

よくプレオと一緒に悪戯をする。

3才の頃からの付き合いでプレオと最高のコンビネーションで動ける。

小さな頃からスクラティに御式内を叩き込まれ、既に御神の剣も使う。

ISはまだ発現していない。

恐らくデルタの量産機と見られISの発現はない物と思われる。

転送能力を持っていて、エマルジョンコレクトSDを使いこなす。

かなり天然ボケな性格で、何処でも寝る。

※スクラティの妹達、スクラティも含めて発見された当初は個体識別番号がなく、

名前はなかった、スクラティの名付け親はマリーさん、
それ以外はゲンヤさんが付けた様だ。

模擬戦のチームを組む場合

生徒会Aチーム

FA イスズ・ナカジマ GW アード・ベック CG カティ・サーク
FB クロスリード・カマンサック

生徒会Bチーム

FA アヤメ・ナカジマ GW ヒビキ・ヤマザキ CG グレン・モー
レンジィ FB ラフロ・イグ

1年Aチーム

FA ジョン・ハミルトン GW ジョニー・ウォーカー CG ジャック・
ダニエル FB ブラントン・ゴールド

1年Bチーム

FA マリー・ボーン GW リン・ヤマザキ CG デュワーズ・ホワイ
ット FB エヴァン・ウィリアムス

1年Cチーム

FA バランタイン・ファイネスト GW フェイマス・グラウス C
G ヘンリー・マッケンナ FB ジム・ビーム

1年Dチーム（7代目ナカジマシスターズ）

FA ツバキ・ナカジマ GW ツグミ・ナカジマ CG サクラ・ナカ
ジマ FB ナギ・ナカジマ

おまけ

THEティーチャーズ

FAロサード GWエリオ CGティアナ FBキャロ

ティーチャーズに関しては、ロサードと雫、エリオとソリスがそれぞれ交代する事もある。

チームTN2T

士官学校最強チーム、その実力はスクール2年の中堅チームにも匹敵する。

FAモミジ・ナカジマ GW高町・プレオ CGティント・ペス
ケラ FBカエデ・ナカジマ

登場人物紹介2

管理局関係

キュベ・エリカ27才

航空武装隊現場隊長兼戦技教導官

教導隊で教え子をフルボッコにしている事が多い。

最近、士郎がお見合い話を進めている。

キュベの一族はちょっと変わっていて、ファミリーネームが先に来る一族、

更に男子は名前の前に「サン」が就く

マリエル・アテンザ

第4技術開発室室長

八神はやて40才

ご存じ！地上本部長、日々地上本部の改革に力を入れる怖い人、麻雀が得意、2児の母、管理局の最終兵器でもある。

息子タケル9才、娘ウズメ7才

ヴェロッサ・A・八神

はやての旦那、地上本部事務次官

シグナム

地上本部作戦指令室長

地上本部で唯一はやてをどつく人

クロノ総局長

フェイトの兄、総局長になってからは殆どちよい役

シャマル先生、
地上本部高度医療センター所長兼外科部長兼クラナガン大学医学部
外科教授

なのはや卒業生達から絶大な信頼をされているスーパードクター

ポメちゃん（ルイズ・ポメリー）

本局職員厚生課、職員厚生第1課長

管理局は職員の数膨大に多い為職員厚生課は1課から10課まで
有り、

それぞれに仕事を分担している。

レヴ・ゴールドアート（レヴ・ドトーヌ）執務官27才

本局警防部刑事課捜査一課所属、

捜査一課は広域凶行犯が専門の部署

ティアナがスクールの教師になる前にいた部署

ミユスカと結婚した。子供4才が居る。

最近現場復帰したばかり。

山田・錦 捜査官27才

本局警防部刑事課捜査二課所属

捜査二課は単一世界の凶行犯が専門の部署

グレイス・甲州27才

本局警防部刑事課捜査四課所属

捜査四課は窃盗犯・侵入犯が専門の部署

ミユスカ・ゴールドアート26才

本局警防部警備課スワット隊3番隊隊長

レヴの旦那、鬼の警備隊長として鳴らしている。

ヴァイス・グランセニック

地上本部警備課スワット隊現場隊長（1番隊隊長兼任）

ティアナの旦那

子供が一人いる。

クロ・デ・ロバック27才

地上本部警備課SP隊所属、SP現場隊長

スクール一期生、御神の剣を使う、他にも変身制御などを使いこなす。

リオ・ウェズリー25才

スクール4期生

教導隊教導官、近接戦闘のスペシャリスト、

毎日の様に生徒をボコる怖い教導官

スペシャルフォース

スペシャルフォースは現在5つの小隊と5名のロングアーチ、副部隊長と部隊長、融合騎1名？戦艦の整備員15名の合計43名からなる。

ヴァンサン・ロシェット1佐27才

部隊長、次元世界最強の男

現在武装隊20名を抱える。

スクールの指揮官研修を一手に引き受けている。

ミッドチルダ一の子作り名人と言われる。

エマルジョンコレクトの開祖であり、

4組の生徒にエマルジョンコレクトを教える事もある。

アマローネ・D・ヴァルポリーチェ27才

3佐、執務官にして副部隊長

ヴァロット不在時には指揮を任せられている。

「誰か嫁にもろて」

アプリリア???才、身長27センチ

ヴァロットが道ばたで拾った融合騎、

自分の名前以外何も覚えていなかった。

その後転送魔法を中心に各種の魔法を覚える。

現在はロシェット家のマスコットおよび、ブラシカのパイロットを務める。

背中にトンボの様な4枚の羽がある。

融合する事で、ロードに風系、水系の攻撃魔法を与える能力を持つ

チームウィンド…全員が神速か飛毛脚を使いこなす。速い動きからの奇襲戦を得意とする。

アンナ・ベルク1尉27才

チームウィンド小隊長、FA

御神の剣、御式内を使いこなす。

未だにバローロに振られた事を引きずっている。

チームフォレスト…全員が霞み技を使う、攻撃力は高くないが、諜報戦を得意とする。

キュベ・ユウコ（不破祐子）2尉22才、通称ユウコ

チームフォレスト小隊長、GW

不破一族の出身、魔力はない

セルジュと結婚している。

御神の剣を使いこなす。アステイ以上の霞技の使い手
まだ子供は居ない。士郎の姪に当たる。

チームファイヤ…全員高い魔力と大火力砲撃の使い手、攻撃力は非常に高い

キュベ・サン・セルジュ1尉23才、通称セルジュ

チームファイヤ小隊長、CG、スクール5期生

エリカの弟、非常に強力な砲撃の持ち主、砲撃の種類も多彩、

ビリーの愛弟子、M16のデバイスを持っている。

セカンドモードはレールガンにチェンジする。

士郎の薦めでお見合いし、ユウコと結婚した。

チームマウント…全員がエマルジョンコレクトSDを使いこなす。
防御力は最強

アヴェイ・ド・レランス1尉23才、通称アヴェイ

チームマウント小隊長、FB、スクール6期生、元生徒会会計

レットのライバル的存在、エマルジョンコレクトSD、御神の剣を使う。

防御に定評がある。

チームフリーダム…はみ出し者ばかりで構成されたチーム、だが有る意味最強。

レニエ・ロシェット1尉23才、通称レット

チームフリーダム小隊長 スクール第6期生

ヴァロットの弟、ポジションはFB

転送魔法、エマルジョンコレクトSDなどの魔法を使う、

格闘術は御式内、御神の剣、御式内一刀剣を使う。
御式内一刀剣で御神の剣と渡り合うほどの使い手
ヴァロットから貰ったバイク（バンディット1250F）を乗り回す。

ロングアーチ

グリフィス・ロウラン一尉

ロングアーチ小隊長

主に情報処理を担当している。

戦闘時はブラシカの戦況オペレーターを務める。

ルキノ・ロウラン（ルキノ・リリエ）曹長

グリフィスの妻、普段は経理事務をしている。

戦闘時はブラシカの操舵手（アプリリア不在時）をこなす。

アルト・クラエッタ陸曹

完全に行き遅れちゃった人、

普段は業務管理をしている。

戦闘時はブラシカの通信士、

プティ・シッド一等陸士20才

士官学校卒

普段は労務管理が仕事

戦闘時はブラシカの測的手兼砲撃手（アプリリア不在時）

シノン・ピカセ2等陸士19才

高卒、普段は庶務（雑用）係

デバイスマスター3級を所持

デバイスの簡単な修理や調整程度なら出来る。
戦闘時は、オフィスの留守番

108部隊

ヴィーニャ・御神（ヴィーニャ・デルマル）27才

旦那の名前は御神誠二（御神誠の息子）

子供3才と2才が居る。

現在育児休暇中、

キアンティ・クラシコ27才

第8警防署警部

現在結婚相手を探している。

登場人物紹介3

次元航行隊

フェイト・T・ハラオウン40才

次元航行隊筆頭提督（実質的な部隊長）
娘セシル9才が居る。

家はなのはの隣だったりする。

カルロ・T・ハラオウン（カルロ・ロッシ）

フェイトの旦那、最近はフェイトさんの尻に敷かれる生活らしい。

カレル・ハラオウン25才

次元航行隊の一提督、執務官兼任、

ハラオウン家の跡取り息子

間もなく静音と結婚秒読み段階と言われている。

スクール三期生にしてエリート中のエリート

何でもそつなくこなしている。

御神の剣、御式内を使いこなす。

リエラ・ハラオウン25才

次元航行隊の一提督、執務官兼任

現在士郎がお見合い話を進めている。

スクール3期生

御神の剣、御式内、エマルジョンコレクトSDを使いこなす。

バローロ・R・ブツシア27才

次元航行隊特殊部隊SEALS部隊長、

ブラシカ型2番艦キャノーラ提督、執務官兼任

かなりの遊び人との噂有り

SEALS武装隊はスクール出身者ばかりで固めた最強の特殊部隊。
武装隊50人からなる。

ロラン・ジェリド26才

次元航行隊特殊部隊SEALSの現場隊長、執務官兼任
ヴィレと結婚した。

現在子供が二人いる。

ヴィレ・ジェリド（ヴィレ・クレッセ）26才

次元航行隊特殊部隊SEALSの現場副隊長
隊員達からは姉さん^{あね}と呼ばれる。

子供が二人いる。

ヘレン???才

SEALSが以前急襲した違法研究施設にいた融合騎、
全部で6人居た内の一人、他は次元航行隊の別の部隊へ就職、
今はキャノーラの操縦要員

ネロ・ハラーナ（ネロ・ダヴォラ）27才

次元航行隊機動兵器部隊部隊長

機動兵器運用艦ラベルダ提督、執務官兼任

フィノと結婚した。子供が3人いる。

フィノ・ハラーナ27才

次元航行隊機動兵器部隊現場隊長

現在カトリーヌちゃんは、Zガンダムからストライクガンダムへ外
装が変更された。

次元航行隊機動兵器部隊…疑似モビルスーツ22機、サポート武装隊28名からなる。

他に整備士58名、艦橋スタッフなど入れると130名からなる部隊
疑似モビルスーツは隊長機がストライクガンダム、副隊長機がストライクルージュ

隊員は、ガーナード・ザク・ウォーリア又はザク／ファントムとなる。

疑似モビルスーツ…召喚獣「イド」にモビルスーツの外装を被せた物に、

コクピットを組み込み、操縦できるようにした物。

何故疑似モビルスーツなのかというと、魔力炉は幾ら小型化しても、モビルスーツに組み込める大きさまでは小型化が出来なかった。

またジュエルシードの様なエネルギー結晶では出力が小さすぎて、モビルスーツは動かない。

ではジュエルシードを大量に使用したエネルギーパックでは？↓稼働時間が短い、

パック交換の瞬間をどうするのか？など問題が多い他、

動力伝達システムの開発など膨大なコストがかかる。

しかし、イドならそう言う手間が一切無く、栄養剤を与えておけば死ぬようなことは一切無い。

開発コスト、パワー、扱いやすさから着ぐるみモビルスーツを機動兵器として用いる事にした。

万が一の魔力切れがない様に、大型エナジーパックを8機搭載している（全ての疑似モビルスーツに共通）。

また、宇宙空間での使用を考え、大型酸素ボンベを搭載しており、宇宙空間での戦闘は、最長36時間可能である。

また、ガーナード・ザク・ウォーリアは砲撃専用に背中に大型魔力タンクを背負っており、

数万発の大火力砲撃を可能にしている。

なお、疑似モビルスーツには共通して、A N F装甲、エマルジョン
ジョンコレクトS Dが組込まれており、
操縦出来れば誰でも攻防一体の強い魔導士になれる。

ユニゾンリンクシステム…現在疑似モビルスーツ用、戦艦用の2種類が確認されている。

このシステムは、機体と操縦者の感覚を共有させる物で、
掴んだ物を握り潰したりしない様に繊細な感覚を操縦者に自分の感覚として認識させる他、
損傷を受ければ痛みとして操縦者にもダメージが来る。
要は究極の脳波操縦システムである。

ただし、シンクロ率を上げすぎると融合事故を起こすという欠点がある。

現在はリミッターが設定され事故は基本的に起きなくなった。

（パイロットがリミッターを解除した場合、事故が起きる事もある）
ユニゾンリンクシステムの効果その2として、

召喚獣とマスターの魔力値を足して2倍しただけの魔力を出すことが可能で、

相当な攻撃力を持たせることが出来る他、マスターと召喚獣の間で魔力を循環させて、

長時間に渡って高い魔力を維持する事が可能。魔力切れの心配は皆無。

このシステムは、ユニゾン適性のある人間にしか操縦出来ない。

登場人物紹介4

日常関係

高町家

高町士郎

今は年金生活者、ミッドチルダに引っ越してからも一族の為にお見合い話をあちこちで進めている。

住所はクラナガン88番街27-1（ヴァロットの家の近く）

高町桃子

士郎の奥さん、翠屋ミッドチルダ店をオープンさせ軌道に乗せる事に成功した。

翠屋の実質的経営者、

高町美由希

二人の子供が居る。

士郎の養女、次期翠屋店主

高町吉行

美由希の旦那、御神一族の出身、（旧姓鮫島）

バニングス貿易の社員、かなりのエリート

今は次元世界同士の貿易に携わっている。

高町小雪17才

美由希さんの長女、クラナガン大学2年、

次期御神当主に決定した。

龍鱗を美由希から受け継いでいる。

御神の剣を使えばほぼ無敵。

美由希以上の使い手らしい。
因みに美由希さんの子供だから「小雪ちゃん」と付けたのは、なのはだ。

高町沙由紀15才

美由希さんの次女

次期翠屋の跡取り、現在クラナガン第一高校2年、
母と姉から御神の剣を叩き込まれている。

翠屋は、現在かなりの繁盛を見せている喫茶店兼、スイーツ屋として
ミッドチルダグルメ界からも注目を集めている。

月村家

月村恭也

士郎の息子、月村財閥総帥、

現在、次元世界に事業展開を広げつつある。

月村忍

恭也の妻、三人の子供が居る。

月村雫26才

月村家長女、現在結婚相手を物色中。

スクールの教師、御式内、御神の剣を教える。

月村拓也25才

月村家長男、次期月村財閥総帥、士郎がお見合い話を進めている。
八景を恭也から受け継いでおり、次期不破流当主でもある。

月村静音24才

月村家次女、御神の剣はかなりの物、近々カレルと結婚する？

月村鈴香40才

現在は結婚してドイツに暮らす。

月村傘下のヨーロッパ支部を取り仕切る。

子供が二人いるらしい。

ファリン&ノエル

月村家のメイド

ロシエツト家

ヴァンサン・ロシエツト1佐27才

スペシャルフォース部隊長、スクール2期生

2代目生徒会長を務めた。

次元世界最強の男であり、8人の子持ちである。

アステイ・ロシエツト27才

ヴァロットの妻、子供が8人いる。

スクールにいる頃長男を身ごもった。

もう生むのは限界との事で最近は避妊している。

現在スクールの特別講師、教導隊に教えに行く事もある。

グルナツシュ・ロシエツト9才

ロシエツト家長男、両親から御式内と転送魔法を習っている。

デトウール・ロシエツト8才

ロシエツト家次男、両親から魔法と御式内を習って居る。

スアーニャ・ロシエツト7才

ロシエツト家長女、両親から魔法と御式内を習って居る。

ジョセフ・ロシエツト6才

ロシエツト家三男、今年から魔法と御式内を習い始めた。

ルアンヌ・ロシエツト

コリーヌ・ロシエツト

ロシエツト家次女および三女

ともに5才、双子、両親以外に見分けられない。

フレデリック・ロシエツト

クロード・ロシエツト

ロシエツト家4男及び5男

ともに4才、双子、

メルキュレ・ロシエツト

ヴァロットの父、腕の良い漁師、

時々孫の顔を見に来る事を楽しみにしている。

ドメーヌ・ロシエツト

ヴァロットの母、肝っ玉母さんぶりは健在

マチュウ・ロシエツト29才

ヴァロットの兄、腕の良い漁師、

ヴァロットの所へ時々魚を届けてくれる。

現在は結婚して3人の子供が居る。

ジョエル・ロシエツト25才

ヴァロットの弟、次元航行隊所属、
旗艦クラウディアの操舵手をしている。

次元航行隊の寮（本局）に暮らす。
結婚相手を物色中

レニエ・ロシエツト23才

ヴァロットの弟、スペシャルフォース所属、
フリーダム小隊の小隊長
マンションに一人暮らし
やりたい盛りのお年頃

アプリリア

道端に倒れていた（落ちていた、ヴァロット談）所を助けられ、
ロシエツト家に居着いてしまった融合騎、

現在ロシエツト家の居候兼スペシャルフォース隊員

ヴェレナーさん、ミツシエルさん、ユツファアさん

ロシエツト家に住み込む3人のメイド、非常に忙しい日々を送っている。

三人とも下世話な話が大好き。

パビイ

雄、アステイの召喚獣、基本的に何もしない。
子供達の遊び相手にはなってくれる。

居間のソファの上が指定席、

ジライオウ

2匹いる。

ヴァロットとアステイのそれぞれの召喚獣
ただ飼っているだけになってしまった。

外の厩舎に一部屋ずつ貰ってそこで暮らしている。

スプマンテ家

シャルル・スプマンテ29才

あの後社員と結婚、二人の子供が居る。

スプマンテ鉱業社長、アスティの姉

ビアンコ・スプマンテ

スプマンテ鉱業会長、アスティの父

その後、スプマンテ鉱業は次元世界に君臨する巨大鉱山会社に成長した。

ナカジマ家

ゲンヤ・ナカジマ67才

今は良いお爺ちゃん、孫達の面倒を見つつ、お爺ちゃんライフを楽しんでいる。

士郎とは時々将棋を指したりしている様だ。

ギンガ・ナカジマ三佐37才

あれから結婚して3人の子供が居る。

ナカジマ三佐と言えば今はギンガさんを差す。

陸士108部隊部隊長

スバル・ナカジマ35才

本局防災局総務課長、かなり出世しました。

息子レオ10才、娘ハヅキ10才がいる

ヴォルツ・ナカジマ

スバルの旦那、相変わらず防災司令センターの所長をしている。

ノーヴェ・ナカジマ

あれから結婚して二人の子供が居る。

現在第八防災署の防災指令（現場隊長）

ウエンディ・ナカジマ

あれから結婚して3人の子供が居る。

現在第七防災署の防災指令（現場隊長）

デイエチ・ナカジマ

あれから結婚して子供が一人いる。

現在第九防災署の防災指令（現場隊長）

チンク・ナカジマ

108部隊の捜査官の一人、頭脳労働担当。
もの凄く切れる頭で犯人を追い詰める。

スクラティ・ナカジマ（27才）

108部隊捜査官（現場担当）、

108部隊最強の使い手、妹や甥、姪達に御式内と御神の剣を教えている。

EC兵器や、大規模テロに対する切り札、地上のエースオブエースとも呼ばれる。

シヤマルがお見合い話を進めている。

ナカジマ家は、現在あまりに人数が増えすぎてしまい全てを紹介する事が出来ません。

申し訳ない。m（　　）m
ただ、この一族ちょっと変わっていて、一つ屋根の下で全員生活を共にしている。

その方が子育ての効率が良くて、育児休暇を取る心配がないのだそう
うだ。

因みに、家はもう一棟建て増しし、1階部分が繋がっている。
総勢81名で生活している。ミッド一の大所帯だ。

聖王教会

カリム・グラシア

ヴィヴィオ様の秘書長をしている他、

希少技能『プロフェーティン・シュリフテン』を教えている。

シャツハ・ヌエラ

聖王教会を裏から取り仕切る怖い人。

高町・ヴィヴィオ・ゼーゲブレヒト

聖王にして教会最高司祭、管理局名誉統括官（総務統括官）

非常に忙しい日々を送っている。

最近のプロフェーティン・シュリフテンを覚え、カリム以上に使いこなす。

アーサー（アインハルト）と結婚し、娘（ステラ5才）が居る。

アーサー・クラウド・グリアム・ストラトス・イングヴァルト（ハ
イディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルト）

名前なげーよ！（因みに王様は結婚しても名前が変わらないってル
ールがあるの知ってた？）

ヴィヴィオの旦那、まあ、王位は継げないけれど、それなりの地位

にはある。

聖王特別警護隊部隊長も務める。

高町・ステラ・ゼーゲブレヒト5才、
ヴィヴィオの娘、小さい頃のヴィヴィオにそっくり。
もの凄いいかん坊、本を読むのが大好き。

コロナ・ティミル

プライベートではヴィヴィオと名前で呼び合う仲、
聖王特別警護隊1番隊隊長。

セイン、ティード、オットー

教会騎士3人衆、シャッハの忠実な部下

オカマバージェリーフィッシュ

オカマバー「ジェリーフィッシュ」のママ

「キャサリンって呼んでね？」

地上本部前駅のすぐ近くにあるオカマバーのママ、
筋肉ムキムキで、しゃべりはパプワくんのキモいでんでん虫、
かなりやばいキャラだ。

正体は、武装隊を辞めたあの雷使い。まさかあの人が……

この手のキモイキャラを全く受け付けられないシグナムにとって天敵

シャルルマーニュさん

この人も武装隊を辞めた口、今はジェリーフィッシュのホステス？

「もう、どんだけえ〜？」が口癖、シグナムの天敵

バー・モンサンミシエル

86番街にあるバー、翠屋とは道を挟んだ反対側にある。
良くヴァロットが飲みに来ている。

マルジナルさん

バーテンダー兼店長

何故か裏の世界に精通している。

レ・ミレリ

ホステス、21才

その他

怪盗ジャヌヴィア

誰も素顔を見た事のない泥棒、盗みの腕は超一流。

変身制御、幻術の使い手で誰にでも何にでも化けられる。

他にも転移・転送魔法も使いこなす。

今の所直接人を傷付けたという報告はない。

依頼を受けて盗みを働いたり、盗んだ物を売り捌いたりしている。

宇宙人ジョーンズ

何故かミッドチルダ調査中

プロローグ（前書き）

ヴァロット達の卒業から10年、

スクールは開校から12年目の夏を迎えようとしていた。

そして今年も元気の良い1年生達がしごかれる。

強くなる為に、その強さを持って何をするべきかを学ぶ為に

プロローグ

「コラあああああああ！おまえらあああああああ！
毎年の事ながら一勝も出来んとは何事かあああああああああ
あ！」

ビリー先生が怒鳴っている。

ここに入学して2ヶ月と少し、初めての模擬戦大会は惨憺たる物だった。

2年生強すぎだよお！何であんなに化け物ばかり揃って居るんだか？
お陰で私たちは地獄を見た。
完膚無きまでにフルボッコ、浴びせかけられる言葉が厳しかった。
生まれて初めての挫折、結構強いと思っていた自分が弱すぎて話にもならなかった。

「さ、流石にばてる事はなくなったけど、体力強化授業はきついよね？」
（リン）

「リンは良いわよ、まだエリートだし私達の中じゃあ最強だもん」
（マリー）

「お兄さんは結構ハンサムだし、生徒会副会長だし、サムライの血筋なんですよ？」
（ツバキ）

「ま、まあそんなとこかな？」
（リン）

私達は午前の授業を終えて今シャワーを浴びて着替える所だった。
私はリン・ヤマザキ（山崎凜）お兄ちゃんとはビキ・ヤマザキ（山崎響）生徒会の副会長をしている。

因みにお父さんは元次元漂流者で、山崎白州やまざき・しらくと言う。

97番世界にある日本という国の出身で、元刑事、北辰一刀流7段の剣術使い。

今は、本局、地上本部、教導隊を回って剣術を教えている。

お母さんは管理局の魔導士ラヴィーユ・ヤマザキ、今は前線を離れて教導隊の教導官をしている。

昔、校長先生に鍛えて貰った事があるんだって。航空防衛隊にいた時は同僚だったらしい。

私達兄妹は、物心付く前から剣道を教え込まれ、それなりには強いと思っていた。

確かにミッドチルダの大会では優勝する事さええさへ何度もあった。でも、お父さんに言わせるとまだまだ弱いとか、まだ未熟だとよく言われたけど、

まさかここまで弱かったとは思わなかった。

ちよっとと言うか、相当凹んだ。

この学校に入ってから驚きの連続だった。

いろんな武術を教えて貰える。

ここの学校ではまともな勉強は教えてくれない、教えてくれるのは強くなる為の方法だけだ。

まあ、執務官を目指している人には法務関係の勉強を教えてくれるし、

アルケミックを身に着けたい人には物理学を教えてくれる。

でも基本的は勉強を教えてはくれない。

それに先生達はみんな化け物ばかりだし、強くない方が可笑しいかな？って言うぐらい凄い所だ。

それにここの卒業生の先輩方は凄い人ばかり、次元世界にその名を知られた人ばかりだったりする。

中でもスペシャルフォース部隊長ヴァンサン・ロシェット一佐は、次元世界最強の使い手として知られている。

何でも来月行われる指揮官研修適性試験に受かると3月まで授業があるそうだ。

お兄ちゃんはその人を神をも超える化け物だって言ってた。どんな人なんだろう？

「ぐふふふふ、良い眺めですなあ？」

「全く」

小さな穴を覗いて喜んでいるスケベが二人……彼らはまだ身に降りかかる不幸を知らない。

「！（リン）

「どうしたの？リン」（サクラ

「のぞきよ！」（リン

「やべ！見つかった」（ジョン

シュパッ シュパッ

その瞬間、直径30センチほどに丸く切り取られた天井が2カ所、そこから二人が足を踏み外して宙ぶらりんになる。

丁度胸の所で引っかかって止まった感じだ。

服装からして男子だ、リンが飛梅を振り抜いていた。

「まあ、誰だかは分かってるけどさあ、このまま帰すのも勺よね？」

「やっちゃう？」

「やっちゃいますか？」

女子達の手がベルトに伸びる。

「うあああああああああつ！やめて！やめてくれえええええええつ！」（ジョン）

「たっ、助けて……」（ブラントン）

ズボン所かパンツまではぎ取って、晒し者に……

「まあ、こんな事で縮み上がっちゃって可愛い」

「引っ張ると結構伸びるわよ？」

「何処まで伸びるのかしら？」

「うあああああああああ！引っ張るなあああああ！引っ張らないでくれえええええええ！」（ブラントン）

「ブラントン、この恨みは次の大会で必ず晴らすぞ？」（ジョン）

「おお、必ずはらしてやる！」（ブラントン）

馬鹿二人は手に手を取り合って堅く誓い合った。

「……たく、覗きがばれた挙げ句散々遊ばれてここに突き出され

たと……」

俺達は校長先生の前で正座させられてお説教だった。

「はぁ、頭痛い」

なのはは流石に困っていた。

この所何年かはここまでの馬鹿は居なかった。

元気が良いというか、アホというかこれはまた随分と手を焼かせてくれる。

こんな馬鹿は開校以来の事じゃあないだろうか？

いや、あの時の4馬鹿よりも更に激しい馬鹿、何でこんなのを入学させてしまったのだろう？

そう考えると頭が痛い、この先どうやって教育しようかと悩むのはだった。

「いい加減学習しなさい、覗きは犯罪です、それに毎回ワンパターンの様に捕まるし、

このまま行くと初の退学者にしますよ？」

「……」

「まあ良いです。今日から補修メニュー3倍の刑にしますから」

校長先生、それ洒落になっていません、ただでさえ毎日補修なのに、そんな事をされたらそれこそ死にますよ。

こうして馬鹿二人は更なる補修を追加されて今日もお説教を受ける。そして最後の仕上げはディバインバスターでどこか遠くの方まで吹っ飛ばされる毎日を送っていた。

午後からの授業、スクールは5年前からその授業内容を大きく見直していた。

クラスやコースによって必須授業がある物の自由に自分の学びたい武術を選択できるようになっていた。

ただし、召喚士には転送・召喚の授業は必須だし、御式内の習得が義務付けられていた。

3組はビリー先生の射撃の授業を毎日一時間、必ず受講だし、執務官コースの生徒は執務官試験対策講座を受ける事になっている。これにより、自分に合った武術を学びより質の高い人材を送り出せる体勢を取れる様になった。

スクールは開校から12年、その教育機関としての価値を管理局に認められ、

今や無くては成らない重要な人材育成機関となっていた。

プロローグ（後書き）

次回…生徒会から1学期の残りの予定が発表される。

一方、ヴァロットが講師として授業にやってくる。

恐怖の洗礼（前書き）

特別授業にヴァロットが呼ばれた。
毎年恒例の恐怖の洗礼が始まる。

恐怖の洗礼

馬鹿二人を職員室に突き出した私達は、お昼を食べていた。

「あれ？メール入ってる？生徒会からだよ、ホームページ更新しましただって」（リン）

「重要なお知らせもあるみたいだよ」（サクラ）

私達はデバイスを取り出してメールを確認する。

「嘘お、何この強行日程」（ツバキ）

7月5日、執務官補佐採用試験、

7月10日、指揮官適性試験、キャリア幹部採用試験（選拔者のみ）

7月18、19日、模擬戦大会（一般参加有り）

7月20日、終業式

8月5～10日、林間学校

9月1日、始業式、体力測定、魔力測定

「林間学校やるんだね？」（ナギ）

「次の模擬戦大会まで1ヶ月ちょっとしかないよ？今度こそ1勝しないとまたきつい補習が来るよ？」（リン）

私達は強くなるしかなかった。

今のままでは弱すぎる、こんな事じゃあいつになったら勝てる様になるか分からない。

「あ、あの馬鹿達だ、泳ぐの随分早くなったね？かなり遠くまで飛ばされたのに」（ツグミ）

ジョン達はスクールの前までようやく泳ぎ着いていた。

その様子を見つめる女子達、学食の窓からそんな様子が見て取れる。

「ち、畜生、随分遠くまで飛ばしやがって、もうすぐ昼休みが終わっちゃう」（ジョン）

「つ、疲れたああ！」（ブラントン）

この二人、さっきのディバインバスターでクラナガン湾の真ん中近くまで飛ばされたらしい。

こうしてそれぞれの昼休みは終わっていった。

そして午後の授業、いつもならそれぞれの武術に分かれて授業なのだが今日は違っていた。

先生方も緊張している。

そう、今から海上訓練施設を使って特別授業だった。

「良いかおまえ達、今から稽古を付けて頂くのは次元世界最強の男だ。

今日は非常に忙しい中、時間を作って頂いた。

今から特別授業をして頂く、おまえ達もその強さを感じて少しでも近付いてみる、

あの神をも超えると言われる強さを身をもって体験してみる、

まずはその強さを感じてそれ为目标にしてみる、いつか必ずあの強さに追い付いて見せろ！」

ビリー先生はそう言つて、生徒達に檄を飛ばす。

「よう、俺がヴァンサン・ロシェットだ、ヴァロットと呼んでくれ」

そこにやって来たのは、ちよい悪親父風な男だった。

怖そうだけど、そんなに強そうに見えない。

でも、それはまだ1年生が知らないだけの事、今からその恐怖の洗礼が始まろうとしていた。

生徒会長のクロスリードはそんな様子を職員室から眺めていた。
今彼はティア先生の下で補佐をしながら執務官を目指している。

「あの恐怖は尋常じゃあないからな、あいつら何処まで耐えられるかな？」（クロス）

「あら？クロス君どうしたの？」（ティアナ）

「いや、今からヴァロット先生の授業なんですよ、今年の1年はどれだけ耐えられるかなって？」（クロス）

「そっか、今年はちよつとあの授業の日が遅れてるもんね？
でも毎年の事ながらあの洗礼はきついよね？」

これで逃げ出したり気を失ったらもう落ちこぼれ決定だもんね？」
（ティアナ）

二人で職員室の窓から海上訓練施設を見下ろす。

その時だった。

ヴァロットはリミッターを解除してフルドライブする。

巻き起こる巨大な魔力はミッドチルダその物を振るわせるほどの力

を見せ付ける。

1年生達にとって、信じられないほどの物だった。まさに化け物、戦ったら確実に殺される、いや塵も残さずに消されるほどの力だ。

1年生達はその圧倒的な力の前に茫然自失だった。

このスクールに残る伝説の先輩、クラナガンの悲劇の主人公として、このスクールに来て最高に強くなった男として伝説に名を刻む男、伝説のイージスは生徒達にその力を見せ付け自分達の弱さを噛み締めさせる。

更に居竦みを放つヴァロット、先生達はどうにか耐えるが当然1年生では耐えられない。

その恐怖に動く事も声を出す事も出来ずにいた。

そしてヴァロットはリミッターを元に戻す。

すっかりその魔力に当てられた1年生はもうその場にへたり込むしかなかった。

「おいおい、これからが特別授業の本番なのに、こんな事じゃあダメだぞ、

本気で強くなりたかったらこのくらいの恐怖を克服して見せろ！」

「すっげー、何だ今のは？俺達も頑張ったらあそこまで強くなれるのか？」（ジョン）

やたらと元気な馬鹿が一人いた。

「おっ、今年は見込みのある奴が居るな？」（ヴァロット）

（何だよ？あのバカは？あの怖さが分からないのか？）

1年生達はそう思った。

でもヴァロットの意見は違う物だった。

強さに対する憧れが居竦みの恐怖から一瞬で立ち直る事が出来た要因だった。

「こいつは今は滅茶苦茶弱いけど、鍛えれば幾らでも強くなる、鍛え方によってはかなりの強さを手に入れるだろう」

後から職員室でそう語っていた。

「さあ、授業本番だ、40人ずつ相手をしてやる、かかって来い、ハンデとして魔法は無し、居竦みも使わん、それにこれも使おう」

そう言ってヴァロットは目隠しを取り出した。

目を塞ぎ、木刀の小太刀を持って生徒達の前に立つ、普通これで相手の攻撃をかわす事など不可能なのだが、それが出来る所がヴァロットの凄さだった。

それぞれ10チームずつヴァロットを囲む、そしてデバイスを構える物の、

簡単には攻撃出来ない、まるで隙がない。

それでも飛びかかったのはジョンだった。

その瞬間簡単に腕を取られ一瞬で投げられる。

まるで歯が立たない、他の連中はそれを見て慎重になる。

結局全員打ち倒された。

「嘘だ、見えていないのに何で攻撃が見えるんだ？それにあの速さは一体？人間の強さじゃあない！」

1年生達はその強さを味わって戦慄する。

強いとか怖いとかそう言うレベルじゃあ無かった。

強さその物の質が違う、強さの桁がまるで違う、

このスクールの模擬戦なんてお遊びに見えるほど強い。

「あれが伝説の勇者イージス」

今年の1年生達にもその強さは刻まれた。

「おまえ達、今度の指揮官研修適性試験に通った者はヴァロット先生の授業を受けられる事になる。
心して試験に臨む様に」

ビリー先生はそう言って授業を締めくくった。

「ご苦労さん、ヴァロット」

ロサードはそう言って声を掛けた。

「どおだ、定時上がりなんだろう？ 飲みに行かないか？」

「そうだね、飲みに行きたい所だけど……ソリスが許してくれるかな？」

「おまえ最近は尻に敷かれてるのな？」

「そう言えばアステイは？」

「今日は教導隊でエマルジョンコレクトの授業だ」

「二人とも相変わらず忙しいね？」

これがヴァロット達の日常だったりする。

放課後の海上訓練施設、

「さあ、今日はアクセルシューターを防ぐ練習だよ？」

その瞬間上空に現れる無数の魔力弾、何万発有るのだろうか？

「ひええええええええええつ！ お助けええええええええええええええええ！」

ジョン達はその厳しい洗礼を浴びていた。

恐怖の洗礼（後書き）

次回…クロスリードとヒビキがヴァロットを語る。

ヴァロットを語る（前書き）

「リン、今日は怖かっただろう？」（ヒビキ

お兄ちゃんはそう話しかけてきた。

「怖いなんて物じゃあないよ、何？あの化け物？あれでも本当に人間なの？」（リン

「って言うかあのバカでかい魔力は何？どうやったらあんな化け物になれるの？」（ツグミ

ヴァロットを語る

「お兄ちゃん、一緒に帰ろ？」（リン

「ああ、良いけどまた団体か？」（ヒビキ

「そうなるよね？」（リン

後ろにはナカジマシスターズが揃っている。

実はこのスクールにはナカジマ家の人たちが9人もいる。

そして私の家はそのナカジマ家のご近所さんだったりする。

地下鉄の86番街で乗って東クラナガン駅で降りて歩いて15分、通学には40分ぐらいかかる。

まあ、そんなに遠くなくて楽だけど。

「あれ？クロス今日は定時上がりなのか？」（ヒビキ

「まあね、この所平和すぎてろくな事件もないし、

実習で逮捕出来る犯罪者も居ないからね、裁判ぐらい回してくれれば良いんだけど、

裁判もろくにならないから稼ぎが少なくてね？大きな民事裁判に加われると良いんだけど？」（クロスリード

そう執務官補佐になってしまうとアルバイトは出来なかったりする。

おまけに学生だし実習時間だけの労働だから月給は半額、月17万ぐらいだって、

因みにクロスさんは地上本部近くに自宅がある。

私達は生徒会活動が終わるのを待って帰る事にした。

「リン、今日は怖かっただろう？」（ヒビキ

お兄ちゃんはそう話しかけてきた。

「怖いなんて物じゃあないよ、何？あの化け物？あれでも本当に人間なの？」（リン

「って言うかあのバカでかい魔力は何？どうやったらあんな化け物になれるの？」（ツグミ

「あの人はな、スクール始まって以来の天才と呼ばれた人だ。でも始めはとんでもない落ちこぼれだったんだぞ、

入学してきた時は魔力Bクラス、格闘技なんか全く出来なかったんだ」（ヒビキ

「嘘？そんなの信じられないよ？」（リン

「嘘じゃあない、過去の模擬戦大会の映像が生徒会のホームページにあるから、

チェックしてみると良い、あの人の成長して行く様がはっきりと分かる。

どれだけきつい事をしたらあそこまで強くなれるのか？成長と成長の合間を想像してみるとよく分かるだろう？本気で強くなりたかったら先生方に聞いてみると良い、

あの人の抱えた孤独と悲しさを教えてくれる、あの人がどうして強くなったのか、

どうして強くならなければならなかったのか、その理由を知った時、自分の生きる道を見つける事が出来るだろう

？」(ヒビキ

「それに、あの防御魔法、エマルジョンコレクトを開発したり、インテリジェントデバイスのセキュリティや戦艦の防御システム何かを開発した天才だしね？」(クロスリード

「そう言えばお姉ちゃん同期生であの人と一緒に戦った仲間なんだよね？

当時の事はあんまり話してくれないけど？」(ツバキ

「そりゃそうだろう、あんな事が有れば話せないさ、第2期生の人たちは心に深い傷を抱えて居るんだ。
一番傷付いたのはヴァロットさんだ、それを抱えて生きる事の辛さを思えば誰もが口が重くなる」(ヒビキ

そう、ミッドチルダ3大悲劇と呼ばれるクラナガン襲撃事件、その中心にいた人物、
それがあのヴァンサン・ロシェット一佐、何度もTVドラマになりながら、
その実際の戦闘映像なんかはついに公開されなかった悲しいお話、
ここの生徒会に成ればその全てを見る事は可能らしいけど、
それなりの覚悟がないと見る事も叶わない、見ては行けないと言われる衝撃の映像らしい。

「それに、あのエマルジョンコレクトはあの人の魂なんだよ、あれは守る為、誰も死なせない為に作られた最強の防御魔法だ。
その理念からして凄と思うよ、誰も傷付けない、傷付けさせない為に作られている。

でも、今使っているSDと真・エマルジョンコレクトは違うらしい、真・エマルジョンコレクトには危険極まりない魔法が入っているか

ら簡単には教えてくれないし、プログラムさえ貰えない、まだ真エマルジョンコレクトを許された人は数えるほどこしか居ないんだ。

だから俺はそれが欲しい、それを許されるだけの使い手になりたい、あの人の横に肩を並べたい」(クロスリード)

何かクロスさんてこの話になると熱いよね？

でも、それだけ凄い魔法だという事はよく分かる。

開発した本人以外で許されているのは4人だけ、使い手の少ない、希少な魔法で簡単には許して貰えない事もよく分かる。

奥義を教えて貰えないのと同じ事だと思う。

逆にそれを許して貰えるという事は、師匠にそれなりの人間だと認められたという証、

それだけ出来る人間になったという証、クロスさんはそう言う人を目指して居るんだ。

「さあ、着いたぞ、じゃあなクロス、また明日」(ヒビキ)

「ああ」(クロスリード)

こうして私達は帰宅した。

(強くなるか？ 一体どうやったら、どれだけの努力をしたらあそこまで強くなれるんだろう？)

入ったばかりは私より遙かに弱かったのに……それに、クラナガンの悲劇ってどれ位の惨劇があったんだろう？)

私はまだ小さかったし、あの時は本局に住んでいたから何も知らない、

ただ、ミッドに来てから時々感じる巨大な魔力の正体があの人だという事ははっきり分かった。

お父さんもお兄ちゃんもこう言う、「人は悲しみを乗り越えて何倍も強くなる」と……

その頃、

「海上訓練施設15週って洒落になんねーぞ！」（ジョン

まだ補習中のジョン達2名だった。

「しかし、凄いよね？ どうやったらあれだけ強くなれるんだろう？」（ブラントン

「わかんねーけど、もの凄い努力をしたって聞いてるぞ？」（ジョン

「ビリー先生か校長先生に聞いてみる？」（ブラントン

彼らは知らない、人の何倍も課せられた補習が自分達を強くしている事を、

そしてやがて知る事になるヴァロットの悲劇を、それを知って自分の向かうべき道を、

それを知る時、彼らは強さの階段を上り始める。

彼はやがて強くなる覚悟を知る事になる。

その覚悟を知り、努力する大切さを知る時彼らは新しい伝説を紡ぎ出す。

それはやがてスクールの伝統になっていく、そうやって強さを、その強さを持って人を救い悪を挫く心を伝えていく、

そうやって管理局はどんどんレベルアップしているのだ。

ヴァロットを語る（後書き）

次回..授業の様子を公開

強くなる為に（前書き）

あいつの違った所はあくまで勝ちに拘る姿勢だった。

強くなるために欲しい魔法があれば先生方に聞いて歩いた。

教えてくれるまでは絶対にその場を後にしなかった。

格闘技にしたってそうだ、

新しい技を教わる為に教えられた事を出来るようになるまで練習を止めない、

出来るようになれば新しい技を教わりに来る。

そして、自分より強い奴を倒すための方法を常に考えていた。

強くなる為に

今日も朝からきつい授業。
その中でビリー先生は語る。

「お前たち、よく聞け、あのヴァロットは入学当時は今のお前たちより遙かに弱かった。

でもな、あいつは絶対に負けなかった。

実際に負けたのは2回だけ、それ以降は誰にも負けていない。

負けなために、勝つために努力し続けたんだ。

勝つために、何をすればいいか？ 負けなためにどうやったら良いかを考えることに長けていた」

「先生、実際の所それは才能だと思います。

才能のない人間にとってそれを考えることは不可能だと思います」

生徒の一人がそんなことを口にする。

「馬鹿者！ 才能なんかじゃあないんだよ、

あいつの違った所はあくまで勝ちに拘る姿勢だった。

強くなるために欲しい魔法が有れば先生方に聞いて歩いた。

教えてくれるまでは絶対にその場を後にしなかった。

格闘技にしたってそうだ、

新しい技を教わる為に教えられた事を出来るようになるまで練習を止めない、

出来るようになれば新しい技を教わりに来る。

そして、自分より強い奴を倒すための方法を常に考えていた。

勝つことに対する貪欲さが誰よりも強かった。ただそれだけだ。

でも、ただそれだけの事すら出来ていないお前たちでは勝つことは

できない、

勝ちたかったらもっと貪欲になって見ろ、
どんなせこい手を使っても勝つ位のことを考えてみろ、
それが出来て初めてあそこまで強くなれるんだ」

1年生達にとってそれは、最も大切な、そして自分達にとって一番必要なことだった。

そう、確かに授業だけでもそれなりには強くなって行く、
しかし、それだけでは大した強さにはなれないのだ。
そしてあの恐怖の洗礼は、この話の為の布石だったりする。

次の模擬戦大会まで後一ヶ月と少し、彼らにとって本気で鍛えるには良い機会だった。

こうして、また彼らは強さの階段を上る、遙かなる高みを目指して、その頂に居るあの人を目指して強くなることを学んできた。

でもそれは遠く困難な道であることには変わりなく、

彼らは自分たちの弱さを噛み締めながら、せめて1勝出来るだけの強さを目指して汗を流す。

でも、彼らは知らない、今年もまたとんでもなく強いのが出てきていると……

「特にジョン、お前は覗きなんかやってる暇は無いだろう？」

お前らは授業が遅れているしな？

午後の授業は遅刻したり、へばったりするなよ、

強くなりたかったらそんなことをしている暇なんか無いぞ！

強くなる為の努力こそ最も時間の掛かることなんだ」

ビリー先生にまで釘を刺されるジョン、彼もまた強くなる為にこの学校に入ってきた人間、

これ以上負け続ける訳にも行かなかった。

そう、それは2年前のこと、ジョンは元々ストライクアーツをやっていた。

道場では若手ナンバーワンと言われ、クラナガン代表戦をも制した。でもそれだけだった。

大陸選手権5位、そして迎えたミッドチルダ代表戦では完膚無きまでに叩きのめされた。

手も足も出なかった。

毎年の事ながらスクール代表は、特別枠でミッド代表戦にしか出てこない。

相当世間を舐めていると思った。

でもそれは違っていた。

強すぎて相手になる人間が居ないから、最初から出てしまうと大会がそこで終わってしまうから、

それ故の特別枠だった。

強いと思っていた自分がまるで相手にならず、10秒持たずに完膚無きまでに叩きのめされた。

悔しかった、でもそれは仕方のないこと、自分が弱すぎるから負けたのだ。

彼は思った、強くなる為にはスクールに入るしかない、このリベンジはスクールに入ってすれば良い、

このスクールに入って強くなり、今度こそミッドチルダを制してみせる。

この星ナンバーワンになってみせると……

そして昨日、目指すべき強さを見つけた。

それは人知の及ばない桁外れの強さ、こんな化け物がここに居ようとは思わなかった。

それと同時に考えた、どうやったらそこまで強くなれるのか？と……

その日のお昼前、ジョン達は珍しく覗きをしなかった。
いや、そんな余裕はなかった。

これ以上授業で遅れることは許されない、誰にも負けるわけにはいかないから、

そんな余裕の無さが彼らを追いつめていた。

「変ねえ？そろそろあの子達が突き出されても良い頃なのに？」

バスターをぶっ放す気満々で待っていたのはにとって肩透かしだった。

ジョン達はこの時模擬戦大会の映像をチェックしていたのだった。

その日のお昼、私たちはほとんどの1年生達は模擬戦大会の映像をチェックしながら
お昼を食べていた。

「なんか最初の方って、ガキの嫌がらせだよな？
蛇や蛙をぶついたり、ジライオウを餌で釣ったり、
やってることがセコ過ぎて涙出てくるわ」

「でも2学期からはかなりパワーアップしてるね？
夏休みの間に相当鍛えたみたい？」

「仕入れた情報だと、夏休みの間に実戦を経験したみたいよ」

「私たちに実戦は無理だよ、人を殺すかもしれないんだよ？
そんなことはとても出来るとは思わないし……」

「1期生、2期生、3期生の人たちは実際やったらしいよ、
その時何人もの敵を殺しているって言う話もあるの」

「なんか住んでいる世界が違いすぎてピンと来ないな？」

「でも、大会を重ねる度に強くなってる。もの凄い成長力だよね？」

「ヴァロットさんて生徒会長になったんだ？」

「その後は12月まで大会に出ていないんだね？」

「でもこの時には化け物のような強さになっている！」

「一体どうやってここまで強くなれるの？この間に有った事って……？」

「クラナガン襲撃事件だよ、あの悲劇の時、

それと引き替えに化け物じみた強さを手に入れたんだよね？」

「ドラマでもやってたし……」

「でもあれってTV局の人が作った話なんだよね？」

「真実は未だに公開されていないし……」

やはり1年生達にとってあのクラナガン襲撃事件以降、12月迄に何が有ったのか？

それが一番気になる所だった。

一方ジョン達

「くそう、モザイクが邪魔で見えそうで見えん」

「でも一つだけはっきりしたよね？覗きで捕まれば怒られるけど、堂々と脱がせれば怒られることは無いね？」

「俺も召喚士に成れば良かった。
そうすればあのすっぽんぽん光線だって手に入ってたはずだ」

「でも、あの人は化け物だよね？」

一体クラナガン襲撃事件の時何が有ったんだろう？

ドラマでやっていたみたいに仲間を殺されてブチキレたら、
本来の力が覚醒したのかな？あの人は元々そんな力を持っていたの
かな？」

「よく分からん、放課後に生徒会室に行ってみよう？」

強くなる為に（後書き）

次回..多くの1年生が生徒会室を訪れる。

そして見せられるヴァロットの真実、

それを見た時、彼らは何を思うのか？

違う世界（前書き）

「さすがはヴァロット君効果ね？1年生のやる気が違うわ」

なのはは嬉しそうに校長室から訓練施設を眺めていた。

毎年の事ながら1年生にあの恐怖の洗礼をさせる。

その強さに触れた後、彼らは人が変わった様にやる気を見せる。

違う世界

午後の授業、1年生達のやる気が違う。どうしても強くなりたくて、負けるわけには行かなくて、

そしてあの強さに触れてしまったから、あの強さをを目指す為に、今覚えなければいけないことを少しでも早く覚え、次の技を教えるもらうこと、

1年生は2年生を超える為に少しでもその技を盗もうとその練習を注意深く見るようになった。

こちらは空手の授業

「良いか、前にも話したように空手は己が肉体を凶器に変えて戦う武術だ。

極めれば魔法を使う必要さえ無い、但し相手を殺してしまうかも知れんがな？」

スー先生はそう言って杭の上にビール瓶を置いた。

「これを斬ってみろ！出来る者はいるか？」

「はい！俺やります！」

元氣よく手を挙げたのはジョンだった。

でも、ビール瓶に手刀を喰らわせた所で割れたりしない、その衝撃ではじき飛ばされて、飛んでいって割れるだけだった。周里から失笑が起きる。

でも、それが今の1年生の実力、所詮その程度だ。

「馬鹿者、ただ力で叩いても切れたりはしない、よく見てろ」

そしてまたビール瓶を杭の上に置く、そして斜めに振り下ろした手刀がすっぱりと瓶を切り落とす。

まるで柔らかい物を刃物で切断するが如く切り落とされるビール瓶、でもそれだけで終わらなかった。

返す拳で、裏拳でサックリとビール瓶の胴を挟みさらに足刀でビール瓶残った部分を輪切りにする。

1年生達にとってとても信じられる物ではなかった。

どうやったら手よりも堅いビール瓶を斬ることが出来るのか？

どこまで鍛えたらそんなことが出来るのか？

「お前達には後一ヶ月でこれが出来る様に鍛えてやる、但し逃げることもサボることも許さんぞ？」

スー先生はそう言って1年生を鍛えることにした。

「乱取り始め！」

こちらは佐藤先生の授業、実戦形式で教える。

こちらの特徴は、基本一对一で、時には一对多数での乱取りを行いながら、

その中で技を教えていく。

練習なのでデバイスではなく、竹刀を使っている物の生傷が絶えない授業だったりする。

まあ、名医が居る訳だし竹刀なら痛いかも知れないがそれほど酷い怪我をする訳じゃあない。

そうやって痛みと共に体に刻んだことは、一生体が忘れないそうだ。

「おらあ！撃って撃って撃ちまくれ！確実に的に命中するまで撃ちまくれ！」

そうやって確実に当てる技術を身につけろ！」

ビリー先生はそうやって命中精度の向上を図る。

「確かにエマルジョンコレクトは驚異の防御魔法だ、
だがやり方によっては抜き方はいくらでも存在するんだ！」

ビリー先生はまず命中精度を向上させ、
それからどんな体制でもどんな状況でも的を外さない練習に時間を
割く、
援護射撃とは何時如何なる状況に有っても見方を守る為に必要不可
欠な技術なのだ。

「さすがはヴァロット君効果ね？1年生のやる気が違うわ」

なのはは嬉しそうに校長室から訓練施設を眺めていた。
毎年の事ながら1年生にあの恐怖の洗礼をさせる。
その強さに触れた後、彼らは人が変わった様にやる気を見せる。
伝説のイージスはそうやって毎年のように強者達を生み出していく、
それが新たに伝説を大きくしているとも知らずに……

その日の放課後だった。

多くの1年生達が生徒会室の前に集まっている。

「会長、クラナガン襲撃事件の真実を、それ以降のヴァロットさん
がどうやって強くなったのか？
真実を教えてください」

そう、それは毎年の事ながら1年生は必ずそれを聞きに来る。

「困った物だ、これは機密事項なのに……まずは校長先生にお許しをもらわないとな？」

クロスリードはそれをなのの所に伝えに来了。

「そうね、明日特別授業をしましょう？1年生は午後は体育館に集合ね？」

翌日午後、体育館に集められる1年生、そしてそれは他言無用とされた上で彼らに公開された。

「腕一本貫っていくぜえええええええ！」

ドンツツ

[illegible]

そう、それはあまりにショッキングな場面から始まった。

そしてそこには修羅と化した男が立っていた。

あつという間に倒される二人の四天王、既にSSSの強さじゃあない。

そして葬儀での乱闘、さらにはあの人造魔王達のとの死闘、

「嘘？ あれって八神本部長？ とんでもない化け物」

「シグナムさんも信じられない強さだ」

「あれはオーバードライブ？普通あんな事をしたら死ぬかも知れないのに？」

本当に命を捨てるつもりだったの？」

それは、あまりに悲惨な戦いだった。

死なせてしまった親友の為、自分も死ぬつもりだったのか？
オーバードライブを平然とやってのけたヴァロットが居た。

そしてその代償に酷く傷付き病院に転送される。

それはあまりに過酷だった。

生徒会長という責任、そして死なせてしまった責任、
それを受け止めた上で敵を抹殺する覚悟、あまりに違う世界に身を置くようになったヴァロット、
その苦しさを思えば誰もそれを口にしなくなるだろう？

「この後だ、あの人は修羅に落ちた」(クロスリード)

それは86番街銀行強盗事件の映像、そこには一瞬にして倒れる犯人達が居た。

なぜ倒れたのか分からない、後からそのやり方を聞いて戦慄を覚える1年生達、

「あれは針を心臓に転送したんだよ、いずれも心央点を一撃で射抜いている。

こんな芸当が出来るのはあの人だけだ」(クロスリード)

その話に既に人知を越えた世界に到達してしまったヴァロットを思う。

「あの人はどんな悪も許さない、守る為なら平然と殺すことさえする人だ。」

それに軍隊を向こうに回して一戦交えたこともある」(クロスリード

そう、スプールスでの一件、戦艦を相手にあつという間にそれを沈めてしまったヴァロット、

最早人間のやる事じゃあなかった。

神をも超える存在と言われ、ミッドチルダの守護神とか伝説の勇者イージスと呼ばれる男、

その原点は血塗られた惨劇と深い心の傷を受け、それでも戦う一人の漢だった。

1年生達はその事実を突き付けられて初めて強くなるこの意味を知った。

強くならなければ守ることさえ出来ない現実を突き付けられた。

自分の愛する者を守る為には時には非情に成らなければいけないことを知った。

「だからお姉ちゃんはその時の事を話してくれないんだ？」(ツグミ

それを思えば誰もが口を閉ざすと言ったヒビキの言葉が頭を過ぎる。

そして彼らは思う、今ここで自分たちが学んでいること、それは強さ以上の厳しさなのだ……

「それからな、林間学校の場所だけど、スプールスであるの戦闘のあった場所だからな？」

結構一杯死んでるし、マジで幽霊が出るスポットだから楽しみにしておけよ！」(クロスリード

その言葉に1年生達は真っ青になった。

違う世界（後書き）

次回..なのはや卒業生達の日常。

それぞれの日常（前書き）

まあ、こんな感じで日常が展開している。

この三人と言うか、スクールのほとんどの教師はあの飲み屋にやってくる。

スクールの多くの生徒がバイトする飲み屋、一番最初にヴァロット達がバイトしていたあの飲み屋へ。

それぞれの日常

「よう、劉邦、チャチャイ、終わったら飲みに行かないか？」

佐藤は二人にそう声をかけた。

この三人、元々はレティ本部長の護衛をやっていた5人なのだが、彼女の引退に伴い解雇になる彼らをなのはが引き抜いたのだ。

残り二人は既に定年退職し、悠々自適に生活している。

因みに佐藤先生は今年度一杯で定年退職の予定である。

「良いねえ、行こうか？」

まあ、こんな感じで日常が展開している。

この三人と言うか、スクールのほとんどの教師はあの飲み屋にやってくる。

スクールの多くの生徒がバイトする飲み屋、一番最初にヴァロット達がバイトしていたあの飲み屋へ。

一方こちらは校長先生、

「なんか、昨日から手持ちぶさたなのよね？」（なのは

「そりゃあ、いつもの3人が突き出されてきませんからね？」（テ
イアナ

そう、思いつきりバスターで吹っ飛ばそうと思っていたのに、今の所その気配がない。

実はこの学校には困った1年生が3人いる。

やるのがガキで、スケベで常にやらかしては職員室に引っ張られる3人、

1ー1ジョン・ハミルトン、バラнтаイン・ファイネスト、1ー4
ブラントン・ゴールド

この3人を女子達はスケベ3人衆と呼ぶ、覗きの常習犯だ。

「まあ、ヴァロット君効果がある内は来ないでしょうね？」（ティ
アナ

「だよね？あれで人生観が変わっちゃう子も多いしね？」（なのは

そう、あの特別授業は大きな意味を持っている。

まだ将来を決め兼ねている1年生にとって、

人生の道標を示されるあの授業は彼らにとっても大きな転機になる
のだった。

こちらはスペシャルフォース、

「アマネさん、あの書類出来てる？」（ヴァロット

「さっき、ヴァイゼン地上本部と機動4課に送っておきました。

これで当分暇になるでしょう？」（アマローネ

そう、ヴァロット達スペシャルフォースは、

先週までヴァイゼンで起きた重大事件の助っ人に行っていた。

まあ、ちよつと手の付けられないロストログアが暴れて困ったこと
になっただけなのだが、

それも無事に解決し、捜査資料も無事に送れたようだ。

これでまた暫くの間は平和な日々がおくられそうだ。

「でも、戦闘の際にチームフリーダムとチームファイヤがぶっ壊した町の請求書が……」

こんなに来て居るんですが……」（アマローネ

「知らん、ヴァイゼンの地上本部に払わせろ、こっちだって少ない予算の中でやりくりして居るんだ。」

もし文句を言ってきたらこう言ってやれ、俺が戦闘に出なかっただけマシだったと」（ヴァロット

大体、これで話が通ってしまうのがこのスペシャルフォースの凄所だったりする。

彼が本気で暴れたらどうなるのか？人造魔王事件の結果、世界が一つ滅んでいることから考えても彼が出ること自体危険なのだと誰もが認識している。

まあ、脅しの一つで片が付くというのもまだ管理局の連中がいかへタレなのかよく分かる。

「隊長おおー、一緒に帰りましょー」

元気に飛んできたのはアプリリア、彼女はピトツとヴァロットの頭に張り付く。

もういつもの光景だった。

アプリリアはリインやアギトと同じ融合騎、古代ヴェルカ式だ。ヴァロットの肩の上が指定席だったりする。

「こら、アプリーまだ仕事は終わってないぞ？残り15分ある」（ヴァロット

怒られてちょっとむくれるアプリリア、ちょっとかわいい。これが彼らの日常だったりする。

そのころ教導隊

ドオオオオオオオン

「キヤアアアアアアアアア！」

エリカが自分の砲撃を喰らって撃墜される。

いくらエマルジョンコレクトが使えると言ってもアステイの方が1枚上手だった。

おまけに足下にはリオが打ち倒されて転がっていた。

それを見ている研修生達は呆然としている。

彼らにとって、ここでの研修は非常に意味が大きかった。

この5年、研修内容は大きく見直された。

年に一度3週間の研修は上級クラスのみで、それ以外は3年に一度3ヶ月間の研修だったりする。

ある程度の長期研修の方がレベルアップを図る効果が大きく、各部隊とも驚異的に殉職者が減り、

武装隊は全体的なレベルがじわじわと上がっていた。

そんな訳で、本日の教導の仕上げに模擬戦を見学の訳だが、

あの強いエリカ先生とリオ先生が完膚無きまでにやられていた。

さすがはインターカップを制しただけのことはある。

その強さは折り紙付きだった。

何せ二人がかりで手も足も出せなかったのだ。

こうして模擬戦は終わり、本日の研修は終了した。

「ねえ、今からみんなで食事に行かない？」（エリカ

「良いよ、やっぱりあの居酒屋？」（リオ

「私はパス、子供達が待ってるし、もうすぐヴァロットも帰ってくるし……」（アスティ

「相変わらずのろけおって、付き合い悪いぞ？」（エリカ

「そう言えば先輩、来週は本局なんですよね？」（リオ

「うん、来週は本局でエマルジョンコレクトの使いこなしの授業かな？」（アスティ

こちらは次元航行隊

「バローロ提督、本日の演習無事終了しました」

「ん、ご苦労」

「で、この後飲みに行きませんか？」

「済まない、まだ書類仕事が残ってるんだ、

来週大きな民事裁判があるからな？それまでに纏めなきゃ成らん書類が山のようにある」

「提督も稼ぎますねえ？」

「ん、まあな、金はいくらあっても邪魔には成らんしな？」

バローロもまた非情に忙しい日常を送っていた。

就職して10年、その名を知られた提督として、優秀な執務官として、部隊を率いる指揮官として、

管理局幹部として将来を嘱望される出世頭だった。

将来は局長か？と言われる実力者として頑張っている。

因みに、弁護士の資格も取得し、敏腕弁護士としても有名である。

まあ、こんな感じでそれぞれの日常が展開する。

それぞれの日常（後書き）

次回…突撃！高町家の晩ご飯という訳でなのは達の団らん風景など
……

突撃、高町家の晩ご飯（前書き）

と言うわけでユーノと編集者だけほっといてみんなで食事、ユーノの不遇は何時になったら解消されるのだろうか？この現象はやがて家庭内不遇という言葉を生み出す。

突撃、高町家の晩ご飯

「ただいまー」（なのは

「あ、ママお帰り」（プレオ

「お帰り〜」（ユウキ

「すぐにご飯にするね？さてとあの人は……」（なのは

「先生えええええ〜早くして下さいいいいいいい〜」（編集者

せっかく定時で帰って来られても缶詰にされているユーノだった。

「また原稿落としそうなの？困った物ねえ？」（なのは

そう、ユーノは無限書庫司書長、クラナガン大学人文学部考古学
教室教授、

そして作家という三つの職業を掛け持ちしている。
非情に忙しいのだ。

そして今日は金曜の夜、せっかく定時に上がれても直ぐさま捕まっ
て缶詰である。

「いい加減連載を減らせばいいのに？」（なのは

「それがせっかく書き終わってもすぐに次の小説を頼まれるんだよ
お、

せっかく休みが取れるかと思ったのにい〜（泣」（ユーノ

まあ、これが高町家の日常だったりする。

コンコン

誰かが玄関のドアをノックする。

「あ、フェイトちゃん、どうしたの？」

「今日から船の整備で一週間休暇なんだ、だから多めに食事を作ったの？」

みんなで一緒にどうぞ？」（フェイト

「丁度良かった、今夜何を作ろうか考えてた所だったんだ？でもユーノ君がね？」（なのは

「またあゝ？ユーノも本当に懲りないわね？」（フェイト

と言うわけでユーノと編集者だけほっというみんなで食事、ユーノの不遇は何時になったら解消されるのだろうか？この現象はやがて家庭内不遇という言葉を生み出す。

「そう言えばカレルから連絡来たよ、夏休みに入ってすぐ入籍するって、

その時結婚式を挙げるからって？」（フェイト

「じゃあ司祭はヴィヴィオだね？こっちも準備に入らないとね？」（なのは

「おじさんから明日あたり連絡来るんじゃないの？」（フェイト

「多分ね？」（なのは

そう、カレルもまたスクールを卒業し、今は次元航行隊の提督をしている。

そして、士郎が進めていたお見合いはカレルと静音だった。

それがようやく実り、この夏結婚が決まったのだ。

実はこう言う所は全て士郎の掌の上である。

士郎としては一族を増やすだけではなかった。

一族に魔力を持った者を増やすこと、

そして出来る限り財産と権力のある者を一族に取り込むことも目標としてきたのだ。

そう、カレルは正に打って付けだった。

地球で言えばアメリカ大統領の息子と縁談を進めているような物だ。それだけ時空管理局長の息子と言うのは地位も名誉もある。

おまけに結構な魔力を持ち、ルックス抜群、頭脳明晰と来れば言うことなしだ。

孫の嫁入り先にこれ以上の所があるだろうか？

士郎は着々と御神一族と次元世界の絆を強く太い物に成長させていた。

そして今リエラも狙われていたりする。

リエラは拓也との縁談が持ち上がっているのだ。

こうして高町家、月村家、ハラオウン家の絆はより一層強い物になっていく。

更にこの縁談、リンディさんも一枚咬んでいたりする。

「フェイトちゃん、今日はありがとね？ またこの埋め合わせはするから」（なのは

「別に良いよ、なのは、それよりね？」

フェイトが指さした先ではユウキが何か照れくさそうだ。

最近、ユウキはセシルを意識するようになった。

セシルもまた満更ではない様子。

二人は思う、（これはひよつとするとひよつとするかも知れない？）

まだ子供とはいえ、もう初恋に目覚めようとしている二人を温かく見守りながらも、

何とかして二人をくつつけたいと願っている二人の母親だったりする。

「あ、アルフ後片付け手伝って？」（フェイト

「はーいなのだ」（アルフ

アルフはフェイトが結婚してからはまたフェイトの所に戻ってきていたりする。

それにセシルにとって家を空けがちな両親に代わって遊んでくれる遊び相手だったりする。

更に時々二人して高町家におよばれたりなんて事も良くあったりする。

まあ、持ちつ持たれつの関係だったりする。

そしてアルフもまたセシルとユウキの関係を頬笑ましく温かく見守っているのだ。

そう、なのはの息子ユウキ、フェイトの娘セシル、新たな恋の物語が始まろうとしていた。

因みにユウキはなのはの血を色濃く引き継いだ為か？亜麻色の髪にユーノ似のグリーンの瞳、

意志の強そうな眼差し、まるでなのはの様に負けん気が強い。

そして生まれながらに高い魔力を持っている。

セシルは両親ともブロンドの髪だけ有って見事なブロンド、フェイトの赤い瞳に対してカルロの青い瞳、その両方の遺伝子を受け継いだ為紫の瞳をしている。

小さい頃のフェイトのような美少女だ。やはり高い魔力を持っている。

生まれた時からお隣同士の同級生、そして最近なのは達から格闘技や魔法を習っていて、

一緒に過ごす時間が多い、そんな二人がお互いを男女だと意識し始めていた。

なのは達は思う、この関係を絶対に崩さないで欲しい、出来れば結ばれて欲しいと……

「所で、プレオ、ユウキ、夏休みどうする？良かったら林間学校に付いて来ない？」

「わ、私は遠慮します、その間はお姉ちゃんの所へ厄介になるから良いです（ブルブルガクガク）」

実はプレオは去年林間学校に付いて来てとても怖い目に遭っているのだ。

「ママ怖すぎだから絶対付いていかない！」（プレオ

「ユウキとセシルちゃんはどうする？」（なのは

そんな様子に冷や汗を流しながら付いていくのは止めようと思う二人だった。

結局3人と1匹は協会にお泊まりすることにしたのである。

さて今年も林間学校は楽しそうなことになりそうだ。(笑)
なのはが黒い笑いを浮かべていた。

時間は少し巻戻ってこちらはスペシャルフォース

「さて今日の当直は？」(ヴァロット

「アルトさんと、チームウィンドです」(アマローネ

「了解した、じゃあ後は頼んだぞ？」(ヴァロット

そしてヴァロットは帰っていく、低く野太いエンジン音を響かせて……

因みにアプリリアの指定席はヴァロットの肩の上、寒い時期は懷の中にいたりする。

彼女にとってここは非情に居心地の良い、最高の居場所だった。

突撃、高町家の晩ご飯（後書き）

次回…と言う訳で次回はロシエット家の一家団欒風景
＋アプリアとの出会い

ロシェット家の団らん（前書き）

そしてヴァロットとアステイは庭に出る。

ライトアップされた庭で今から子供達に御式内の稽古を付ける。

この時ばかりはアプリリアもフルサイズになって一緒に稽古に励んでいる。

ロシェット家の団らん

「ただいまー」(ヴァロット)

「ただいまー」(アプリリア)

「あ、お父さんお帰りー」(スアーニャ)

その声に子供達が集まってくる。

「あのね、あのね、さっきおじいちゃん達がお魚届けてくれたの」
「(ルアンヌ・コリーヌ)

二人でハモっているのは次女と三女のルアンヌとコリーヌ、まるでコピーしたかのような双子だ。
実は両親以外どちらがどちらなのか全く見分けが付かない。

「あ、あのー、旦那様申し訳ございません、私たちでは魚が大きすぎて捌くことが出来ません、
お願いしてもよろしいでしょうか？」(ヴェレナー)

「良いですよ、ヴェレナーさん、で魚は何？」(ヴァロット)

「南洋マグロです、それと鮫も1匹」(ヴェレナー)

そうか？そろそろそんな時期だったな？

そう、この時期、夏の少し前南洋マグロが北上してくる。

普段は赤道付近にいる魚だが、夏になると北の方へやって来るのだ。
そして夏が終わるとまた南に帰っていく。

この時期にクラナガンの沖でも釣れるようになる。

クラナガンの人たちにとって夏の始まりと終わりを告げる魚として親しまれている。

「しかしでかいな？」（ヴァロット

目の前には2メートルを超えるマグロと3メートルを超える鯨が横たわっていた。

「あの二人本当に化け物だな？良くこれだけでかいのを担いでこられるな？」

そう、トラックから担ぎ下ろすだけで洒落にならないほど重い、それを悠然とやってのける辺りは化け物としか言いようがない。

まあ、それだけ鍛えられているって言う証拠だ。

何せあの二人はテグス一本でこんな巨大な魚とやり取りをして釣り上げる。

尋常な体力の持ち主じゃあないのだ。

その時だった、部屋の中に転送魔法陣、そこから出てきたのはアステイだった。

「ただいま」（アステイ

「アステイ、今日は魚だぞ、手伝ってくれ」（ヴァロット

そして魚の解体が始まる。

まずは鯨から、こいつは早いこと捌かないとアンモニア臭くて食べられなく成ってしまうから厄介だ。

まずは鰭を切り落とす。

処理はお手伝いさんに任せて本体を解体に掛かる。

「にゃ〜ん」

後ろからパヴィイがその巨大な顔をすりすりする。

この巨大猫食っちゃ寝するだけのペットに成り下がってる。

少しぐらい召喚獣としてのプライドが欲しい所だ。

そして魚を分けて貰おうと媚びを売りに来た。

「はいはい、今分けてやるから」

ブロックで鮫の肉を分けてやると喜んで銜えていく。

取り敢えず、鮫はブロックに切り分けたのをアステイとお手伝いさんが切り身にしていく、

一部はつけだれに漬け込んでおいて明日の食事、残りはフライにしてから冷凍する。

こうすればもう傷むことはないし、長期間の保存が可能だ。

再度揚げ直せばいつでも美味しく食べられる。

まあ、これで当分魚づくしだろうな？

次にマグロを解体、マグロは短冊にして冷凍、

嬉しいことにアプリリアが冷凍魔法を使えるので瞬間冷凍するには楽で良い。

これでいつでも新鮮なマグロが食べられる。

まずは今日の食べる分を確保、切り身にしたらマグロ用のつけだれへ、

これでづけ丼は確保、あとは刺身と焼き物に、

中落ちは明日の朝のスープと勿体ないがパヴィイの餌になる。

あの猫さっきのブロックを平らげてもうおねだりに来た。

最近、体重の増加で居間のソファが良く壊れる。

牛並みにでかいだけにもっと頑丈なソファでないと持ちそうにないな？

まあ、2時間ほどで解体作業は終わりちょっと遅めの夕食になる。その間子供達は後ろからずっと作業を眺めていた。親のこういう姿を見せるのも一つの教育だと思う。

「ミッシェルさん、さっきの鮫の肝臓は肝油にしているね？」（ヴァロット

「まあ、肝油ですって、またお子様が増えますわよ、ムフツ」（ユツファー

「肝油って精力剤ですものね」（ヴェレナー

こいつら何でもこういう下世話な話が大好きかな？
とつくづく思う。

まあ、確かに精力剤も成るけど、健康的なサラダオイルとしても使用出来る。

ドレッシングなんかに向いているな？

そう言う話をしながらロシェット家の夕食は過ぎていく。

食べ盛りの子供達が居るお陰で、あつという間に全て消えて無くなる。

まあ、これがいつものロシェット家の団らん風景だったりする。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」（子供達

「じゃあ、後片付けを頼みましたよ」（アステイ

そしてヴァロットとアステイは庭に出る。

ライトアップされた庭で今から子供達に御式内の稽古を付ける。
この時ばかりはアプリリアもフルサイズになって一緒に稽古に励んでいる。

何が有っても自分の身は自分で守れるようになるのが目標だったりする。

アプリリアは元々ロシェット家には居なかった。

それどころかスペシャルフォースの一員でもなかった。

それは3年半前のこと、ある作戦の途中だった。

「ふっ、どうやら片付いたようだな？」（ヴァロット

「あの、部隊長どちらへ？」（アマローネ

「まあ、ジュースの1本でも買ってきてやるさ、
ご苦労さんぐらい言ってやらないとな？」（ヴァロット

そう言って近くの自販機を探す。

丁度良い具合に道ばたに自販機があった。

ジュースを買おうとしたその足下にぼろぼろの人形が落ちている。
衣服は小汚いぼろ切れ、髪はぐしゃぐしゃで背中の羽もかなり酷く
千切れていた。

「誰だよ、こんな所にゴミを捨てる奴は？」（ヴァロット

つまみ上げて目の前の屑籠に捨てようとした時だった。

つかんだ感触が可笑しかった。妙に生暖かい、それにちよつと動いた。

なんと生きていた。

やばいと思ったヴァロットはモニターを開く、

「シャマル先生！急患です、瀕死の患者を転送しますので見てやって下さい」

これが彼女との出会いだった。

その後彼女は病院で意識を取り戻した。

怪我の影響なのか、それとも相当恐ろしい目に遭ったからか？

彼女は自分の名前以外何も覚えていなかった。

その後捜査が進んでも彼女は何の事件に巻き込まれてようになったのか？

一切分からず仕舞いだった。

それに搜索願さえ出ていなかった。

普通誰かの融合騎なら搜索願が出されても可笑しくは無いのだが一切それはない。

何か大きな事件が起きていたと思うのだが、結局アプリリアの記憶が戻らなければ何も捜査出来ない。

それから一ヶ月、彼女は退院を迎えようとしていた。

「あとう、医療費をお支払いするお金がないのですが……」（アプリリア

アプリリアはそうシャマルに泣きついた。

「しゃーねーな、俺が立て替えてやるわ、その代わり体で返せよ？」
（ヴァロット

「いあああああああ！この人変態です！スケベです！ロリコンです！」（アプリリア

「そう言う意味じゃあない、働いて返せって言ってるんだ！」（ヴァロット）

「ちょっとぶざけて見ただけです」（アプリリア）

「こ、こいつ……」（ヴァロット）

「でも実際問題私が働ける場所があるのでしょいか？」（アプリリア）

「まあ、うちで良かったら使ってやるぞ？時給1000でどうだ？
住み込みのベビーシッターだけだな、家は子供が多いから人手が欲しいんだ」（ヴァロット）

そしてアプリリアはロシェット家の一員として迎えられた。
その後彼女はスペシャルフォースにもやって来るようになり、
3等空士として採用され、今は空曹にまで出世している。

ロシエット家の団らん（後書き）

次回.. 月村家の結婚事情

雫先生の結婚事情（前書き）

もの凄く不機嫌なのは雫だった。

そう、静音とカレルの結婚が決まり月村家はその準備に入っていた。ミッドチルダに引越してきて8年、実に平和な日々だった。

その間に雫は男を捕まえるべきだったのだが、天性ののんびりした性格と、

どうにも男に目移りしてしまう優柔不断さがここまで特定の彼氏を作れなかった理由だった。

雫先生の結婚事情

「ちよとおおおおおおお、何で一番年下が先に行くのよおおお
おおおおお？」

もの凄く不機嫌なのは雫だった。

そう、静音とカレルの結婚が決まり月村家はその準備に入っていた。
ミッドチルダに引っ越してきて8年、実に平和な日々だった。

その間に雫は男を捕まえるべきだったのだが、天性ののんびりした
性格と、

どうにも男に目移りしてしまう優柔不断さがここまで特定の彼氏を
作れなかった理由だった。

そして今、もの凄く敗北感を味わっている。

まさか妹に先を越されるとは思わなかった。

まあ仕方がないと言いたいようながない、ドイツにいた頃は知らなか
ったけれど、

日本に帰ってきてからはご近所さんで幼なじみの二人、くつついて
も可笑しくはなかった。

それに、弟の拓也もリエラと付き合っている。
完全にフリーなのは自分だけだったりする。

地球にいた時のように、任務があるからとかそう言うことを言っ
たら、

振られてしまうなんて事はこっちの世界ではなかったりするけど、
やっぱり出会いが欲しい、燃えるような恋がしてみたい。

と願いつつ、そんな運命の出会いも無いままにこの歳まで過ごして
しまった。

このままでは不味い、これでは売れ残ってしまう。

そう言う焦りが募る今日この頃、どうしよう？こうなったらお見合
いでもしてみようか？

彼女は最近そう思うようになってきた。

月村家の次期当主、不破流の次期当主は拓也に決まり、自分は何
もない。

このまま行かず後家で過ごすのも辛い、彼女はとてつもない焦りを
感じていた。

それに父と母はそんな雫に構っている余裕はなかった。
まずは静音の結婚準備だ。

その次は拓也とリエラの縁談を纏めて結婚の準備に入らなければな
らない。

それに傘下の会社のこともある。

今地球では長らく続く大不況の為、会社を潰さないだけの経営をす
るだけでも大変なことだった。

（くっ、こうなったら叔母さんみたいにギリギリまで粘るか、それ
とも誰かに相談してみるか？）

雫は最近そんなことを考えながら悶々とした日々を過ごしている。

「何？雫先生が男を欲しがっている？」

「そうなの、静音さんに先を越されちゃったからかなり焦ってる感
じ、

そろそろ誰か良い相手を見つけてあげないと……」

「そうだな？でもあそこは相当な名家だからな？
あんまり信用度のない奴は紹介出来ないだろう？」

家柄とか地位とか権力とか財産とかそう言うことを言ってきそうだしな？」

「結構厳しいわよね？」

「でも一人だけ心当たりがあるぞ？間違いない出世しそうな凄いが……」

「彼ね？彼なら大丈夫だとは思うけど……」

「明日仕事帰りに士郎先生の所に行ってみないか？どうせなら俺たちの時のようにみんなしてくつつけるってのも面白そうだしな？」

「うん、その作戦乗った」

と良からぬ作戦を立てているのはヴァロットとアステイだったりする。

そして翌日

「何だお前達も同じ事を考えていたのか？」

「じゃあ、士郎先生も？」

「もう先生はよしてくれよ、俺はもうただの老人で年金生活者だ」

定年退職して9年、頭になんか白い物が混じりすっかり老けてしまったが、

あの頃の鋭い眼差しは健在な士郎だった。

士郎は、やはり雫のことを心配していくつかの縁談を準備し始めていた。

「こう言う事は情報の漏洩が一番恐ろしいぞ？それからもっと仲間を増やさないとな？」

「はやてさんとクロノ提督、リンディさんも巻き込みますか？
後、校長先生にフェイトさんも仲間になってくれると良いんですけど？」

良からぬ企みが進行しつつあった。

そのころスクール、

「いやあああああああ！何で私が林間学校の引率に選ばれるのよおおおおおおお！」

雫先生が悲鳴を上げていた。

完全にデフォで引率なのは、キャロ、エリオ、ピノ、スー、の四人となのはなのだが、

残り二人はくじ引きだった。もう一人はビリー先生だ。

そう、教師達としては絶対と一緒に行きたくない、特になのはとだけは一緒に行きたくない。

あの恐怖を味わいたくはないから、あそこだけはやばすぎるから行きたくないのだ。

他の教師達と思う、行かなくて良かったと……そしてご愁傷様と……
一体林間学校はどれだけパワーアップしたのだろうか？

もうすぐ7月、模擬戦大会に向けて、いろいろな試験に向けて生徒達は追い込みに入っていた。

「わかんねえええええ！」

参考書を片手に頭を抱えているのはジョンだったりする。

執務官を目指している訳じゃあないから執務官講座には出ていない、でもせめて指揮官研修には出られるようにならないと、このままでは学校一の落ちこぼれになってしまう。

それどころかどこにも居場所が、就職先さえなくなってしまいう、ミッドチルダ一の称号も手にするなんて夢のまた夢に終わってしまう。

目の前には高く厳しい頂がいくつも連なっている。それを一つ一つ乗り越えない限り自分の夢に辿り着く事なんて出来はしない。

そう、まずは目指すなら学園最強、でもそれ以前に学年最強にならなければどうしようもない。

それすらも出来ていないどころか学年最弱に近い。

今になって後悔する事、

それは覗きなんかにつつつを抜かしている場合じゃあなかったって事だった。

入学した時その瞬間から既に戦いは始まっていたのだ。

人より多く鍛えて強くなる事、勝ち抜く事、それ以外この学園で名を上げるすべはなかった。

ある程度強くなって注目されれば人生いろいろ特典があるのだが、サボっている奴は誰から見放され、孤独に朽ち果てていくしかない人生だった。

せめて指揮官適性試験ぐらいは受かってみせる、あの人に強くなる方法を教えて貰いたい、それが切なる願いだった。

こちらはリン達、

「この法律の所難しくてよく分からないよ？」（リン

「よく似た法律があるからややこしいわよね？」

同じ管理局法でも、世界によって解釈が違ったりする所もあるし、地域によっては条例の方が強い所もあるしね？」（ティアナ

今、執務官補佐採用試験に向けて勉強中、ティアナ先生に難しい所を教えて貰っている所だ。

みんな執務官を目指す仲間達、難しい法律の勉強に余念がない。

こちら生徒会

クロスリードとヒビキも参考書を片手に難しい勉強をしていた。

彼らは執務官補佐に合格し、指揮官研修も取った。

後はキャリア幹部採用試験に合格する事を目標にしているのだが、簡単には行かない試験だったりする。

「まったく化け物だよな？あの人は？何でこんなに難しい試験を満点合格出来るんだ？」（ヒビキ

そう、あれから10年、現役でのキャリア幹部採用試験に受かったのは数えるほどしか居ない。

中でも満点合格は、ヴァロットとバローロの二人だけだった。

「頭の出来が違ούνじゃないの？あの人達は天才と呼ばれてたから？」（クロスリード

そう、二人はキャリア幹部になる事を目指して勉強を続けているのだ。

「試験のコツをヴァロット先生に聞いてみるか？」（ヒビキ

「簡単には教えてくれないだろうけどね？」（クロスリード

もうすぐ7月、各種試験に模擬戦大会とイベントごとが目白押しだった。

栗先生の結婚事情（後書き）

次回..ヴァロットの所へ試験のコツを聞きに来る生徒達

試験のコツ（前書き）

「あとう、キャリア幹部試験についてアドバイスを頂きたいんですが」（クロスリード）

「俺たちは指揮官適性試験のアドバイスが欲しくて……」（ジョン）

「なんだそんなことか？」（ヴァロット）

試験のコツ

翌日、面白い取り合わせがスペシャルフォースの部隊長室に揃っていた。

クロスリードとヒビキ、そしてジョンにバランタインそしてブラントン、

一番の天才と一番の馬鹿共が揃ってヴァロットの所へやってきた。

「あとう、キャリア幹部試験についてアドバイスを頂きたいんですが」（クロスリード）

「俺たちは指揮官適性試験のアドバイスが欲しくて……」（ジョン）

「なんだそんなことか？」（ヴァロット）

「そんな事って……」（ヒビキ）

「俺勉強しなかったし、あれくらいの試験余裕だろ？ 普通」（ヴァロット）

「よ、余裕って……」（クロスリード）

「お前らは常識に縛られ過ぎなんだよ、あの試験はそんなに難しいことを問題にはしていないんだ。

ただ、設問が思いっきり捻ってあるし、参考書もそうなってる。

だから、そのまま覚えようとすれば常識という糸に絡め取られて分からなくなる。

初めから考え方を変えればいいのさ、まあ発想の転換って言う奴だ」（ヴァロット）

「発想の転換ですか？」（クロスリード）

「そうだ、発想の転換、要はどこをどう捻ってあるか見抜ければ良い、

そうすれば聞いていること自体は簡単なことだけだ」（ヴァロット

ヴァロットの言葉に咂然とするクロスとヒビキ、まだとても信じられないようだ。

「発想の転換が出来ればそれで良いんだ、勉強なんてするだけ無駄だから」（ヴァロット）

（この人やはり頭の出来が違いすぎる、俺たちでは付いていけない世界にいる）（ヒビキ）

（同感、でもアドバイスは決して無駄にはならなかったと思う、帰ってもう一度やり直そう）（クロスリード）

「さて、指揮官適性試験だが、あれは合格不合格を見ている訳じゃない、

指揮官として能力があるかどうかを見て居るんだ、指揮官として使えるかどうか？

人の上に立つ資質があるかどうか？　そう言う所を見る試験なんだ」

（ヴァロット）

「人の上に立つ資質？」（ジョン）

「そうだ、仲間を如何に守れるか、どうやって作戦を安全に遂行出来るかを考えられるか？」

そういう能力を持っているかどうかを問う試験なんだ。

これこそ勉強の必要のない試験、いくら勉強した所で簡単に身に付く物じゃあない、

ある意味才能の領域の試験なんだ。教科書通りの問題なんて殆ど出てこないし、

勉強するだけ無駄になる。もし、試験に通りたいのなら過去の模擬戦大会の映像を見てみる、

自分たちのチームより強いチームに勝つにはどうしたらいいか？

どうやって相手の弱点を見つけるか？そこからどうやって相手を崩すのか？

その全てがああの映像には詰まっている」(ヴァロット

「過去の模擬戦大会って？数が多すぎてどれを重点的に見て良いかわかりませんよ」(ブラントン

「俺のだけで充分だぞ？あれには勝つ為だけじゃあない、相手を傷つけず、

味方を傷つけさせず、どんなセコイ手を使っても確実に勝つというお手本が示してある。

あと、個人戦大会のバローロの試合も良い参考になるだろう？

まだそれでも言っている事が分からなければ見た試合を分析してレポートに纏めてみる、

そうすればそれが最高の教科書になる、努力しただけ自分の力になるんだ。

努力は決して自分を裏切らない、忘れるなよ？」(ヴァロット

「傷つけず、傷つけさせず、確実に勝つですか？」(バランタイン

「そうだ、味方を簡単に死なせるような指揮官には誰も付いてこないし、

真っ先に自分が死ぬような指揮官では部隊が全滅してしまう。

傷つけず、傷つけさせず、ただ責任だけ取るのが指揮官たる者の役目だ。

そして指揮官にはミスは許されない、ミスをすれば大切な仲間を失う事になるんだ。

俺はただ一度だけ重大なミスを犯してしまった、その結果は知っての通りだ。

自分で地獄に堕ちていく、だからこの試験に通るという事はその先のミスは許されないという事だ。

このスクールにいる間に学べ、出来る限りのミスをして自分の至らなさを克服しろ、

それがこのスクールで学ぶという事の意味だ」(ヴァロット

「ヴァロット先生、今日はありがとうございました」(一同

そう言って部長室を後にする一同だった。

「なんかスゲーな、あの人と話してると不思議と強くなれる気がする」(ジョン

「気が付いたか？あの人は人間としての器が違うんだ。あんな器のでかい人はいない、

そして今もその満たしきれない器を持て余して居るんだ」(クロス
リード

「傷つけず、傷つけさせず……か？まるでエマルジョンコレクトみたいだな？

いや、御式内みたいと言うべきか？」(ブラントン

「でもやっぱり住んでいる世界が違いすぎる、

俺たちは何時になったらあの人に追い付けるのだろうか？」（ヒビキ

そこには最強という名の途轍もなく高い頂がそびえ立っていた。
その懷は途轍もなく広く、どこまでも優しく、それで居て雄々しく
厳しい。

それを感じる事が出来た彼は強さの階段を上る。

彼らにとって、この一時はかけがえの無い時間となった。

「さあ、急いで帰ったら言われた事が出来るようにしないとな」（
クロスリード

彼らは頂いたアドバイスを素に勉強を始める。

それぞれの試験に向けて……それがやがて彼らの能力になっていく、
彼らにとってヴァロットという存在は学園の教師以上に大きかった。
そして、人生の目標としてその横に肩を並べる事、
それが出来る人間を目指す事が彼らの進路となっていく。

「なんか部隊長嬉しそうです」（アプリリア

「ああ、こんな嬉しい事はない、以前校長先生に言われた事だ。

教える事は教えられる事、学ぶ事は楽しいって事さ、

ああいう楽しい奴らが来てくれると、俺も楽しくて嬉しい、

これからの未来を背負って立てる奴らを育てる事は実に楽しい事だ」

（ヴァロット

「私は勉強は嫌いです」（アプリリア

「まあ、アプリーにもその内分かるさ」（ヴァロット

「こうやって改めて見るとよく分かる。

蛇や蛙をぶつけているのは全て女の子が相手の時だけだ」(ジョン)

「脱がせているのもそう、相手が女の子の時だけだね」(ブラントン)

「そうか？相手がやられたら一番嫌な事をして相手の隙を突いて居るんだ？」(バラнтаイン)

「あのすっぱんぽん光線はただ脱がせる為にあるんじゃない、デバイスや暗器を全て取り上げてしまう為にあるんだ？」(ジョン)

「傷つけず、傷つけさせず、それで居て確実に勝つ……か？」(ブラントン)

「その為にこれだけの事を考えているとすると相当頭が切れているな？」

「やっぱり天才だよ、凄すぎてあの足下に追いつくだけでも大変な事だ」(バラнтаイン)

「あの人が言ってただろ？会長達に、発想の転換をしろって、もっと自由に、もっと自分のやり方で答えに近づければそれで良いんじゃないかな？」(ジョン)

「発想の転換……か？」(ヒビキ)

「もしかしてこういう事か？この問題見てみろよ、こんな風に聞いているけど、

こう言う考え方で、こう聞いてみたらと仮定するとだな……答えは
こうなる訳で……

この問題自体は大して難しくないぞ？」（クロスリード

「本当だ、じゃあこの問題は……」（ヒビキ

「なーんだ、結構簡単じゃないか？

……って言うかそれを一瞬で見抜けるあの人はどう言うひねくれ者
なんだ？」（クロスリード

試験のコツ（後書き）

次回…事件発生、スクールやスペシャルフォースを巻き込んで大捕物が展開される。

怪盗ジャヌヴィア登場（前書き）

怪盗ジャヌヴィア、最近売り出し中のこそ泥だ、

しかも盗んだロストロギアをすぐに犯罪組織に売り渡す事でも有名な奴だ。

下手にテロ組織にでも売り渡されたらどこでどのようなテロに使われるか分からん、

一刻も早く奴を取り押さえてロストロギアを回収して欲しい、

怪盗ジャヌヴィア登場

その日、本局刑事課長の前に例の三人が集められていた。スクール2期生にして刑事課の三羽ガラスと呼ばれる3人、最強の捜査チームだ。

「諸君、実は昨日途轍もなく厄介な事件が起きた。43番管理外世界のエーバーバツハ博物館からロストログアが盗まれた」(課長)

「課長、それでしたら機動4課の範疇でしょう？」(レヴ)

「それがな、盗んだ奴とそのロストログアが問題なんだ。

ロストログアは第1級危険指定のある物で、暴走したらどうなるか見当も付かんよ、

下手をしたら世界を一つ滅ぼすかも知れん」(課長)

「一体何でそんな危険な物が一介の博物館にあったんですか？普通なら機動1課の保管庫に厳重封印でしょ？」(グレイス)

「どうも調査が進んでいなくてな、この120年ぐらいずっと手つかずだったらしい」(課長)

「まったく、何を暢気な？それで盗んだ奴は？」(山田)

「怪盗ジャヌヴィア、最近売り出し中のこそ泥だ、しかも盗んだロストログアをすぐに犯罪組織に売り渡す事でも有名な奴だ。

下手にテロ組織にでも売り渡されたらどこでどのようなテロに使わ

れるか分からん、

一刻も早く奴を取り押さえてロストログアを回収して欲しい、既に機動4課に捜査協力を仰いである、必要なら他にも増援部隊を要請する。

それから捜査の指揮はレヴ、君にお願いする」(課長

「「任務拝命いたしました」」(3人

「さて、捜査本部を立ち上げましょ？」(レヴ

「機動4課は誰を助っ人によこすのかしら？」(グレイス

「またあいつじゃあないの？」(山田

「ああ、彼ね？　まったく使いにくい人材ばかりよこすのね？」(レヴ

そう、助っ人は3期生のヴァロワ・フルールだった。

「まあ、そう言いなさんな、あれでも封印術じゃあ校長先生よりも上なんだから？」(山田

また変な取り合わせが捜査本部に揃った物だ。

でも、このチームで数々の難事件を解決してきている。

決して使えない人材などではない。

ただ癖が強すぎて使いにくい事この上ないが……

「所で怪盗ジャヌヴィアってどんな奴なの？」(レヴ

「まだ誰も素顔を見た事はないの、変身制御が上手くて誰にでも何

にでも化けられるから

警備の隙を突いて進入されるし、簡単に取り逃がしてしまうわ、もう3度も煮え湯を飲まされてるし、

それにティア先生クラスの幻術の使い手でもあるわ、攻撃魔法を使ったと言う話はないけど、

もし攻撃魔法を持っていたら厄介よね？非常に頭の切れる奴だから簡単には捕まえられないわ」（グレイス

「頭が切れるって言うのが厄介よね？ヴァロットみたいな奴だったらお手上げよ？」（レヴ

そう言っている所へヴァロワがやってくる。

「さっき次元航行隊から連絡があったよ、テロ組織『黒い旅団』が動き始めたと」（ヴァロワ

「黒い旅団って……あの殺戮集団の？」（レヴ

「まさかもウロストロギアは黒い旅団に？」（山田

「まだ渡っては居ないと思う、どおやら大きな取引をするみたいだ。かなりの金を集めている。それとボスと側近らしき男が既にミッドに入ったそうだ。

取引するのはミッドチルダ、テロの対象はクラナガン及び地上本部って所だろうな？」（ヴァロワ

「捜査本部を移動しましょう、場所は地上本部、戦力の増強はスペシャルフォース、

108部隊、そしてスクールよ、八神本部長にも増援を仰ぎましょう」（レヴ

こうして事件はミッドチルダに降りてきた。

「何い？危険なロストロギアを取引だあ？」（ヴァロット

スペシャルフォースにもスクールにも108部隊にも事件の概要と協力要請が来た。

そして捜査本部に集まる精鋭達、そこには八神はやて地上本部長、シグナム作戦指令室長、高町なのはスクール校長、ティアナ先生、クロスリード、ヒビキ、レヴ、山田、グレイス、ヴァロット、レット、ヴァロワ、ギンガ、スクラティという顔ぶれが揃った。

「……と言う訳で、この数日以内に取引がされる可能性が高いです、なんとしてもそれを阻止し、ロストロギアを回収せねば成りません」（レヴ

「で？そのロストロギアは一体どんな物なんや？」（はやて

「盗難直前の調査報告によりますと、封印されている状態ではただの魔導書です。

しかし、その正体は巨大なモンスターらしいです。能力と言うか特徴は侵蝕系です。

魔導書を核に周りにある物全てを侵蝕し、喰らい尽くします。

そして最後は星その物を喰らい尽くして他の世界に転移する。

恐ろしく厄介で攻撃しても吸収されてしまう事が多く、簡単には破壊出来ません。

封印が解かれてもまだそんなに大きくなっていない内なら再度封印も可能ですが、

ある程度成長されたらもう僕では手が付けられません」(ヴァロワ

「侵蝕系って……」(なのは

「そうや、第2次闇の書事件の時みたいになるって事や、しかもあれより厄介そうな奴や、下手に封印を解かせるような事だけは出来へんで？」(はやて

「すぐに一般市民の避難をさせては？」(クロスリード

「そんな事をしたら気づかれてまうやろ？」(はやて

そう、そんな事をしたら情報が漏れていた事も、彼らを逮捕しようとして捜査している事もばれてしまう。

「とにかく、取引の現場を押さえて全員逮捕が鉄則や、少しでも情報の収集に当たって欲しい」(はやて

そう言った時だった。

一同の前にモニターが開く、

「よう、久しぶりだな、今クロノ総局長から厳命が下った。SEALSと機動兵器部隊ラベルダは黒い旅団を殲滅する。もし、ボス達の逮捕が出来たらこちらに引き渡して欲しい」(バロ
ーロ

とうとう本局は厄介なテロ集団の殲滅に乗り出した。

「しかしなんやなあ？この10年管理局はもの凄いパワーアップしたなあ？」（はやて

「ええ、これもスクールとあのヴァロットが居てくれたからここま
で良くなったのだと思います」（シグナム

そう、伝説に名を刻む男に引っ張られ、管理局は頼もしいと思え
るほどに良くなってきた。

そしてどんな厄介な犯罪も彼らがいればもう怖い物無しだった。

怪盗ジャヌヴィア登場（後書き）

次回..本格的な捜査が始まる。

準備（前書き）

「チームフォレストの交代はチームウインドだ、今すぐ休息に入れ、体力の温存に努めろ、残りのチームは3交代でいつでも出撃出来るように準備しておけ、

最悪戦闘になればどれだけの被害が出るか分からん、今回はかりは俺も戦闘に参加する」（ヴァロット

準備

「よし、今から24時間勤務態勢に移行する」(ヴァロット)

ブリーフィングの後スペシャルフォースは当直体制から、24時間の交代勤務態勢に移行した。

「ユウコ、チームフォレストは市内で取引の出来そうな所を重点的にパトロールしてくれ、

もし敵を捕捉したらそのまま張り込みを頼む、定時連絡を忘れるなよ?」(ヴァロット)

「了解しました」(ユウコ)

「チームフォレストの交代はチームウィンドだ、今すぐ休息に入れ、体力の温存に努めろ、残りのチームは3交代でいつでも出撃出来るように準備しておけ、

最悪戦闘になればどれだけの被害が出るか分からん、今回ばかりは俺も戦闘に参加する」(ヴァロット)

矢継ぎ早の指示が出されていく、
久しぶりに大きな事件、無事解決出来ればそれなりにボーナスUPだ。

こちらはスクール、

「1年生に実戦は無理でしょう?」(クロス)

「難しいわね、まだ実戦に出られるレベルじゃあないわ、だから……

スクールの生徒は取引現場の一番外回りを警備します。

108部隊の囲みを突破してくる犯人が居たらこれを各個撃破、逮捕します。

これならそれほどの危険はないでしょう？

もし、大規模な戦闘になる場合は一般市民の避難誘導をする事で話が付いています」(なのは

「じゃあ、大規模な戦闘は？」(ヒビキ

「スペシャルフォースが出る事で話が付いています。

大丈夫よ、彼なら、きっとこのクラナガンを守り抜いてくれる。

伊達にイージスと呼ばれていないわ、あなた達もその戦いを目に焼き付けなさい、

あの凄さは、彼がなぜ神をも超えると言われるのか？その真実を見届けると良いわ」(なのは

「そんなに凄いですか？」(クロス

「凄いという言葉さえ当てはまらないほどにね？」(なのは

こちらは108部隊、既に部隊の精鋭達が市内のあちらこちらに散ってパトロールを開始していた。

「一刻も早く犯人達を逮捕しないと……」(ギンガ

「焦るな姉上、敵も動けば必ず網に掛かる」(チンク

チンクは安楽椅子に腰掛けたまま静かにギンガを諭す。

そう、部隊長が焦る態度を見せては成らない、あくまでも大きく構

えて報告を待つ、

そして的確な指示を出してこそ部隊長なのだ。

ギンガは今更ながらゲンヤの苦労が身に滲みて分かった。部隊長とはこれほどまでに辛く苦しい物なのだ……

こちらは再びスクール、生徒達にもある程度の作戦内容が伝えられる。

「もしかしたら実戦になるかも知れない？」

その言葉にはやる気持ちを抑えきれない2年生、逆に途轍もなく緊張する1年生、そのギャップはいかんともし難い。

「良いか、戦闘になればスペシャルフォースが出てくる、巻き込まれないように市民を逃がすのが俺たちの仕事だ。何が有っても戦闘に参加しようと思うな、俺たちでは邪魔になるだけだ」(クロスリード)

その言葉は途轍もなく重かった。

私たちは、実戦という言葉に戦慄した。

もしかしたら本当に人を殺すかも知れない、目の前で人が死ぬかも知れない。

考えただけで恐ろしい、でもそれがこの先私たちの将来なのだ。

武装局員になれば必ず実戦は付いて回る。

そこから逃げ出す事は許されない。

「ねえ、実戦になるって本当かな？」(リン)

「お姉ちゃん達はぴりぴりしてて声も掛けられなかった」(サクラ)

「スペシャルフォースが出るって事はあの人も出るのか？
あの人の戦いが見られるのか？」（ジョン）

「何言ってるのよこの馬鹿は？あの人は部隊長だよ、簡単に前線まで出られる訳無いじゃない？」

あの人が出てくるって事は人造魔王事件クラスの大事件になるって事だよ？

そんなのあり得ないって、それにそんな大きな戦闘になったらクラナガンが無くなっちゃうよ」（リン）

「そこ、私語は慎め、取り敢えず自分の受け持ち地区にどれだけの人がいるか？

どこへどう逃がすか？それをしっかり頭に入れておけ、犠牲者を出す訳にはいかないんだ」（ヒビキ）

こちらは捜査本部、

「人員の配置完了しました。緊急時の避難態勢もOKです」（グレイス）

「まあ、これで網に掛かるのを待つだけだね？」（ヴァロワ）

「取引の現場を押さえられる事が理想だけど、
ジャヌヴィアか旅団のボスカどちらかでも先に押さえられれば事件は阻止出来る。」

何としても最悪の事態だけは避けないと行けないわ」（レヴ）

「大丈夫だって、最悪の事態になってもヴァロットが居るじゃん、
あいつなら何とかしてくれるって？」（山田）

「そう言う他力本願は止めた方が良いわよ、もしもって事がないとは限らないから？」（レヴ

「みんながんばっとる様やなあ？まあそれでも食べてもう少し頑張つてや？」（はやて

はやては手作りの料理で捜査本部を労う、もう自分の出る幕はない、

既に実力ある若手達が活躍している。

もう、自分が口出ししなくても、して欲しい事は全てこなしている。今までの自分の経験も捜査のやり方も、彼らには敵わない、一抹の寂しさを感じながらも、はやてはなのはの生徒達を温かく見守るのだった。

「アマネさん、暫くここを頼んだぞ」（ヴァロット

「部隊長、どちらへ？」（アマローネ

「多分今夜は空振り終わるだろうから、ちょっと一杯引っかけてくるよ」（ヴァロット

「この非常時に飲みに行かないで下さい」（アマローネ

「堅い事言うなって、そう簡単に尻尾を捕まえられる様じゃあ俺たちの出る幕なんて無いんだから、

それにチームフォレストが動いている、心配しなくても大丈夫さ、連絡があったら俺の所にも通信してくれればいい」（ヴァロット

頭痛い、アマローネはそう思いながら情報の収集に当たる。

と言っても部下から送られてくる通信を待っているだけなのだが、さすがにただ待つというのは退屈で忍耐のいる物だ。

暫くして、バー・モンサンミシエル

「マスター、ウイスキーロックで！」

カウンターの端っこ、出入り口に一番近い所で飲み始めたヴァロツト、もういつもの光景だ。

準備（後書き）

次回…飲みに行ってしまったヴァロット、しかし事態はこの後急展開する。

包囲（前書き）

「他のチームは？」（ヴァロット

「チームファイヤは現場を囲むようにビルの屋上からの狙撃体制を取っています。」

チームマウントは現場を囲むように配置、

いざと成ればエマルジョンシールドを最大展開する体制です。

チームフリーダムは現場を囲むように配置、

出てくる敵を全て殺害するように命令を出しておきました。

チームウィンドは、いつでも突入出来る体制です、中でチームフォレストと合流の手筈です」（アマローネ

包囲

「旦那あ、大きな事件ですかい？」（マルジナル

「何で？」（ヴァロット

「旦那が一人でここに来る時は必ず大きな事件が起きてる」（マルジナル

「なるほど来る客をよく見てる訳だ」（ヴァロット

「ヴァロットさん、1杯奢ってよ？」（ミレリ

「ああ、1杯だけだぞ？」（ヴァロット

「けち！」（ミレリ

カラン、と音を立てて氷が動く、

ここはヴァロットが隠れ家的に飲みに来るバーだ。

カウンターの端でウィスキーを傾けながら時々つまみを食べながら何かを考えている。

彼は纏まらない考えがある時、ここにやって来て酒を飲みながら思案を巡らせる。

スペシャルフォースは戦闘専門の精鋭部隊、決して犯罪捜査に向いている訳じゃあない。

本来は大規模テロや大規模災害の際に出動するスペシャルチームなのだ。

でも、今回は勝手が違う、不慣れな捜査、どこで行われるか分から

ない取引、

もし、取引が成立してしまえば、大規模な都市型テロを起こされるのは確実、

起こされてからではもう手の打ちようがないと来ている。

敵をどうやって炙り出すのか？

どうやってテロを未然に防ぐのか？

思案を巡らせるヴァロット、でも簡単には答えは出ない。

「旦那、そう言えば地球産の良い酒を仕入れてきたんですが1本どうです？」（マルジナル

「I・W・ハーパーにフォア・ローゼスカ？を両方ともボトルキープで頼む」（ヴァロット

「まいど」（マルジナル

この取引には裏がある。

ヴァロットは伊達にこのバーに来ている訳じゃあない。

たかだかウィスキー2本の割に随分高い金額を要求される。

しかし、それは別の料金を含んでいるからだ。

渡された領収書の裏には、とあるマフィアの組事務所の名前と住所が書かれている。

「近日中にその事務所で大物テロリストが大きな取引をするそうです」

マスターはそっとそんな耳打ちをする。

そう、この店のマスターは裏の世界の情報ならどんな情報だろうと

仕入れられる人物なのだ。

「済まんな、マスター、恩に着るよ」(ヴァロット

ヴァロットは支払いを済ませるとオフィスに移す。

「あつ部隊長、お帰りなさい」(アプリリア

「すぐにチームフォレストを呼び戻せ、各チームを集めるブリーフ
イングに入る」(ヴァロット

スペシャルフォースが全員集合する、これはかなりの緊急事態を
意味する。

「……と言う訳だ、俺はこれから捜査本部に出向いた後、現場に向
かう、

チームフォレストは中に潜入、情報の収集に当たれ、ジャヌヴィア
が現れ次第包囲し殲滅する。

チームウィンドは突入要員、他は外へ逃げ出す奴らを殲滅せよ」(ヴァ
ロット

逮捕ではなく殲滅、それはその場で下手に封印を解かせない為に
ヴァロットが下した判断だった。

「じゃあ、打ち合わせ通りに」(ヴァロット

そして彼は捜査本部に移す。

「……と言う訳だ、俺は今から現場で指揮を執る。

ヴァロワは俺と来い、万が一の時の封印を頼む、レヴ達は108部

隊とスクールに連絡、
合図があり次第転移して現場を包囲するよう指示を頼む」(ヴァロ
ット

「また美味しい所を持ってかれたわね？」(レヴ

「仕方ないよ、現場最強指揮官の前じゃあ私たちは手も足も出せないし」(山田

「でも相変わらず酒臭いわね？」(グレイス

「じゃあ、頼んだぞ？」(ヴァロット

ヴァロットはそう言って転移していった。

その頃私たちは緊急の呼び出しを受けてスクールに集合だった。

「もしかして本当に実戦になるの？」(リン

「多分大丈夫じゃあないかな？」

スペシャルフォースが既に動いているってお姉ちゃんが言った」
(ツバキ

「避難誘導もしなくても良いかも？」(ナギ

「私たちスクールは取り敢えずプラン1で動きますが、
現場がどのように動くか分かりません、
すぐにプラン2に移れるように現場での通信には細心の注意を払う
ように」(なのは

いよいよ大捕物が始まる。

いや、虐殺と言うべきか？

そして、この捕り物は更に大きな戦いを呼び寄せる事になる。

その時まだ誰もこの先の事態など予測出来ていなかった。

「スペシャルフォースの戦闘ってどんなだろうな？」（ジョン

「相当凄いらしいよ、ただ周りの被害も半端無いらしい」（ブランク
トン

「巻き込まれたら恐らく死ぬな？まあ安全な所から見ている方が良
いんだろうけど？」（バランタイン

俺たちはそれがどれ位凄惨な作戦なのか？まだ知る由はなかった。
それを目にした時、あの人の怖さを心の底から味わう事になる。

このスクールに入って実戦を経験するかも知れないという事は覚悟
していたけれど、

まさかこれほど早く実戦に成るとは思わなかった。

そして、目の前で人が死ぬという現実を嫌と言うほど味わう事にな
る。

こちらは現場、

「どうだ？」（ヴァロット

「既にチームフォレストが潜入しています、先ほど連絡がありまし
た。

組長以下幹部と旅団の関係者らしき人物は全て確認したそうです。
ですが、まだジャヌヴィアが現れていません、

取引の準備から想像するに、今夜取引を行うようです」(アマローネ

「問題はジャヌヴィアだな？どんな姿形をしているのか？誰にも想像が付かない、

もしかしたら来ているのかも知れないし、来ないのかも知れない、奇想天外な方法で現れる事も考えられるから注意は怠るなよ？」(ヴァロット

「了解しました」(アマローネ

「他のチームは？」(ヴァロット

「チームファイヤは現場を囲むようにビルの上からの狙撃体制を取っています。

チームマウントは現場を囲むように配置、

いざと成ればエマルジョンシールドを最大展開する体制です。

チームフリーダムは現場を囲むように配置、

出てくる敵を全て殺害するように命令を出しておきました。

チームウィンドは、いつでも突入出来る体制です、中でチームフォレストと合流の手筈です」(アマローネ

「まあ、妥当だろう？」(ヴァロット

包囲（後書き）

次回..突入作戦が開始される。

突入！（前書き）

突入の合図の瞬間、スペシャルフォースを囲むように108部隊の精鋭が、

更に外側を囲むようにスクールの生徒達が転送されてくる。作戦はここまでは完璧だった。

突入！

それからどれ位の時間が経ったのだろうか？

組長達はイライラとジャヌヴィアが来るのを待っていた。

もう予定時刻を過ぎているようだ。

まだ誰もやってくる気配がない。

組事務所の前では二人の門番が誰か来ないかと見張りを続けている。

このマフィア達、取引を仲介してその手数料をしのぎにしているのだ。

でも、仲介をすると言う事はそれだけ情報が漏れやすくなる。

だから、その情報が裏社会を通じてヴァロットの所に渡ったのだ。

「まだか？ ジャヌヴィアは？」

組長も焦る。

だが、その時だった。

「僕ならもうとっくに来ていますよ、昨日から」

どこかで声がした。

辺りを見回すが特段変わった様子はない、全員が部屋の中を見渡す。

「もう、嫌だなあ目の前に居るのに……」

声がしたのは椅子だった。

そう、この日に合わせて準備した応接セット、彼？はその椅子に化けていたのだ。

そして昨日から既にこの屋敷にいたのだ。

（なんて変身能力、私たちでも気が付かなかった）

ユウコ達はそう思った。

そして、取引を見守る。

どんな事をしてでも無事にロストログアを回収しないと行けない。
物が取り出される瞬間を見守る。

ジャヌヴィアが姿を現す。

黒のタキシードに黒の山高帽、裏が赤い黒のマント、
思ったより体の線は細い。でもその姿としてジャヌヴィアの素顔とは
言い切れない。

顔は縦に半分黒く半分白い仮面で隠している。

男なのか女なのかさえ分からない。

ただその雰囲気からただ者では無いかかなり狡猾な奴だとはっきり分
かった。

そして彼は懷から通信デバイスを取り出すと机の上に置く、

組長も、組織のボスも通信デバイスを取り出す。

そう、殆ど電子マネーのミッドチルダでは、こうやって現金の受け
渡しをする事が多い。

特に多額の現金となると持ち運ぶだけで嵩張るし、重い、万が一の
時の逃走には邪魔になる。

だから、こうやって決済するのだ。

まずは決済を確認、今度は懷から透明なケースに入った魔導書を取
り出した。

「この場で封印を解かないで下さいよ、

調べた限りでは100m以内ぐらいはあっという間に食われちゃうみたいですから？」（ジャヌヴィア

（よし、ブツを確認した。作戦開始！）（ユウコ

「突入！」（ヴァロット

その瞬間、一迅の風が組事務所の玄関を通り抜けた。

二人の門番はお互い顔を見合わせた瞬間、お互いの首に大きな傷が出来ている事に気が付いた。

でも手遅れだった。そこからは激しく血を吹き出し、玄関を真っ赤に染めて倒れた。

突入の合図の瞬間、スペシャルフォースを囲むように108部隊の精鋭が、

更に外側を囲むようにスクールの生徒達が転送されてくる。

作戦はここまでは完璧だった。

作戦開始の瞬間、背中を一太刀され倒れる組長、それだけでなく

組織のボスも側近らしき男も、

組員も、ジャヌヴィアも斬られた。

既にチームフォレストに囲まれていたのだ。

霞技を使っていた為誰も後ろにいる事に気が付かなかった。

ユウコが魔導書に手を掛ける。

その瞬間だった。

ポンッ

小さな爆発音と共にケースが破裂する。

ジャヌヴィアはケースの中に小型の爆薬を仕掛けていた。

そう、万が一の為にケースに細工がしてあったのだ。

ケースが割れ、その上に封印が解けかけた。

もの凄い魔力がわき起こる。

「いけない、全員待避！ここから先は封印術者に任せる」

待避しようとした瞬間気が付いた、既にその場にジャヌヴィアの姿がなかった。

ジャヌヴィアは死んではいなかった。

いや、よく見れば血糊は本物じゃあない、偽物だ。

最初から斬られたふりをして倒れた演技をしていたのだ。

そして一瞬の隙を突いて脱出、逃げられてしまった。

だがユウコ達もぐずぐずしていられない、巻き込まれたら自分たちも終わってしまう。

チームウィンドと合流すると一目散に逃げ出す。

この場合は既に危険すぎるのだ。

「不味いな、行くぞ！」（ヴァロット

ヴァロットとヴァロワが現場に突入する。

その頃スクール、突入直後、ふらふらと事務所から出てくる組員達、

どうやら逃げようとしていたようだが、108部隊もそんな組員に取り合わない、

そしてそれはジョン達の前までやって来た。

その瞬間、体に赤い線が走る。

一人は真っ二つに、一人はバラバラの肉塊に変わり果てた。既に死んでいたのだ。

「何だよこれは！逮捕するんじゃないのかよ！？
こんな酷いやり方があるのかよ！？」

声を荒げるジョン、その横では何人かの女子が卒倒していた。あまりに凄まじい状態、とても人のやる事ではなかった。いくら作戦とはいえ、人として許されない事をしている。ジョンはそう思った。

あの人の近くで働きたいと言う憧れは音を立てて崩れた。ただヴァロットへの怒りだけが湧き起こる。

「校長より通達、現場の状態が悪化しました。
これよりプラン2に移行します。

全生徒及び108部隊は避難誘導を開始して下さい」（なのは

現場はもうそれどころではない。
今まさに最大の危機が訪れようとしていた。

突入！（後書き）

次回…魔導書の化け物とヴァロットの死闘、一方、黒い旅団は報復の為全軍を上げて総攻撃してくる。

さあ、このピンチどう乗り切る？

死闘（前書き）

その時だった、月軌道に巨大な要塞が現れる。

他にも中型の攻撃戦艦15隻、そして夥しい数のガシエットドローン2型、数十万機はいる。

それは絶望的な光景だった。

味方の船じゃあない、見た事もない軍団だった。

とても穏やかに済みそうにない、相手は攻撃態勢を取っているのだ。

死闘

「どうだ再度封印出来そうか？」（ヴァロット

「難しいです、僕の封印術を持ってもこいつの魔力に敵いそうにありません、

1時間程度時間を稼ぐのが精一杯です」（ヴァロワ

「そうか？仕方がないな、こうなったら最も安全な方法を取る」（ヴァロット

そう言ってヴァロットはモニターを開く、

「作戦に参加する全隊員に通達する、避難の必要はない、これより問題の魔導書を安全な海上に転送する。

海上で敵の攻撃力を奪っておいでコアを消滅させる。

作戦に参加出来る魔導士は参加して欲しい」（ヴァロット

言うが早い魔導書を安全な海上に転送する。

そこで封印は解けた。

姿を現す巨大な化け物、その姿はカニのような蜘蛛のような不気味な物だった。

近くにあった岩礁帯があつという間に侵蝕されて塵となって消える。そう、こいつの特徴は、形ある物を侵蝕して喰らい尽くす。

「あ、ヴァロット君、助っ人に来たわよ、
デイバイイイイイイイイイイイイイン・バスタアアアアアアア
アアアアアアアッ」（なのは

チウドオオオオオオオオオオオオオオ

「えっ、効いてない？」（なのは

「効いていないんじゃない、吸収されましたね？」（ヴァロット

化け物は更に巨大化を始めていた。

「恐らく、物理攻撃や直射型の魔法は全く効かないでしょう？

ただ見て下さい、海水や空気は侵蝕されていない、

まだ侵蝕するだけの力が出せていないようです、仕留めるなら今の内です」（ヴァロット

「仕留めるならってどうやって？」（なのは

「ヒントは水と空気です、簡単には侵蝕出来ない物なら攻撃に使えます」（ヴァロット

「私が出る幕はなさそうだね？」（なのは

なのははそう言って帰っていった。

「まったく余計な事をしてくれたなあ？アプリリア、召喚！」

召喚されたアプリリア、そうヴァロットにとってそれは最後の切り札だった。

元来、水系、風系の術者は非常に少ない、召喚士よりも貴重だったりする。

作戦に必要な術者で、そこまでの魔力を持った者は皆無に等しかった。

「アプリー、あれをやるぞ？」（ヴァロット

「了解！」（アプリリア

「「ユニゾン・イン」」（二人

これが最後の切り札、ユニゾン・イン、

アプリリアの能力は、ロードに風と水の攻撃魔法を与える事だ。
この状態でヴァロットはリミッターを解除する。

ミッド全体を振るわせるほどの巨大な魔力が巻き起こる。
バリアジャケットが消え背中に風の翼が形成される。

「ウォータースラッシュ！」（ヴァロット

何かが通り抜けた瞬間、化け物の足が鮮やかに切り落とされる。

そう、圧縮した水で斬ったのだ。

極限まで圧縮された水はダイヤモンドすら滑らかに切り裂く、
今まさにヴァロットは無敵の剣と最強の盾を手に行っているのだ。

でも、化け物は切り落とされた足すら侵蝕し融合する。

あっという間に再生した。

「くそ、これじゃあ埒が開かない」（ヴァロット

結局、増援の魔導士達は役に立たず、遠巻きに見守る事しかでき
なかった。

その時だった、月軌道に巨大な要塞が現れる。

他にも中型の攻撃戦艦15〜16隻、そして夥しい数のガシエット

ドローン2型、数十万機はいる。

それは絶望的な光景だった。

味方の船じゃあない、見た事もない軍団だった。

とても穏やかに済みそうにない、相手は攻撃態勢を取っているのだ。

「クラナガン周辺の全魔導士に次ぐ、飛べる者は全員成層圏まで上昇しろ、

敵を迎撃する。召喚士は何としてもクラナガンを守り抜け、一発たりとも地上に砲撃を落とさせるな！」（シグナム

シグナム作戦指令室長自らが指揮に乗り出した。

「ブラシカ発進！これより迎撃に向かう！」（アマローネ

ブラシカが衛星軌道にまで飛び上がってきた。

たった1隻の戦艦と数千人の魔導士、数の上でも絶望的に不利だった。

敵のガシエットがブラシカに向けてミサイルを放つ、そう、ガシエットドローン2型は背中に8発のミサイルを搭載している。

ブラシカのバスター砲が火を噴く、その威力に飲まれたミサイルが爆発する。

ただ普通の爆発じゃあなかった、あまりに巨大な爆発、巻き込まれたミサイルやガシエットも消えて無くなる。

「ただのミサイルじゃありません、反応消滅弾です！あんなのが近くで爆発したら一般の魔導士達では全滅してしまう！」（グリフィス

「全砲門開け！撃って撃って撃ちまくれ！弾幕を切らすな！

ミサイルを船に近付けさせるな！発射される前にガシエットごと消してしまえ！」（アマローネ

「うおっ、あぶねえ！」

化け物は腹の下からのばした触手を海中からヴァロットに向けて伸ばしてくる。

まるで直射砲か鞭のような攻撃、下手に喰らえば侵蝕されて自分が終わる。

攻め倦ねるヴァロット、絶望的な迎撃を強いられるブラシカ、まともな迎撃さえ出来ない魔導士部隊、状況はどんどん悪化していく、

せめて魔導書だけでも片付けられればヴァロットが何とかしてくれるだろう？

でも状況がそうさせてくれない、状況は刻一刻と悪くなっていた。

（くそう、こいつを早いこと片付けない事にはミッドが終わってしまふ！）（ヴァロット

今までにない焦りを感じるヴァロット、ミッドはかつて無い危機を迎えていた。

死闘（後書き）

次回…絶望的な戦いの中でそれでも何とか持ちこたえるブラシカ、
そんな中で一発の反応消滅弾がリン達の前に落ちてくる。
その危機を救ったのは？……起死回生の反撃が始まる。

形勢逆転（前書き）

それはあまりに圧倒的だった。

ブラシカのバスター砲と同等の威力を持ったバスターキャノンをぶっ放すザク達、

その軸線付近にいたガシエット達は一瞬で消滅する。

1発で数百から数千のガシエットが消えて無くなる。

そこへストライクガンダムと、ストライクルージュが加わって圧倒的な攻撃力で

ガシエット達の群れを消していく、既に形勢が逆転していた。

形勢逆転

「くそっ、簡単には攻められない！」（ヴァロット

元々召喚士でフルバックのポジションにいる彼にとって、直接敵を攻撃する魔法なんて持ち合わせていない。

アプリリアによって与えられる魔法もあまり上手く使えていないのが実情だ。

いくら攻撃魔法を与えられても違うポジションで使うという事には慣れていない。

でもやるしかない、彼以外にこんな化け物と戦える者などいないのだから。

ブラシカも絶望的だった。

エマルジョンシールドは邪魔になるので極限まで小さくして、補助魔法陣のみで船体を防御している。

その上で砲撃戦を行っている。

じり貧状態だった。

航空魔導士達はいくら砲撃をぶっ放しても衛星軌道まで届く者は殆どいない、

やはり超長距離の砲撃なんて出来るのはごく限られた魔導士だけだ。

でも、そんな中にいた、とんでもない長距離を砲撃出来る魔導士が……

「こちらエリカ、前方の魔導士！巻き込まれたくなかったら砲撃のコースを空けなさい！

衛星軌道上の敵を狙い撃つ！」（エリカ

そう、こう言う時の為に開発された新魔法があるのだ。

「ハイパアアアアアアアレールキャノン・エクステンション、フアイヤアアアアアアアアッ」

エマルジョンコレクトのシールドと補助魔法陣を一直線に並べ、それを電磁力で包んで巨大なレールガンを作成、

それを自分のレールガンで撃ち抜く事で超長距離砲撃を可能にした砲撃魔法だ。

地上から放たれたその一撃は大気圏を突き抜け敵の攻撃戦艦に命中、一瞬で大破轟沈した。

（魔力が足りない、撃てるのは後5発か？全て打ち落とす事は不可能ね？）（エリカ

「凄い、なんて戦い」

スクールの生徒はそのもの凄い戦いを見ている事しかできなかった。

地上に落ちてくる砲撃やミサイルは召喚士が何とか宇宙へ転送して持ちこたえている。

でも、何時までも魔力が持つはずもなく少しずつ魔力を削られている。

敵の方も少しだけその数が減ったとは言えまだまだもの凄い数だ。

「せめてブラシカがあいつらの中に飛び込めれば形勢が逆転するかも知れないのに！」（アマローネ

だがここでミッドの盾になる以外に方法がない、もしここでその

役目を放棄してしまえばミッドが、クラナガンが終わってしまう、自分の愛する人たちがみんな死んでしまう、

ブラシカは絶望的な状況の中で耐えるしかなかった。

それでも激しさを増すミサイル攻撃、討ち漏らしたミサイルを召喚士達が宇宙へ転送している物の、その数をだんだん捌ききれなくなってきていた。

「しまった」

その一発を捌き損ねて、補助魔法陣の間を抜かれた。ミサイルが地上に向かって落ちていく、クラナガンのど真ん中に向かって……

「えっ、ミサイル？」（リン

反応消滅弾がこんな所で爆発したら、その一発でクラナガンが消えて無くなる。

もうミサイルは目の前に迫っていた。

「も、もうだめだ！」（ジョン

その瞬間だった。

誰かの飛ばした補助魔法陣がミサイルを飲み込んだ。

そして目の前に現れたのは巨大な転送魔法陣、中から現れたのはストライクガンダムI W S P

「危ない所だったわね？」

女性の声だった。

凛々しく力強い女性の声、私は救いの女神だと思った。
そしてストライクガンダムはまた転送魔法陣をくぐる、宇宙での戦いをする為に。

「遅れて済まん、我々SEALSとラベルダは黒い旅団を殲滅する！」（ネロ）

「魔導士部隊はミッドの防衛に当たれ、成層圏ギリギリから破壊出来るミサイルを全て打ち落とせ、
突破されたら奴らのど真ん中に転送してやれ！総員出撃！」（バローロ）

「機動兵器部隊発進せよ！」（ネロ）

「何だあの巨大ロボットは？管理局法違反だろ！何で質量兵器なんか持って居るんだ！」（旅団指揮官）

「全機掃射開始！」（フィノ）

それはあまりに圧倒的だった。

ブラシカのバスター砲と同等の威力を持ったバスターキャノンをぶっ放すザク達、

その軸線付近にいたガシエット達は一瞬で消滅する。

1発で数百から数千のガシエットが消えて無くなる。

そこへストライクガンダムと、ストライクルージュが加わって圧倒的な攻撃力で

ガシエット達の群れを消していく、既に形勢が逆転していた。

「この場合は任せました、私は残りの戦艦を落とします」（フィノ）

フィノは残り10隻の中型戦艦に狙いを絞った。
既に6隻、エリカの砲撃で落とされ、旅団の戦力はかなり低下して
きた。

次々と戦艦が落とされていく、対艦刀に切り裂かれ、
巨大な砲撃に撃ち抜かれてあつという間に10隻とも撃沈した。

今までの管理局だったらここまでの攻撃には耐えきれなかっただ
ろう？

でも、今は違う、平和を守る為に鍛え上げられたスクールの卒業生
達が居る。

そしてこれだけの攻撃に曝されたにも関わらず、今のところ何の被
害も出ていない。

「唸れ！風の障壁！」（ヴァロット

ヴァロットは強力な竜巻を放つ、竜巻は化け物を飲み込んで空中
に巻き上げた。

流石の化け物も風を浸食する事は出来ない、手も足も出せなかった。

「消滅結界陣！」（ヴァロット

竜巻ごと消滅結界陣に閉じこめる。

そして結界陣から下に向かって放たれる光線、すぐ下に次元断層が
開く。

「墜ちろ！奈落の底に！」（ヴァロット

化け物は次元断層に飲まれて消えた。

虚数空間に触れればどんな化け物だろうと、もうどうしようもなかった。

触れれば消滅するしかないのだ。

次元断層が閉じる。

「アプリー、ブラシカに飛ばすぞ、最後の仕上げを頼む」（ヴァロツト

アプリリアはブラシカに転送された。
ユニゾンリンクシステムが起動する。

「こちらブラシカのアプリリア、ヘレン聞こえる？」（アプリリア

「こちらヘレン、聞こえてるよ？」（ヘレン

「最後の仕上げにあれをやるよ、準備は良い？」（アプリリア

「了解！」（ヘレン

「「ストライクフレイム、オープン！ACSドライバアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」」

2隻の戦艦はストライクフレイムをオープンにすると巨大な移動要塞に突撃する。

そして要塞に二つの大穴を空けた。

ドオオオオオオオオオオオオ

巨大な火の玉と化す要塞、それでもミッドに向かって特攻を掛けてきた。

「あんなデカイのどうやって吹き飛ばすのよ？」

そう、このまま破壊してもその巨大な残骸は落ちてくる。
今度こそどうしようもないかと思った。

その時、地上本部ビルの屋上から放たれる巨大な魔法、
白銀の光は火の玉を飲み込むと跡形もなく吹き飛ばした。

「なんて馬鹿魔力！」（クロスリード

そう、八神はやて地上本部長だった。

その圧倒的な砲撃は巨大要塞をも物ともせずに吹き飛ばす。

「なんて化け物！」（ジョン

八神本部長はロード・オブ・ザ・魔王なのだ。

この程度の要塞など彼女にとって単なる張りぼてでしかない。

一瞬で木っ端微塵、まさに殲滅兵器だった。

誰もがその凄さに息をのむ、（この人を怒らせてはいけない）地上
本部の職員達は、

改めてその恐怖を思い知る。

形勢逆転（後書き）

次回…久しぶりに集合する卒業生達、ヴァロットに食って掛かるジョン、

その場で厳しい指導が成される。一方リンは……

指揮官たる者（前書き）

だが、そんな考え方をしているようでは指揮官研修には合格させてやれんな、

恐らく、そいつが指揮官ならあつという間に部下の命を奪われ、後悔という地獄に堕ちるだろう？ もっと大人になれ、もっと広い視野で物を見ろ、

それが出来なければお前は指揮官には成れん、武装隊の平隊員ぐらいで丁度良いんだ

指揮官たる者

こうして事件は終わった。

ミッドに、クラナガンに何の被害も出すことなく終わりを迎えた。今衛星軌道では、残骸の回収やら不発弾の処理やらが続いている。それももうすぐ終わりそうだ。

次元航行隊のキャノーラ、ラベルダは上空に停泊、ラベルダの一部の小隊が後片付けをしている所だ。私たちはスクールの海上訓練施設に移動する。

108部隊やスペシャルフォース、SEALSの魔導士も集合だ。ブラシカと、あのストライクガンダムも降下してくる。2機のザクも護衛に付いている。

ブラシカは訓練施設の隣に停泊、3機の巨大ロボットはそのまま訓練施設に着陸した。

そしてパイロットが姿を現す。

護衛の二人はグリーンのパイロットスーツ、指揮官の人は白のパイロットスーツだ。

ヘルメットを取った瞬間驚いた。

全員女性だった。

そして指揮官の女性はとても凛々しくて美しかった。

思わず私の胸は早鐘が鳴る、雷に打たれたような衝撃が通り抜けた。

そしてその場で校長先生から訓辞がある。

「皆さん、今夜はご苦勞様でした、お陰で被害を出すことなく事件を解決する事が出来ました。

明日は1日休養日とします。なお、皆さんは囑託魔導士扱いで後日
日当が出るそうです」（なのは）

「みんな済まなかった。俺の作戦ミスだ。
もつとスマートにロストログアを回収していればここまでの戦闘に
は成らなかったと思う。

チーム編成に配慮が足らなかった」（ヴァロット）

最強の指揮官はそう言って頭を下げた。

でも、あれは仕方の無かった事、敵の方が1枚上手だっただけの事
なのだが、

それでも自分に非があると責任を謝罪という形で取るヴァロット1
佐、

指揮官の鏡と言える姿勢だった。

だがそのヴァロットに食いついた奴が一人、ジョンだった。

「何がスマートにだ！あれじゃあただの虐殺だ、ただの人殺しじゃ
ないか！

ザコまで殺す事はないだろう！やる事が滅茶苦茶じゃないか！
犯罪者にだって人権があるだろうが！」（ジョン）

「黙れ！」（クロスリード）

いきなりジョンを殴り倒したのはクロスリードだった。

「一番苦渋の選択をしているのはヴァロットさんだ、
指揮官の何たるかも知らないヒヨッコが吠えるんじゃないか！」（ク
ロスリード）

「おい、そこ喧嘩するな、確かにそいつの言う事も分かんでは無い、

だが、そんな考え方をしているようでは指揮官研修には合格させてやれんな、

恐らく、そいつが指揮官ならあつという間に部下の命を奪われ、後悔という地獄に堕ちるだろう？もっと大人になれ、もっと広い視野で物を見ろ、

それが出来なければお前は指揮官には成れん、武装隊の平隊員ぐらいで丁度良いんだ」(ヴァロット)

それはあまりに厳しい一言だった。

恐らく自分はもう指揮官研修にさえ受からないだろう？後3週間で言われた事が出来なければもう落ちこぼれは確定だ。そして一生平隊員のままの人生が確定してしまう。

「お前に一つ聞く、あの場で最も優先されるべき事は何か答えろ！」(ヴァロット)

「優先されるべき事？」(ジョン)

「そうだ、全てに於いて最優先されるべき事だ」(ヴァロット)

「仲間の命？それとも犯人の逮捕？」(ジョン)

「不正解だ。もっと広い視野を持てと言っているのが分からないか？」(ヴァロット)

まだ分かっていないジョン、それは指揮官として最も大事な事、自分の命に代えても絶対に守らなければ行けない事だった。

「最も優先されるべき事は一般市民の安全だ。

それが確保出来ない現状では、非情な手段もやむを得ない。

市民の安全を最優先しつつ、部下の被害を防ぎ、なおかつ安全に作戦を遂行する。

それを考えられない限りは指揮官としてやっていけないんだ」（ヴァロット

そう、あの状況で市民には全く被害が出ていない、それどこか作戦に参加した隊員全て無傷だった。

ヴァロット達は一般市民どころか味方全てに被害が出ないように作戦を遂行していたのだ。

しかも途中から激しい戦闘になったにもかかわらず、それで居て被害を最小限に抑え、

なおかつ全ての作戦を無事に終了していた。

それはヴァロットの力だけじゃあない、このスクールを卒業した先輩達全ての力だった。

例えばどんな敵が来ようとも、このスクールの卒業生が居る限り絶対に平和を守り抜いてみせる。

彼らは卒業の時そう誓い合った。

その誓いを何時までも守り続けているのだ。

「お前、覗きが大好きだろう？」（ヴァロット

「なっ」（ジョン

「お前の心は覗き穴と同じなんだよ、視野が狭くて小さい、

そんな事じゃあいつまで経っても大人には成れんぞ、

覗くんじゃなく堂々と女湯に入っていくぐらいの度胸がなければだめだ。

もつと広い視野で物を見なければいつまで経っても真実は見えてこない、
もつと広く遠い所まで物を見なければ自分の殻は破れない」(ヴァ
ロット

ジョンにとってそれは最も効果のある指導だったかも知れない、
ジョンは自分の有り様を看破され、返す言葉すらなかった。
ヴァロットの相手を見抜く力に自分の至らなさを嫌と言うほど味合
わされていた。

その頃、フィノに近づく人物が一人、リンだった。

「あ、あのー、先ほどは助けて頂きありがとうございました!」

元気よく礼を言うリン、そこまでは良かった。
でもなぜか赤い顔をしている。

「あ、あのー、それですネ……これからあなたの事を……お姉様
と呼ばせて下さい!」

リン、百合に走った。

指揮官たる者（後書き）

次回…事件の総括と打ち上げが行われる。その席で……

打上（前書き）

同日夕刻、地上本部大ホール

前の晩の戦闘を労う為の打ち上げだった。

でもなぜか人数が多い、飲み会があると言うだけで紛れ込んでいる
困った職員も多い。

打上

「明日の夕方今回の事件の打ち上げをやります。
参加出来る人は参加して下さい」(なのは)

「やった、お姉様とお近づきになれる」(リン)

その夜はそうして解散した。

翌朝、捜査本部

「じゃあ、結局ジャヌヴィアに逃げられたのね？」(グレイス)

「済まない、あそこは確実に首を刎ねるか突き刺すよう指導してお
くべきだった。

まだ確実性が足りなかったな？」(ヴァロット)

「でも、取引相手は死亡、やくざの組は一つ潰せた訳だし、それな
りの成果はあった訳だ？」(レヴ)

「しかしなあ、あんな厄介な物を持ち込んでくれるなよ？俺でも手
こずったぞ？」(ヴァロット)

「私だってあそこまで厄介な物だとは思わなかったわよ？
殆ど調査のされていないロストログアだったし」(レヴ)

「僕の調査によるとですねえ、
あれは食べて食べて食べ尽くしたいという欲望を極限まで増幅して
具現化した物で、

名付けるなら欲望の書とでも呼びましようか？最終的には世界その物を食べ尽くしてしまう。

実に厄介な物です。もう少し成長していたら海を吸い尽くしもっと巨大化していたでしょう？」

ヴァロワの報告に全員呆れ顔だった。

後にこの事件は「欲望の書事件」と呼ばれるようになる。

「所でバローロ達はどうするんだ？」（ヴァロット

「俺たちは明日から旅団の残党狩りにはいる。

元々かなりの戦力を保有していた事はつかんでいたが、情報よりも戦力が大きすぎる。

どこであのガシエットを製造していたのか？

反応兵器の入手先や、その金の出元などを探る必要がある」（バローロ

「でもなぜ旅団の連中はあそこまでタイミング良く攻めてこられたんだ？」（ヴァロット

「ああ、司法解剖の結果ボス達に生体反応センサーが埋め込まれていた事が分かってる。

つまり、心臓が止まればすぐに報復に来られる手筈だったんだ」（バローロ

「しかし、ネロ達には美味しい所を持って行かれたなあ？」（ヴァロット

「当然だ、あそこで目立たなくてどうする。

機動兵器部隊の存在意義を示すには最高の舞台だった。

これでもう少し予算を増やしてもらえそうだ」(ネロ

「ちゃっかりしてるわねえ？」(山田

こうして事件の総括がなされ、欲望の書事件は終結した。

同日夜刻、地上本部大ホール

前の晩の戦闘を労う為の打ち上げだった。

でもなぜか人数が多い、飲み会があると言うだけで紛れ込んでいる困った職員も多い。

それだけじゃあなかった、引退したとはいえあの酒乱大魔王も紛れ込んでいた。

打ち上げが始まる。

「みんな、昨日はご苦労さんやった、今日は思いっきり飲んでな？」
(はやて

そして出された料理に舌鼓を打ち酒を口にする。

スクールの生徒達はお酒厳禁なのでジュースではある物の打ち上げに参加していた。

「校長先生凄い飲みっぷり！」(サクラ

「お姉様はどこ？」(リン

その一角では提督服を着た何人かと、フィノが歓談していた。

そう、そこには八神はやて本部長を中心に、ネロ、フィノ、ヴァロ
ット、

バローロという出世著しいスクールの卒業生達が揃っていた。

「カトリーヌは随分パワーアップしたなあ？ 見た目も随分変わったし」(ヴァロット)

「そうね？ でもストライクガンダムが一番効率が良いのよね？ オプションパーツが充実してるし、TPOに合わせてオプションを交換すればどんな作戦にでも対応出来るし、
なんと言ってもワンタッチでパーツ交換が可能だから楽なのよね？」
(フィノ)

「なあ、あの機動兵器一機幾らするんや？、お安くなるんか？」
(はやて)

「何を考えて居るんですか？ 本部長？」(ネロ)

「いやあ、航空防衛隊に5機ほど導入出来たら良いかなって思ったんやけど……」(はやて)

「結構高いですよ、ガンダムシリーズだと大体これ位」(フィノ)

計算機を取り出してはやてに見せるフィノ、それを見てはやてが目丸くする。

「そ、それはあかんで予算オーバーや、もっとお安くならんのかいな？」(はやて)

「ザクならガンダムシリーズの3分の2ぐらいですが」(フィノ)

「そ、それでも予算が全然足りへん、きつついわあ、

クロノ君本局で調達してこっちに5機ほど回してくれんかなあ？」
(はやて)

「あ、あのう……」(リン)

私は声を掛けようとした物の、話しについて行けず声も掛けられなかった。

どおやらあのロボット兵器を導入する話らしい。

「あら？あなたは昨日の？」(フィノ)

「はい、リン・ヤマザキです！」(リン)

お姉様は覚えていてくれた。

嬉しかった、もの凄く、これはもしかしたら付き合って貰えるかも……

ぐにつ、モミモミ

「へっ？……？」

「うーん、84のCって所かな？」(はやて)

「きやああああああああああっ！」(リン)

「あーるーじー、またセクハラをおおおおおお！」(シグナム)

そして追いかけてここが始まる。

「な、何なの？あの人？」(リン)

「許してやってくれ、あれでも一応本部長だし」(ヴァロット)

「何なんですか？あの人とは？」(リン)

「まあ、あれはあの人なりのスキンシップだ、気にするな」(バロ
ーロ)

よく見ればみんな提督服を着た人たちばかり、この一角は凄い人ばかりが揃っていると改めて気が付いた。

「所でおまえ、将来は機動兵器部隊に入りたいのか？」(ネロ)

「この子には無理だろう？召喚士じゃあないし、ユニゾン適性も無さそうだしな？」(ヴァロット)

「ユニゾン適性？」(リン)

「あれはな、機械じゃあないんだ、モビルスーツ自体は着ぐるみでな、中に召喚獣が入って居るんだ」(ネロ)

「ええっ？」(リン)

だから管理局法に違反しないんだ？

私は機動兵器部隊が何故存在出来るのか？何故堂々と違反しているのか疑問だったけど、

その疑問の全てが無くなった。

召喚獣なら管理局法には違反しないし、それに簡易デバイスを持たせているだけなら傀儡兵と何も変わらない。

見た目に迫力があるし、強いし格好いい、それにコクピットに入れ

るというのがアイディア賞物だと思う。
あれなら激しい戦闘だって耐えられる。

「所でさあ、おまえら家に帰らなくて大丈夫か？子供達に寂しい思いをさせるのは良くないぞ？」（ヴァロット）

「大丈夫だ、交代で帰っているし、うちは数多くの使用人が居るからな、子供達に寂しい思いはさせてないよ」（ネロ）

「子供って？」（リン）

「なんだ知らなかったのか？この二人は夫婦だ、子供も3人いる」（ヴァロット）

「そ、そんな……」（リン）

その一言は私を奈落の底へ突き落とした。

大好きだったのに……まさか旦那が居たなんて、まさか子供まで居たなんて……

目の前が真っ暗になった……

リンの恋は1日で散った。

打上（後書き）

次回…新章突入、各試験に向けて努力する生徒達、そして模擬戦大会も迫ってくる。

挫折（前書き）

ジョンはすっかり分からなくなった。

最初は強くなってインターカップで優勝してバラ色の人生を……と
考えていた。

でもそれは甘かった、甘い妄想でしかなかった。

自分がどれだけ小さい人間なのか思い知らされた。

自分の馬鹿さ加減に呆れて言葉もなかった。

打上の時も仲間の中に入っていけず、ずっと一人隅っこの方で落ち
込んでいた。

挫折

俺、何でこんな場違いな所に居るんだろう？

ただ強くなる為だけにこのスクールに入ったのに、いつの間にか指揮官目指して、それも叶わなそうで、

この先何をやったら良いんだろう？

ジョンはすっかり分からなくなった。

最初は強くなってインターカップで優勝してバラ色の人生を……と
考えていた。

でもそれは甘かった、甘い妄想でしかなかった。

自分がどれだけ小さい人間なのか思い知らされた。

自分の馬鹿さ加減に呆れて言葉もなかった。

打上の時も仲間の中に入っていけず、ずっと一人隅っこの方で落ち込んでいた。

「俺、あの人の足下にすら追いつけない気がする」

初めて口にした弱音、初めて味わう挫折、その味はあまりに苦く
苦しい物だった。

「おまえの心は視野が狭くて小さい、覗き穴と同じだ」

ヴァロットの言葉が胸を抉る。

そう、入学した時から周りの女の子が気になって覗きまで始めてしまった。

そうやっている内に周りにどんどん置いて行かれ、気が付けば一番
の落ちこぼれになっていた。

「こんな筈じゃあ無かったのに」

そう口にして更に落ち込む、あの事件の夜、犯人達を簡単に殺してしまったヴァロット1佐、それを酷いやり方だと罵った物の、それは本当に周りが見えていなかった。

もし犯人達が武器を取って反撃したら？もし外へ逃げ出した犯人達が人質を取ったら？

例えバインドで縛り上げたとしても、魔導書が暴走すればその縛り上げた犯人達を救助しなければ成らない。

結局部下を危険に曝す事になる。全て指揮官適性試験の参考書に書いてあった。

そしてヴァロット1佐は、教科書通りの事をこなしているに過ぎない、

あくまでも冷静に、かつ冷徹にそれをこなしているに過ぎなかった。

「俺どうやったら強くなれるのだろうか？どうやったらもっと大きな人間になれるんだろう？」

激しく落ち込み悩む少年を目に留めたのはレティだった。

彼女はこの打上に紛れ込んで暴れる魂胆だったのだが、一人落ち込む彼を見過ごせなかった。

彼にそっと声を掛けてみる。

「何故そんなに落ち込んでいる、少年？」

ジョンはぽつりぽつりと話し始めた。

「なるほど、そんな事が……でもね、それはまだ許される事よ、同じ失敗を二度繰り返さなければいいの、

あなたはただ怒られて落ち込んでいるだけよ、あなた達の校長先生はね自分の失敗から命を落としかかったの、

本当に酷い怪我だった……生死の境を一月も彷徨ってどうにか生還したのよ、

あの時もし亡くなっていたら今のスクール所か、管理局さえ存在しなかったかも知れない。

あなたのミスはまだ取るに足らない物よ、ただ怒られただけ、もうミスをしなればいいの、

同じミスはもう二度と繰り返さない、言われた事は必ず出来る様にする、ただそれだけよ、

校長先生も、ロシェット1佐もあなたに比べればもっと酷い失敗を乗り越えているの、

あなたはいつまでも落ち込んでちゃダメだわ？それに言われなかった？

失敗は出来る時において、失敗出来る時に失敗してそこから学ぶの、指揮官になれば失敗は許されないわよ？」

そう、ヴァロットにも言われた、スクールにいる内に、失敗出来る内に失敗しておけ、

その失敗から学んで大きくなれと、社会に出ればもう失敗は許されないと言われた。

やっと彼の心に光が差し込んでくる、表情に力が戻ってくる。

そうだ、同じ失敗は二度しなければいい。今は失敗した事を怒られたに過ぎないだけだ。

「所であなたは？」（ジョン）

「レティ・ロウラン、前の地上本部長よ」（レティ）

そう言って彼女はジョンの前を離れた。

（あの子もしかしたら大化けするかも知れないわね？）

レティはそう心の中で思った。

と、ここまでは良かった物の、レティはなのはとはやてに捕まった。

しこたま飲まされて潰されるレティ、また同じ失敗を繰り返してしまった。

「全然ダメじゃん」（ジョン

ちょっと不安なジョンだった。

少し離れた所では表情がハニワになっている少女が一人、リンだった。

勝手に好きになって勝手に終わった恋、不毛だった。
あまりに虚しかった。

最早周りの大人達の会話なんて耳にも入らない、ただ呆然としていた。

こうして打上の夜は更けていった。

翌日からやる気の違う生徒達、特にジョンはやる気が違う。

もうこれ以上後れを取る訳にはいかなかった。

試験まで後少し、試験が終わってもすぐにやってくる模擬戦大会、今度こそ負ける訳には行かない。

何としても1勝を挙げる事、それを目標に厳しい練習が続けられていた。

でもそんな1年生を奈落の底に突き落とす発表があった。

そう、学期末の模擬戦大会は一般参加有りの完全トーナメント戦、しかも一般参加は殆どのチームがスクールの卒業生なのだ。

まあ、一応全員卒業生だと在校生が勝てなくなってしまうんで、1チーム当たり卒業生は二人までと言う事にしてある。

それでも驚異だった。これではマジ勝てない、また1勝も出来ずに終わるかも知れない、1年生達は絶望の淵に立たされた。

おまけに、先生達もチームを作って参加するという、これはかなりやばい大会になりそうだ。

「ねえ、知ってる？士官学校チームが参加するらしいよ？そこ当たれば勝てるかも知れない」（エヴァン

と僅かな希望を口にする生徒が居た物の……

「あ、それ絶対無理、私の妹と校長先生の娘だから、まず勝てないわね？」（サクラ

「それってどう言う事？」（バランタイン

「あの4人はね、うちのお姉ちゃんと校長先生から直接指導を受けてる超エリートなの、

御神の剣も使いこなすし、神速だって使えるから2年生でも戦えるのは生徒会ぐらいの物よ、

卒業生でも危ないかも？」（サクラ

そう、とんでもなくやばいのが参加しようとしていた。

それだけじゃあない、このチーム来年にはスクールに入学してくるのだ。

今年の1年は相当頑張らないと来年は立つ瀬がない、舐められたら相当悲惨な思いをしなければならぬ。

それは彼らにとって途轍もなく大きな試練だった。

「何？校長先生の娘が参加する？」（ジョン）

「なんか今の2年生より強いらしいよ、かなりやばい相手らしい」（バランタイン）

「おいおい、そんな事言ったら俺達全く勝てないじゃん、こうなったら同じ1年同士で当たる事を祈った方が良いかも？」（ジョン）

もっと深刻なチームが居た。

「リン、どうしたの？こんな簡単な連携もミスるなんて……らしくないよ？」（エヴァン）

失恋からこっち全く調子の上がらないリン、そして目前には試験も迫っている。

こんなんで受かるのか？

挫折（後書き）

次回..そんなリンを見るに見かねたのはティア先生だった。

カウンセリング（前書き）

「ねえ、何をそんなに落ち込んでいるの？もしかして誰かに振られた？」（ティアナ）

あまりにストレートだった。

その一言はストライクゾーンど真ん中に突き刺さる。

つい泣いてしまったリン、その様子に焦りを感じるティアナ、

カウンセリング

「おまえ達、ミッドチルダの格闘技には無くても、ここで教えている格闘技に共通してある技があるがそれが何か分かるか？」

その日スー先生はそう切り出した。

「共通する技？」

そう、ミッドチルダのストライクアーツには存在しない技、そして地球の武術に共通する技、それが地球の武術の強さと言える物だった。

「それは扣歩だ」

そう、相手の死角へ一瞬で回り込む技、これがあるから強いのだ。他にも発頸や、化頸、奥義無双取りなど相手技を無効化したり、爆発的破壊力を魔力無しでやる所などミッドチルダには存在しない技だったりする。

それからもう一つ、気当たりと気当たりの捌きも存在しない。

入学してすぐ教えられるのは、それぞれの武術の基本的な型と受け身、

気当たり、気当たりの捌き、そして扣歩だ。

「おまえ達が次の大会で勝つには、完璧な扣歩が出来ない限り無理だ。

だから後1週間は扣歩の強化に時間を割く、自分の技は自主連の時間にも練習しておけ」

スー先生はそう言って生徒達に扣歩の練習をさせる。そう、この技があるから相手の攻撃は殆ど当たらない、ジョンも良いように翻弄されたのはこの技だった。

卒業生の中には扣歩の途中で何発もの打撃を繰り出してくるものもいる。

目の前で消えられて脇腹から背中への強烈な打撃が何発も、思い出すだけで痛くなる苦い思い出、

あのインターカップミッドチルダシリーズは未だにジョンの心に苦い思い出として残っていた。

こうしてジョン達は扣歩の強化を重点的に授業が進む、いや、どの1年生も扣歩の強化を中心に授業を行っていた。

「そうだ、もっと鋭く、もっと密着した所から扣歩を決めろ！

そうすれば相手には消えたように見える。スピードよりも鋭さで翻弄するんだ！

相手の顔を見てるんじゃない！もっと広い視野で相手全体を見るんだ！」

それはとても効果的な指導だった。

授業の終わりにはみんなフラフラになりながら、それでも扣歩を身に着けようと必死だ。

そんな中練習でボロボロの生徒が居た。

リンだった。かなり調子が悪いらしく、ミスを連発し足を払われては地面に転がる。

いつもなら綺麗に扣歩を決め、相手に1撃叩き込んでいる所なのだが、

動きに全く生彩がない、あまりに酷い状態だった。

「困った物だな、もう少し精神的に強くなって貰わないとこれじゃあ指導のしようもないな?」

佐藤先生も呆れ顔だ。

「リン、どうした? おまえらしくないぞ?」 (ヒビキ

「ほっというてよ、お兄ちゃん」 (リン

早く立ち直らないともう執務官補佐採用試験がそこまで迫っている。

模擬戦大会も間近だ。焦りと苛立ちが募っていく……

そんなリンを見るに見かねたのはティアナだった。

執務官補佐講座の時でも上の空のリンを可笑しいと思って注意深く見ていたのだ。

「ねえ、何をそんなに落ち込んでいるの? もしかして誰かに振られた?」 (ティアナ

あまりにストレートだった。

その一言はストライクゾーンど真ん中に突き刺さる。

つい泣いてしまったリン、その様子に焦りを感じるティアナ、

(やっぱり、モロ直撃しちゃったかな?)

作…空気ぐらい読めよ

「ね、ねえ？ 一体何があったのか話して欲しいな？もしかしたら何かの力になれるかも知れないし」（ティアナ）

「先生……」（リン）

「……そうなんだ？勝手に好きになったけど、その人にはもう家庭があったのね？

でも諦めきれなくて、告白も出来て無くてそのまま終わっちゃった？」（ティアナ）

（この子かなりアブノーマルだわ、人の家庭を壊しかねない危険性を持つてる。

不倫は不味いわよね？下手に焚き付けたりしたらもっと不味い事になりそうだし……）

「ねえ？相手の人ってどんな人なの？」（ティアナ）

「……お姉様は……」（リン）

（お姉様ってもしかしてこの子、百合？）

「そうなんだ？でもあなたと私は似てるわねえ？」（ティアナ）

「似てるって？」（リン）

「私も最初の相手はスバルだったから？」（ティアナ）

「スバルさんてあのスバルシテムの発案者の？」（リン）

「そう、士官学校の同期で同じ寮の同じ部屋で生活してたな？
やっちゃうまではそれほど時間は掛からなかったけど……」（ティ
アナ

「でもティアナ先生、何で今の旦那さんと結婚したんですか？」（
リン

「捨てられたのよ、スバルに」（ティアナ

「捨てられた？」（リン

「あいつね、さっさと男作って子供作って結婚しちゃって、
私なんかもうどうでも良かったみたい、一人取り残された時は寂し
かったな？

でもね、いずれそうなる事は分かっていたの、自分が夢を観すぎて
居ただけ、
もっと現実を観ていかないと、いつの間にか自分だけ取り残されち
やうわよ？」（ティアナ

「へっくしゅん・誰か私の噂してるのかなあ？」（スバル

本局でスバルがくしゃみをしていた。

「もっと現実をか……？」（リン

「いずれあなたにも現れるわ、心から愛する事が出来る人、心から
愛してくれる人が……」（ティアナ

「愛する人ですか？」（リン）

「そう、あなたは一時の気の迷いに囚われているだけ、
いつか必ずそれを理解出来る日が来るわ、

だからそれまで女を磨きなさい、それがあなたのやるべき事よ？」

（ティアナ）

「ありがとうございました、ティア先生！」（リン）

どうやらティアナのカウンセリングは上手く行ったようだ。

すっかり元気を取り戻したリン、それと同時にリンはティアナのこ
とが眩しく見えた。

人生の先輩として、それとも尊敬すべきお姉様として？

まあ、これでリンは大丈夫だろう？一回り大きくなったリンだった。

「私の名は宇宙人ジョーンズ、

今ミッドチルダと言う星の特別戦技教導学校で学食の皿洗いのバイ
トをしながらこの星を調査している。

この学校、体育会系で実に厳しい授業をしている。

生徒達は食べ盛りで実によく食べる」

「ナカジマ家ライス！ギガ盛りで！」（アヤメ）

「おいおい、そんなに食べて大丈夫なのか？女の子ならダイエット
を気にする所だろう？」

でもこの学校の ” ナカジマ ” と付く生徒は実によく食べる」

このロクでもない素晴らしき世界に……

カウンセリング（後書き）

次回…明らかに宮ノ内示現流の強さ、ヒビキは佐藤先生からキャリア幹部試験を諦めて欲しいと言われる。

進路（前書き）

その夜、お兄ちゃんは進路についてお父さんと随分遅くまで話し込んでいた。

結局、お兄ちゃんは先生になる道を選んだ。

進路

「佐藤先生、今何と？」（ヒビキ

「だからお前には申し訳ないと思うがキャリア幹部試験は諦めて欲しい。

お前にはこの学校に残って欲しいんだ、俺の後継者として……」（佐藤

そう佐藤先生は次の3月で定年退職する。

この先宮ノ内示現流を教えられる後継者を捜していたのだ。

元々宮ノ内示現流は後継者が少ない上に最終奥義まで体得している人間は殆ど居ない。

佐藤先生はそんな希有な人間の一人だった。

「もう校長先生も了承済みだ。

後はお前が首を縦に振ってくれば最終奥義までお前に叩き込む、剣技の才能に関してはお前は俺より上だ、きっと最終奥義まで辿り着けるだろう？」（佐藤

ヒビキは難しい決断を迫られていた。

将来の出世を取るか、それとも指導者の道を取るか？

ヒビキは悩む事になる。

「今日1日考えさせて下さい、返事は明日の朝します」（ヒビキ

その日1日彼は悩んだ。

「どうしたヒビキ、何を悩んでいる？」（クロスリード

「妹に男が出来たとか？」（ラフロ

「そんなんじゃないよ、俺の進路に関する事だ」（ヒビキ

「進路って？」（カティ

「佐藤先生にこの学校に残るように言われた。キャリア幹部は諦めて欲しいそうだ」（ヒビキ

「スゲーじゃん、この学校の先生って事はSSS級の強さを認められたって事だぜ？」（アード

「まだそこまで強くなってるよ、まだ奥義は何一つ習っていないし、

これから半年掛けて叩き込まれるみたいだ」（ヒビキ

「俺はその奥義の方が魅力的だな？将来の出世も良いけど、御神の剣と並び称される最強剣の一つ、

宮ノ内示現流の最終奥義、是非観てみたい」（クロスリード

そう、示現流その物は御神の剣と並ぶ最強剣として知られている。元々は薩摩示現流から分派した流派で、6つの流派に分かれている。そして、佐藤は元々守り屋をやっていた為、家族も作らずにこの年まで過ごしてしまった。

だから、自分の後継者が居ないのである。

それに、この学校の教師になって5年、未だ最終奥義に到達出来た生徒は居ない。

奥義まで納める事が出来た生徒は何人か居た物の、最終奥義となるとそれなりにセンスと心が伴わない限り不可能だっ

たからだ。

「難しい選択だよな？将来の金か？それとも名誉を取るか？ってことだもんな？」（ラフロ）

「金と名誉か……？」（ヒビキ）

非常に悩ましい問題だった。

まあ、それなりにそこそこ生活出来るだけの稼ぎで満足するのか？それともそれなりに出世してセレブな生活を送るのか？とても難しい所である。

「えっ、お兄ちゃん先生になるんだ？」（リン）

「まだそうと決めた訳じゃあない、なれって言われたただけだ、でも明日の朝までに返事しなければならない」（ヒビキ）

「まあ、大いに悩めばいい、それに示現流は俺が教える北辰一刀流よりも遙かに強い流派だ、

奥義まで納めれば殆ど無敵だろう？」（白州）

「そんなに強いのか？」（ヒビキ）

「日本にはこんな話が残っている。

幕末の剣客集団”新撰組”と言うのが居た。

彼らは日本最強とまで謳われた集団だったが、その総長の近藤勇や副長の土方歳三ををして、

示現流とだけは戦うな、戦うとすれば初撃だけは絶対に外せと言わしめたほどだ。

宮ノ内流に関しては2撃目までは絶対に外さなければならないと言

わしめるほどに強かった。

なぜだか分かるか？」（白州

「強いからだろ？」（ヒビキ

「それじゃあ答えになっていないな？」（白州

「だからどう強いのか想像も付かないんだって」（ヒビキ

「なぜ初撃を外せと言わしめたと思う？」（白州

「よく分からない」（ヒビキ

「いきなり奥義を撃って来るからさ、その奥義は間合いに入ってしまったえば回避する事も防御する事も不可能だという。

つまりは間合いの中では無敵なんだ。それ故に御神の剣と並ぶ最強剣術と呼ばれる」（白州

「ふうん、私達の習っている剣術ってそんなに強いんだ？」（リン

その夜、お兄ちゃんは進路についてお父さんと随分遅くまで話し込んでいた。

結局、お兄ちゃんは先生になる道を選んだ。

でも、宮ノ内示現流ってそんなに強いのかな？

技の種類なんかは滅茶苦茶少ないし、一種独特な剣術だし、習っていて不思議だと思ふ事が多い。

作…ここで示現流の技を見ておこう、

構え…蜻蛉^{トンボ}…右肩の前に刀を立てた状態で構える

捨蜻蛉^{すてとんぼ}…腰の左前に刀を寝かせた状態で水平切りする構え

置蜻蛉^{おきとんぼ}…腰の右前に刀を寝かせた状態で水平突きする構え

(構えはいずれも右利きの場合、左利きはこれが左右逆になる)

防御…再起^{よみがえり}…刀の柄に近い部分で相手の攻撃を受け流す。複数の相手にも対応出来る。

攻撃…燕飛^{えんぴ}…蜻蛉の構えから振り下ろした刀が∞の軌道を描く、他流派では燕返しと呼ぶ

猿叫^{えんきよう}…奇声と共に気当たりを入れる

三ッ太刀^{みつたち}…一振りに見えて2回斬る2段斬りの技

(リン達は、今この辺りまで習っている)

雙^{そとう}…蜻蛉の構えから間合いの外で踏み込んで相手を誘う技、

相手が間合いに入ってきた所を斬る

追箆^{おいこめ}…気当たりを入れて相手が動きを止めた所を斬る

寸^{すん}…狭い所で長い刀を使用する技術、刀と一体化して相手を

斬る

重切^{じゅうせつ}…刀を肩に担いで腰を落とす、

そこから全体重を切っ先に掛けて相手を叩き斬る(叩き潰す)

立^{りゅう}…居合い技、示現流の居合いはちよつと変わっていて、

他の流派の居合いでは横薙ぎか打ち下ろしが多いが、

刀の刃を下向きに、下方向へ抜いて下段から切り上げる。

このため殆ど回避も防御も不可能である。相手は股下から真つ二つにされる。

(今2年生はこの辺りを習っている)

居合いは、抜即斬のため、振り抜かれた時には全てが終わっている。

奥義…行…御神流で言う”神速”に当たる。

ただし神速より発動時間と距離が短い。発動距離はおよそ10 m

安…御式内で言う”水鏡二式”に当たる。相手の動きを先読みし動く先に斬り込む

意地…内気功を練って技の破壊力を上げる気功術

道…刀を大上段まで振り上げると見せていきなり斬り掛かるフェイント技

最終奥義…雲耀…蜻蛉の構えからただ一撃振り下ろす斬撃、

ただし、初動から振り抜きまでが1800分の1秒という速さを誇る。

このスピードは軍事用レールガンの実に2倍、余りの速さの為どんな防具も武器も一刀両断にされてしまう。

真雲耀…雲耀の2倍の速さ3600分の1秒で振り抜く、

余りのスピードと破壊力の為、斬撃の後に巻き起こる衝撃波だけで戦車をも吹き飛ばす

最早無敵すぎて斬れぬ物無し。

以上19の技しか存在しない。

非常に攻撃に特化していて防御を殆ど考えていない剣術だったりする。

技を出した後の隙が大きいのが欠点。

攻撃力だけなら御神の剣よりも圧倒的に強い。

御神の剣は多彩な技と防御に長けている。

進路（後書き）

次回..いよいよやってくる試験、彼らは受かるのだろうか？

試験！（前書き）

「あんたら諦めた訳ね？」（デュワーズ）

「諦めてなんか居ないよ、自分に才能があるって信じてるから、何もしないのさ」（ジョン）

「だめだ、ここまでのバカとは思わなかった。声を掛けるだけ無駄だわ」（マリー）

試験！

「ちえすとおおおおおおおお！」（ヒビキ

準備された丸太が真つ二つになる。

「ふむ、立^{りち}まで完璧だな？この分なら夏休みまでには奥義の二つぐらいは教えられそうだ」（佐藤

他の2年生はまだ重^{じゅう}切^{きつ}や立^{りち}で伸び悩^{なや}んでいる者が多い、今の所ヒビキが頭一つ抜け出している感じだ。

「ヒビキ、明日から奥義の内の最も簡単な物から二つ教える。夏休みまでに出来るようになってみる」（佐藤

その頃私達は体力テストだった。

これに合格しないと夏休み中ずっと補習になる。ビリー先生のあのしごきは出来れば受けたくない。

「……あの馬鹿達どう言う体力してるのよ？」（リン

そう、スケベ3人衆の馬鹿達が揃ってトップでゴールする。

持久走、短距離走、ジャンプ力、三つの種目を制していた。

流石に握力はもっと凄いのが居たけれど、いずれも総合成績はトップだった。

「いつの間にあんな体力を付けたのよ？」（デュワーズ

これがあのきつい補習の効果だった。

彼らは既に2年生に匹敵する体力を身に着けていた。

「いくら何でも執務官補佐の試験直前に体力テストはやらないで欲しいわよね?」

そう、もう7月、明後日は執務官補佐の採用試験がある。

これに落ちる訳にはいけない、リン達執務官を目指す者にとって現役合格こそ最大の目標なのだ。

下手に滑って無駄に何年も時間を費やす訳にはいけない。

このスクールの先輩達の多くは現役合格をして活躍している人が多いのだ。

「もう緊張している余裕すらないよ?」

1年生と去年滑った2年生はもうすぐ執務官補佐採用試験を受ける。

それから執務官補佐を受けない連中は、模擬戦大会に向けて猛特訓だったりする。

「流石に覚えが早いな?」(スー)

ジョンは既に瓶を斬れるようになっていた。

それと同時にマッハ突きも身に着けていた。

今度の模擬戦大会、1回戦負けだけは絶対に出来ない、もう負ける訳にはいけないのだ。

「この分なら夏休み明けにはある程度の技を教えられるか?」(スー)

そう、この学園に入ってくる人間は殆ど格闘センスの塊みたいな人間、

魔導士でなくても格闘家として充分に食っていける才能の持ち主ばかり、どの生徒も非常に覚えが早かった。

そして来週は指揮官適性試験、これに落ちる訳にはいかないジョン達、何とか受かって出世街道に乗りたい所だ。

ジョンはこの前ヴァロットに言われた事、なぜ怒られたのかを自問自答する。

「視野が狭い、周りが見えていない」

この言葉に集約されていた。

（あの人はあの時こう言った、まずは一般市民の安全を確保する事、そして部下達に被害が出ないようにする事、その上で確実に作戦を遂行する事、

俺の頭じゃあ全て考える事なんて出来ない、

でも出来るとするなら相手の出方を確実に見てそれに対処する事、

空手で言ったら前羽の構えと同じだ。徹底した絶対防御、相手をよく見て、

自分の置かれた状況を見て対処する事、それしか俺に出来る事は無い、

その考えで何処までやれるか分からないけれど、それだけで勝負するしかないんだ。

どうせ今更勉強した所で頭になんか入らない、絶対防御の思想だけで勝負する！）

彼は腹をくくった。

もう逃げも隠れも出来ない、いや、そんな事はもうしない、

当たって砕けろではなく、当たったら叩き潰せの精神で試験に臨むジョンだった。

「ちょっと、あんたら勉強しなくて良い訳？」（リン

「あ？指揮官適性試験の事？」（ジョン

「そうに決まってるじゃない？」（リン

「あれねえ、ヴァロットさんが言ってたよ、勉強するだけ無駄だつて、

あれは才能の問題だから才能有る人間なら勉強しなくても受かるし、才能が無ければ勉強しても無駄だってさ」（バランタイン

「あんたら諦めた訳ね？」（デュワーズ

「諦めてなんか居ないよ、自分に才能があるって信じてるから、何もしないのさ」（ジョン

「だめだ、ここまでのバカとは思わなかった。声を掛けるだけ無駄だわ」（マリ―

でも彼女たちは知らない、腹をくくったジョン達が恐ろしくできる事を、

人間開き直りが大切だという事を、開き直ったジョン達が信じられないほどの力を発揮する事を……

試験まで後5日、それぞれに勉強を進める。

何としても試験に受かる為に。

試験当日、緊張した空気が支配する。

みんな試験に集中する物の、あまりに突拍子もない問題が多い、それは教科書や参考書など全く当てにならないかった。

指揮のやり方とかそう言う事は一切出てこないのだ。確かに勉強するだけ無駄だった。より激しく勉強していた物ほどドツボに嵌る。

「何かユニークな問題多いよね？ケンカの仲裁のやり方とか、もし小学校の先生だったらとか？聞いている事がもの凄く変」

それはある意味才能の問題だった。

そう言う訳の分からない問題を自分なりのやり方で回答していく、実は採点官もこのテストは大変だったりする。

明確な答えなんて存在しない。

中には訳の分からない回答をする生徒もいるので、それをどう評価するのか悩む事もしばしばなのだ。

「ほう、あいつら化けたな？」

この試験の採点をしているのはヴァロットだった。

解答用紙を見ながら、明らかな間違いを減点し、

模範解答に近い物を正解、それ以外を何人かで評価するようにしていた。

そのヴァロットをして、彼らは化けたと言わしめた。

しかもそれは模範解答ではなく、評価回答だったりする。

同じ頃、指揮官研修を終えている2年生から選抜で上級キャリア幹部採用試験を受けている者が居た。

ヒビキを除く生徒会の連中だったりする。

彼らは未来を嘱望された幹部となる為にこの試験に向けて努力してきたのだ。

何としても受かりたい所だが、この試験は一筋縄では行かない難しい物、

果たして彼らは受かるのだろうか？

試験！（後書き）

次回…いよいよ目前に迫った模擬戦大会、1年生はそれぞれに練習に励みます。

勝つ為に（前書き）

「ヴァロット先生、どうしても負ける訳にはいかないんです！勝つ為の方法を教えてください！」

……
ジョン達は勝つ為の方法を聞きに来た、ヴァロットの予想通りに

勝つ為に

「校長先生、指揮官適性検査の採点出来ましたよ」(ヴァロット

「どれどれ？」(なのは

そこには信じられない結果があった。

「嘘？何であの子達がこんなに上位にいるの？」(なのは

「俺の予想通りでしたけどね？」(ヴァロット

「予想通りってどう言う事？」(なのは

「試験の前に言ってやったんですよ、勉強するだけ無駄だって、寧ろ俺の模擬戦大会の映像を見て手本にしろってね」(ヴァロット

「だからドツボに嵌らずに済んだ訳ね？それに比べると他の子は酷い成績ね？」

ドツボに嵌っている子が随分多いじゃない？」(なのは

「まあ、そんな物ですよ俺の時もそうだったですから？」

ちよつと捻くれている位の方が成績が上位に来る、そういう傾向の試験ですからね？」(ヴァロット

「そう言う物かなあ？」(なのは

「そう言う物ですよ、特にジョンなんか見て下さい、模範解答は一つもないけれど、

評価点は最高です。しかも徹底した防御型だ。

普通F Aのポジションにいる奴は攻撃型の回答が多いけれど、ここまで徹底した防御型は珍しい、こう言うのは鍛えると面白い指揮官に育つ、

もしかしたら俺やバローロを超える名指揮官に育つ可能性もありますよ」(ヴァロット

「よく見るとそうよね？ やっぱ変わってるわあの子」(なのは

「じゃあ俺はそろそろ行きますよ、あいつらが勝つ為の一手を聞きに来ますから？」(ヴァロット

(もう、どんな事をしたってあなたを超えるような子はそうそう出ないわよ、

器の大きさが違いすぎるんだから、それにあなたが居てくれるから
凄い子が育つのよ)(なのは

なのはは心の中で感謝する、ヴァロットの背中に向かって。

あの背中にどれだけの生徒が引っ張られ、どれだけ強くなったのだろう？

どれだけ優秀な人間に育ったのだろう？ 見捨てられそうだった不良がどれだけ更正したのだろうか？

この学園の校長で良かった、この学園にヴァロットが教えに来てくれる事がどれだけ有り難い物か？

それをつくづく噛み締めるのはだった。

「校長先生、執務官補佐採用試験の結果とキャリア幹部採用試験の結果が出ましたよ？」(ティアナ

「今年も成績良いわね？ まあ今年の1年生は受験する子がちょっと

少ないのが寂しい所だけど？」（なのは

「でも合格率80%キープは続いていますよ、これでまた優秀な執務官を送り出せそうです」（ティアナ

なのはは、感謝することしきりだった。

ティアナのお陰でどれだけ優秀な執務官が育っているか？

どれだけ管理局に貢献しているか計り知れない。

それに比べると自分の何と情けない事か？

ここの教師達を纏めるだけで手一杯で、それ以上の事は何も出来ては居ない、

一応出世人事で准将、提督という地位は頂いた。

でも、それはあまりに自分に似つかわしく無いとつくづくそう思っている。

自分はまだ責任を果たせては居ない、あの悲劇の責任すら取っては居ないとそう考えているのはが居た。

でも、このスクールを辞める訳にはいかない、今校長として頑張れるのは自分しか居ないのだから……

「ヴァロット先生、どうしても負ける訳にはいかないんです！勝つ為の方法を教えてください！」

ジョン達は勝つ為の方法を聞きに来た、ヴァロットの予想通りに……

「まあ、出来る限り魔法は使わない事だ、相手の魔法は出来る限り体に引付けて避ける事、

避けきれなかったら、手に魔力を込めて捌く事だ。特に空手の回し受けは捌く事に特化した技だ。

そうやって相手の懐に飛び込んでしまえばいい、相手を捕まえてし

まえばやり放題だ。

エマルジョンコレクトだって捕まってしまうとその意味を成さない、その程度の魔法なんだ」(ヴァロット)

「要は捕まえてボコレ？と言う事ですか？」(ジョン)

「まあ、そう言う事だ、それから後は特殊アイテムの使いこなしかな？」

大した魔力もなければ高等な戦術も出来ないお前らにとって出来る事はそれ位なものだ。

でもアイディア次第ではかなり上位まで勝ち進めるのも事実だ、どれだけそう言うアイディアが出せるのか？そう言うのも強さの一つだ。後は自分達で考えろ」(ヴァロット)

模擬戦大会まで後5日、みんな絶対に負ける訳には行かなくてそれぞれに特訓を重ねる。

「リン、随分立ち直ったね？もうミスらないし」(エヴァン)

「負ける訳にはいかないからね？特にあの馬鹿達に負けたらどれだけ恥を搔く事か？

考えただけでも恐ろしいわ」(リン)

「でも勝てるのかな？先輩達強そうだし、SSS級の先輩達も何人か居るし、

士官学校最強チームは全員SSSだし、そんな所とは絶対に当たりにたくないよ」(デューワーズ)

「まあ、勝ち抜けば絶対当たるけどね？」(リン)

「まずは目先の1勝だね？」（マリィ）

そう1勝すれば補習はない、まずは1勝する事だった。

「このアイテムは面白そうだね？」（ブラントン）

「ああ、これも使えそうだ」（ジョン）

「つたく、またしょーもない事を考えてるなあ？」（ジョニー）

「こう言うのが良いんだよ、ヴァロットさんは言ってたぞ、
こういう特殊アイテムの使いこなしが肝要だって」（ジョン）

俺達は今そう言う特殊アイテムのカタログを見ながら何を仕入れ
ようか？相談していた。

使えそうな物は結構ある、後はどう言う状況でそれをどう使うかを
考える事、

そうやって頭を使う事も強くなる為の方法だと教わった。

「蛇や蛙、ゴキブリにナメクジなんかも大量に捕まえておこう？」

そう、こういう特殊アイテムを見てみるとどんな悪戯に使おうか？
良からぬ考えがどんどん浮かんでくる。

楽しい悪戯をどんどん考え付く、そう、これがヴァロット達が最初
に取った戦法、

殆どのチームはこの悪戯に引っかかってやられた。

どのチームよりもヴァロット達の試合を分析していたジョン達はそ
の悪戯のセンスをも学んでいた。

「やっぱりバナナはデフォだよね？」（ジャック）

「このアイテムとこのアイテムも面白いぞ？失敗すると自分が酷い目に遭いそうだけど？」（ジョン）

「それ使ったら有る意味やばいだろう？下手したらショック死するぞ？」（ジョニー）

「この程度の事で死ぬようなヤワな奴は居ないって、まあ一生トラウマになるかも知れないけど？」（ジョン）

「お前ヒデー奴だな？」（ブラントン）

「悪戯って言うのはこのくらい強烈な方が面白いのさ？」（ジョン）

何か良からぬ事を考えているジョン達だった。

「全部で15万か？後でバイトしないとね？」（ブラントン）

作…ここで彼らが仕入れたアイテムを見てみよう

特殊アイテム紹介

そんなバナナ…

目の前に投げられるとつい踏みたくなってしまうバナナの皮、リアクション芸人御用達アイテムで、値段も格安。

1回こっきりの使い捨て、食べた後のバナナの皮を再利用していい環境に優しい製品。

屁玉..

カラーボールのように薄いガラスの玉の中にスカンクの屁を液化濃縮して詰めてある。

割れると気化して途轍もなく臭い匂いが充満する。

風上から風下に向かって使わないと自爆する。

周囲への被害の大きな迷惑アイテム、

ハラーナ社製の強力消臭スプレーとセットでの使用をお奨めする。

取りもちボール..

水風船の水の代わりに取りもちが入っている。

弾けたその場で簡易的な取りもち罠に変わる。

引っかかると非常に嫌なアイテム

接着ボール..

水風船の水の代わりに強力な瞬間接着剤が入っている。

弾けた瞬間何でもくっつけてしまう、その上簡単には剥がれない。

ハラーナ社製強力接着解除スプレーとセットでの使用をお奨めする。

オイル玉..

中にオイルが入っている。

地面が固い床の場合に有効、床に広がると何時までもつるつるで立ち上がる事さえ出来ない。

中性洗剤で洗い流す事で対処出来ます。

特殊消化液玉・・

中に特殊な消化液が入っている。

人体には何の影響もないが着ている物、バリアジャケットですらも溶かしてしまう。

主に女子に向けて使いたいアイテムである。

勝つ為に（後書き）

次回…いよいよ始まる模擬戦大会、果たして彼らは1勝出来るのか？

開幕！模擬戦大会一般参加シリーズ（前書き）

「行くぞおおおおおおお！」（ジョン）

（バカの一つ覚えね？突っ込む事しか脳がない、サクツとボコリましよう）（ツバキ）

開幕！模擬戦大会一般参加シリーズ

その日朝早くからスクールの前に長い行列が出来る。

そう、今日は模擬戦大会だ。

前日の夕方メディア発表されて、当日券のみの販売と言う方法がとられるこの模擬戦大会、

前の日の夕方から並ぶ市民も多い。

ダフ屋さん対策だったりする。

「ラッキー、俺達の相手ナカジマシスターズ7じゃん、素っ裸にしてやろうぜ？」（ジョン

「でもどう言う作戦で行く？いきなり消化液は使えなさそうだし？」（ブランドン

「そうだな？まず屁玉を使ってみるか？怯んで動けなくなったら消化液玉をぶつける」（ジョン

「問題は風だね？」（ジャック

「あんまり無駄遣いするなよ？屁玉は安いけど、消化液玉は結構高いし10個しかないからな？」（ジョニー

「分かってるって」（ジョン

良からぬ作戦を立てているジョン達。

「ラッキー、私達の相手最弱のチームじゃん、これで1勝はいただきますね？」（ツバキ

もう勝ち星を計算するナカジマシスターズが居た。
でも彼女たちは知らない、この後とても悲惨な目に遭う事を？

「私達の相手チーム473ってエルセアのチームだねえ？」（リン

「結構鍛えてるチームだよ、キャプテンは二期生の人だって、勝てないかも？」（マリー

「良いな、ナカジマさん所は、あの馬鹿達のチームだし、確実に1勝出来るし」（デュワーズ

「私達は補習だろうなあ」（エヴァン

「嫌な事言わないでよ」（リン

絶望的なリン達、補習という言葉が頭を過ぎる。

「ジョン達がいろいろ仕入れてたからね？僕らも仕入れる事にしたんだ」（バランタイン

「で？金は？」（フェイマス

「勿論全員の名前でローンを組んでおいた、後でバイトだね？」（バランタイン

そう彼らも汚い仕込みをいろいろとしていたりする。

「さあ、始まりましたガチンコ模擬戦大会一般参加シリーズ、司会及び審判長は私高町なのはと」

「コメンテーターはスペシャルフォース部隊長のヴァンサン・ロシエットでお送りしております」

「私もおるで？」（はやて

「はやてちゃん、偉い人なんだからこんな所まで来ないでよ」（なのは

「大丈夫や、仕事はロッサに任せてあるし、この所スクール卒業生のお陰で基本的に平和や、仕事も随分少なくなった、結構楽が出来とるんやで？」（はやて

「私は護衛だ」（シグナム

二人とも実は試合が生で見ただけでここまでやって来たりしている。

さて今年はどれだけの収穫があるのか？

「じゃあ、そろそろ1回戦第1試合、行ってみようか？」（なのは

いきなりジョン達の試合、1年生対決だった。

この前はどちらのチームも2年生のチームにフルボッコにされて終わっている。

特にジョン達は4人合わせて30秒持たなかったという惨憺たる物だった。

「これはナカジマシスターズ7の勝ちやろ？」（はやて

「いや、あいつらを舐めない方が良い、俺が勝つ為の秘訣を伝授しておいた、

後は何処までそれが出来るようになっていくか？だ、

もしかしたらとんでも無い事が起きるかも知れんぞ？」（ヴァロット

「とんでも無い事？」（なのは

「あいつら、相当仕込んでいる」（ヴァロット

（ふっ、天は俺達に味方したな？おあつらえ向きに追い風だ、これなら使える）（ジョン

「始め！」

「行くぞおおおおおおお！」（ジョン

（バカの一つ覚えね？突っ込む事しか脳がない、サクッとボコリましょう）（ツバキ

でもそこから違っていた、ジョンは懷から何かを取り出すとツバキの足下に叩き付けて全力で後退する。

カシャーン ムアアアアアアアアアアアアアアアア

「いかん、六面防御陣！」（ヴァロット

ヴァロットは、なのは、はやて、シグナムと共に六面防御陣の中へ、

それを見ていたキャロが各先生方と、何人かの生徒を六面防御陣へ

生徒会もそれに続く、試合場ではナカジマシスターズ7が全員倒れていた。

それだけでなく審判をしていたティアナ先生も巻き込まれていた。

「す、凄い効果」(ジョン)

風下にいる生徒達や観客がどんどん倒れていく、最早試合所ではなかった。

風上から巨大な砲撃が打ち込まれその爆風で匂いの大半を吹き飛ばす。

「も、もしかして毒ガスか？」(はやて)

「まあ、ある種の毒ガスです、俺が以前開発した暴動鎮圧用兵器、屁玉です」(ヴァロット)

「屁玉？」(なのは)

「ええ、あのガラス玉の中にはスカンクのおならが100倍濃縮されて入っています、

下手に吸い込んだら確実に倒れますよ」(ヴァロット)

「スカンクのおならって……とってもいやだ」(なのは)

「でもあれが毒ガスやったらみんな死んでるで？」(はやて)

「あいつら無茶しすぎだな？」(ヴァロット)

結局勝ったのはジョン達だった。

屁玉一つでナカジマシスターズ7は全員ノックアウトだった。

その後、暫くはおならの除染作業が続いたという。

「厄介なチームが出てきたわね？」

「でもあの作戦は利用出来るよ？」

「なるほど？　そう言う手もあるわね？」

「私達と当たるまで生き残っていて欲しいわね？」

とひそひそ話をしているチームがあった。

暫くして、スクールに苦情の電話が殺到する、「臭いぞ！　何とかしろ！」という物だった。

爆風で拡散しても臭い物は臭い、匂いが流れてきた住民からの苦情だった。

それでも容赦なく進む試合、次はリン達のチームなのだが……

開幕！模擬戦大会一般参加シリーズ（後書き）

次回…初日2回戦までやるはずだったが、1回戦しか出来ずに終わる。

そして2回戦へ、ジョン達の相手は？

PS…ヴァロットが開発したという屁玉、製造の為に大量のスカンクが必要なのだが、

お陰でスカンクを家畜化する農家が増えたという。

新しい産業にも貢献しているのだ。

臭い試合（前書き）

「良かった、僕たちの試合が最後で、これなら除染に時間を取られた所で大会には影響しない」（バランタイン）

「仕込んでいるのはあいつらだけじゃあないって所を見せてやろうぜ？」（フェイマス）

「風も味方してくれているし、これは勝てるだろ？」（ヘンリー）

臭い試合

（よ、良かった最初にあいつらと当たらなくて……）

私達は心の底からそう思った。

スカンクのおならは嫌すぎる。

おまけに人間以上に鼻の利く戦闘機人には効果絶大だった。

そう、戦闘機人は五感の内、視覚、聴覚、嗅覚が人間より優れている。

そこを突かれたら一溜まりもなかった。

味覚もかなりグルメな人並みに良かったりするけど？

まさかそこを狙ってくるとは思わなかったんだろう？

彼女たちは立ち直れるのだろうか？

「あれはきついわよね？ 私達でもやばかったかも？」（イスズ

「俺でも対処が遅れたらやばいな？」（クロスリード

「校長先生何をしてるんですか？」（ヴァロット

「保護バリアの強化です、これ以上被害を出す訳にはいけないから？」（なのは

そう、なのははコンソールを操作して観客席に保護バリアを設定した。

これで簡単には匂いを通さない体勢が出来た。

さっき倒れた生徒や観客は消臭スプレーと回復魔法で何とかなった物の、

もの凄く臭かったという苦情が殺到している。

「さっきのあれはやばかったな？ 確実に勝てるけど周りへの被害が半端じゃあない」（ジョン）

「まあ、仕方ないよ、勝つ為には？ それにもうスタンドには被害が出ない体勢みたいだし」（ブランドン）

「く、臭っさく、何て物を使うのよ！」（ティアナ）

お冠のティアナ先生だったりする。

屁玉の効果はかなり大きかった。

スタンドがその効果に恐怖するほどに……

「じゃ、じゃあ第2試合行ってみよう！」（なのは）

「業務連絡、業務連絡、チーム473はすぐに本部まで来て下さい」

「ええ？ それは本当ですか？」（ヴィラ）

「申し訳ないがすぐに戻ってくれ」（473部隊長）

「校長先生、申し訳ありませんが緊急事態が起きました。」

「不本意ながら試合を辞退して帰投します」（ヴィラ）

「何？ それは本当か？ 分かった、チームウィンドとチームフォレストを助っ人に出す、

アプリリアは上空からブラシカで支援、アマネさんもブラシカから指揮を任せた、俺は大会に残る」（ヴァロット）

「どうしたの？」（なのは）

「たった今エルセアの美術館にジャヌヴィアからの予告状が届いたそうです」(ヴァロット)

「それは仕方ないわね？」(なのは)

「1年生Bチーム、相手チームの試合放棄により不戦勝とします」
(なのは)

「えっ？私達の勝ち？」(リン)

それは思いも依らないラッキーだった。
戦わずしてして勝利、それも本来なら負けていたはずの相手、一体何があったんだろう？

「えっ、ジャヌヴィアから予告状が来た？」(マリー)

「ありがとうジャヌヴィア様、私達に勝ちをプレゼントしてくれて！」(リン)

作…不謹慎すぎるぞ、リン

「でも勝ちも勝ちだよ？これで補習は免除だよ？」(デュワーズ)

「多分ね？」(エヴァン)

リン達は偶然のラッキーに救われた。

試合はどんどん進む、そう一般参加を含めて128チームが64チームへ、

今日は2回戦の途中までやるはずだった物の、さっきの除染の影響

で2回戦は明日に見送られた。

この分だと、明日は相当きつい日程になりそうだ。

「良かった、僕たちの試合が最後で、これなら除染に時間を取られた所で大会には影響しない」(バランタイン

「仕込んでいるのはあいっただけじゃあないって所を見せてやろうぜ?」(フェイマス

「風も味方してくれているし、これは勝てるだろ?」(ヘンリー

相手チームは2年生の中堅チーム、トラップバインドが上手いチームだったりする。

「始め!」

その瞬間、ヘンリーがカートリッジを2発消費、数十発のスフィアを作り出す。

2年生が突っ込んでこなかったからだ。

スフィアをお互いの間に叩き込むと、いくつものトラップがうねうねと立ち上がっては消えていく、

「野郎、相当仕込んでやった」(ヘンリー

「今度はこっちから行くぞ!」(バランタイン

バランタインとフェイマスが突っ込む、相手は棍と仗をそれぞれ構えて迎撃する体勢に出た。

それが彼らの戦術だとも知らずに……

右の回し蹴りを出すと見せかけて左手で股下から相手の足下に何か

を投げたバランタイン、蹴りの勢いを利用して相手に背を向けると一目散に逃げ出す。

そう、屁玉だった。

おまけにフェイマスも相手の上空へ屁玉を投げていた。

ヘンリーの銃撃が屁玉を撃ち抜く、そしてそれは阿鼻叫喚の地獄を呼び起こす。

むあああああああああああああああ

凄まじい臭さに倒れる2年生、そして巻き込まれるティア先生、本日2回目のダウンだった。

「6面防御陣！」

すぐさま防御陣を張ってガードする大会本部、そして生徒達。

「業務連絡、観客の皆さんは除染が終わるまでそこを動かないで下さい」

そしてまた砲撃が打ち込まれて匂いが拡散し、苦情が殺到する。

「まさか他にも仕込んでいる子がいたなんて？」（なのは

「あいつも俺の所に来ていたからな」）（ヴァロット

またしても大会は大変な事になった。

「何か近年に無いセコイ大会になったなあ？」はやて

「いくら私でもあれは防ぎ様がない、よく考えれば恐ろしい攻撃だ」
（シグナム）

「次の大会から屁玉は禁止にしないと行けないわね？」（なのは）

こうして1日目を終了し、大会は二日目に突入する。

臭い試合（後書き）

次回..勝つ為の策略を巡らせる生徒達、ヴァロットは事件の阻止に動く

それぞれの夜（前書き）

「お兄ちゃんはまだ良いよ、私は2回戦突破出来る気がしない、それに臭いのはごめんだな？ あんな物を使われたらたまった物じゃないよ

どこかで防毒マスクぐらい借りられないのかな？」（リン

「一つだけ借りられる所があるぞ？」（ヒビキ

「えっ、そんな所有るの？」（リン

それぞれの夜

「やった、明日の2回戦はリン達のチームだ、今度こそ脱がしてやろう?」(ジョン)

「でも、屁玉は使わない方が良いと思うよ?」(ブラントン)

「明日はあれをやろうぜ?」(ジョン)

「なるほど!あれね?」(ブラントン)

また良からぬ企みをするジョン達、何を考えているのだろうか?

「不味いなあ、明日はジョン達だよ、仮に勝ってもその次は教導隊だし、

その次に勝っても士官学校チームだし」(リン)

「リン、なんだその言いぐさは?俺達が士官学校に負けるって言うのか?」(ヒビキ)

「でもお兄ちゃんじゃあまだ無理でしょ?神速に対応するなんて」(リン)

そう、3回戦でヒビキ達は士官学校チームTN2Tと当たる。

しかも相手は1回戦を前衛の力押しだけで勝ち抜いてきた、まだ本気のほの字も出していないチームだった。

「うっ……そう言われるとやばいな……」(ヒビキ)

「仕入れた情報じゃあ、向こうは4人中3人が神速を使うみたいだし、

もの凄く多彩な魔法を使ってくるらしいよ、おまけに仕込みの達人らしいし」(リン)

「何かそう言われると負ける気がしてきた……」(ヒビキ)

「お兄ちゃんはまだ良いよ、私は2回戦突破出来る気がしない、それに臭いのはごめんだな？あんな物を使われたらたまった物じゃないよ

どこかで防毒マスクぐらい借りられないのかな？」(リン)

「一つだけ借りられる所があるぞ？」(ヒビキ)

「えっ、そんな所有るの？」(リン)

「防災署だよ、あそこならどんな有毒ガスにも対応出来る防毒マスクが置いてある。

今から電話して予約しておけば明日の朝借りられると思うぞ？」(ヒビキ)

「なるほど、これなら勝てるね？」(リン)

リンはニヤリと笑う、4人分借りておけば必ず勝てると踏んでいた。

でも、そんな物は役に立たないと知るのは試合になってからだだったりする。

「定時連絡します」(アマローネ)

ヴァロットの前にモニターが開いた。

「……と言う訳です、部隊長、何か指示はありますか？」（アマロ
ーネ

「その話だったら俺も知っている、漁師の間じゃ有名な話さ、実際に人魚を見たって言う噂もある位だ。まあ、それだけ警備が厳重ならそう簡単に盗む事は出来ないだろう？もし出来たとしてもそう簡単には逃げ出す事は出来ない、盗まれたら館内から誰も出さない事だ」（ヴァロット

こうして指示を出し終えた物の、ヴァロットは何故かこの警備が失敗に終わる事を予感していた。

「俺達の相手、先生達なの？」（バランタイン

「終わった、完全に終わった」（フェイマス

「こうなったら屁玉攻撃有るのみ！」（バランタイン

「ロングアーチとチームフリーダムはここを頼んだぞ？俺はちよつと飲みに行ってくるから？」（ヴァロット

「了解しました」（グリフィス

すんなりと飲みに行けるヴァロット、もうみんな理解している。ヴァロットが飲みに行くと必ず酒場で何らかの情報を仕入れてくる。それは今まで外した事がないほど正確な情報を……

「旦那、まだ事件ですかい？」（マルジナル

「まあ、そんな物だ」(ヴァロット)

「ヴァロットさん、おごって？」(ミレリ)

「ったくしょうがねえな？」(ヴァロット)

グラスを傾けながら、付けっぱなしのTVに目をやる。

エルセアでは大変な事になっていた。

美術館の周りを報道陣が取り囲んでいる。

警備の外からしきりに報道していた。

何とジャヌヴィアは報道機関にも予告状を送りつけてきた。
しかも郵送で、消印の分析から出したのは一昨日の事らしい。

「これじゃあ情報の隠しようがねえな？」(ヴァロット)

「旦那、事件ってこれですかい？」(マルジナル)

「まあな、でかいサファイヤを欲しがってるバカが居るようだ、
あれは呪われた宝石って呼ばれてるのに？」(ヴァロット)

「呪われた宝石？」(ミレリ)

「ああ、あれを持つと呪われるって言う話もある位だ。

何でも最初の持ち主の呪いが掛かっているらしくてな、自分の愛する人を失うんだとか？」(ヴァロット)

「何か怖いわね？でもちよっとミステリアスで手にしたい気もする」
(ミレリ)

「俺はごめんだぜ」(ヴァロット)

「旦那、そーいやあ地球産の良い酒を仕入れてきたんでさあどうです？」(マルジナル)

「ほう、ロイヤルサート21年物か？入れて貰おう？

それとこの前のI・W・ハーパーは引き上げていく、勘定を頼む」
(ヴァロット)

レシートの裏にはある人物の名前が……

「多分そいつが今回の黒幕だ、ジャヌヴィアに依頼して盗ませようとしている。

既に闇オークションに出品広告を出してるよ」(マルジナル)

「ありがとうマスター、ここの酒は相変わらず質が良いから大好きだ」(ヴァロット)

「まいど」(マルジナル)

「……と言う訳だ、俺達は盗まれた物と仮定して動く、明日ウィンドとフォレストが戻り次第、

こいつの屋敷に乗り込む、屋敷の場所と奴が居るかどうかの調べを頼む」(ヴァロット)

「了解しました」(グリフィス)

「俺は帰って寝るわ、明日はまだ大会に付き合わんといかんしな？」
(ヴァロット)

「流石に部隊長だねえ？」（グリフィス

机の上にはウイスキーが一本残されていた。
飲んでも良いぞと紙が添えられて……

それぞれの夜（後書き）

次回…プレオ様大活躍、その強さを見せ付ける。

一方、またジャヌヴィアの盗みを阻止出来なかった管理局、マスコミからは酷く叩かれる。

2回戦を突破せよ（前書き）

リン達に何かを投げつける。

それは特殊消化液玉、玉が弾けて液がかかるとバリアジャケットですら溶け出す。

2回戦を突破せよ

朝起きるとTVは怪盗ジャヌヴィアで持ちきりだった。

いつもならスポーツ枠を拡大してスクールの模擬戦大会を放送するの、

今日は怪盗ジャヌヴィアの事ばかり、どうやったらあの不思議な盗みが出来るのか？

そして、かなりの精鋭を集めたにもかかわらず管理局の何と不甲斐ない事かときき下ろす。

あれじゃあ473部隊の人たちが可哀想だよ？

まあ、私はお陰で勝ちを拾えたけどね？

そして今日はいつもより1時間早く試合が始まる。

昨日2回戦が出来なかったから、今日は2回戦から決勝まで一気にやってしまうつもりだ。

長い1日になりそう？

そして迎えた第1試合、私達はあの馬鹿達と当たる。

あいつらの目つきがいやらしい、何かとんでも無い事を考えてるみたいだ。

(今日は脱がしてやるぜ！) (ジョン)

(でもあの表情は何か仕込んでいるよね？自信満々だ) (ブラントン)

(大体想像着くけどな？) (ジョン)

(想像って？) (ブラントン)

（恐らく屁玉対策はバッチリって事だろう？）（ジョン）

（なるほど）（ブラントン）

「さあ、今日は出来るだけ早く試合を終わらせるよ」（なのは）

「もう、屁玉対策はバッチリなんですか？」（ヴァロット）

「ハラーナ社の特別チームを呼んであるわ、
どんな匂いも必ず消してくれるって言う話よ？」（なのは）

「もうスカンクのおならはこりごりやあ」（はやて）

「じゃあ、第1試合始めて下さい」

「行くぞおおおおおおおおお！」

勢いよくジョンが突っ込んでくる。

「バカめ！」

私達はその瞬間特殊防毒マスクを取り出した。

「掛かったな？」（ジョン）

その瞬間だった。

上空から落ちてきたのは大量の蛇、蛙、芋虫、毛虫、ナメクジ、ミミズ

そう作戦名「インセクト」その昔ヴァロットが編み出したとっても嫌な作戦だ。

「イヤあああああああああああああああ！」

「それでも食らえ！」（ジョン）

リン達に何かを投げつける。

それは特殊消化液玉、玉が弾けて液がかかるとバリアジャケットですら溶け出す。

キャロ先生からタオルが入って試合終了だった。それでも最初の内はタオルが溶けるんで随分何枚かのタオルを必要とした。

「な、なんちゅうセコイ試合や？」（はやて）

「何かこんな試合を昔見たような？」（なのは）

「あいつらなかなかやるな？ここまで俺達の試合を再現しようとは？」（ヴァロット）

「やばいわね？次はあの子達よ？まだ相当仕込んでいそうだから慎重に行かないと危険だわ？」（エリカ）

「この作戦最高！」（ジョン）

そう、ジョンは自分を囨にブラントンの飛ばした補助魔法陣をカムフラージュしていた。

リン達はジョンに目が行ってしまい補助魔法陣に気が付かなかった

為見事に作戦に嵌ってしまったのだ。

「いや、最高の眺めだったね？」（ブラントン

「何か俺達の出番無さそう？」（ジョニー

こうしてどんどん試合が進む、教導隊チームは前衛の二人の力押しで勝利、

生徒会チームは両方とも勝ち抜け、士官学校チームも力押し、勝ち抜いているチームは殆ど魔力を使っていない、使わない分のこり試合に使える魔力が多くなる。

後は何処でその魔力を使うのか？それが切り札だと踏んでいるようだ。

そして、2回戦最終試合、ティーチャーズ対1年生Cチーム

「不味いなあ、仕入れたの屁玉と取りもち玉と封魔弾だけなのに、使えないよ？」（バルンタイン

「こうなったら屁玉攻撃有るのみ、午前中の今の内なら風が俺達に味方してくれる」（ジム

「それでやるしかないよね？」（フェイマス

「始め！」

その瞬間、神速で突っ込んできたのはロサード先生だった。バルンタインは屁玉を取り出して投げようとした物の……

「奥義・巻き上げ！」

その玉は割れることなく空中高く弾き上げられた。ロサードはその直後全力で後退する。

弾き上げられた屁玉はバランタイン達のだ真ん中に落ちてきた。

カシヤーン

む ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ あん

その瞬間、打ち込まれたのは結界陣砲、キャロがぶっ放していた。バランタイン達は六面結界陣に閉じ込められていた、匂いも一緒に……

「ぎえええええええええええ！ し、死ぬうううううううううう
ううううううつ！」

バルンティン達はここで全滅、ティーチャーズその強さを見せ付けた。

「あ、あれはきついよね？密閉空間でスキャンのおならは地獄だね？」
（なのは）

「しかも100倍濃縮やで？」
（はやて

「恐ろしい、実に恐ろしい」
(シグナム)

そして迎えた3回戦、始めに当たるのは生徒会Bチームと士官学校チームだった。

生徒会Bチーム

FA
アヤメ・ナカジマ
GW
ヒビキ・ヤマザキ
CG
グレン・モー

レンジィ　FBラフロ・イグ

チームTN2T

FAモミジ・ナカジマ　GW高町・プレオ　CGティント・ペスケ
ラ　FBカエデ・ナカジマ

どちらのチームもツイン指揮官型、前衛と後衛の指揮をそれぞれ
分担して行うタイプのチームだ。

こういうチームは前衛、後衛の意気がぴったり合っていないと上手
く行かない、

意気を乱されたらそれだけでチームが崩壊してしまう危険性がある。
反面、それぞれに掛かる負担が小さい為、攻撃の幅が広く多彩な攻
撃が出来る。

攻めも守りも非常に強いチームである。

両チームが睨み合う。

（前の二人、動くなよ、既に仕掛けた）（グレン

（なるほど、そう来たか？）（プレオ

（じゃあ作戦2－6だね）（ティント

そう、既に作戦は読まれていた。

「始め！」

「クラスターショット！」（ティント

上空へ向かって放たれた砲撃が細かく分散して落ちてくる。

そう、なのは直伝のクラスターショット、ホーミングバレットより圧倒的に広い範囲を爆撃出来る広域拡散砲撃だ。

激しい爆発が両チームの間で起こる。

そして、うねうねと立ち上がっては消えるトラップバインド、全てトラップを潰された。

「こうなったら肉弾戦だ！」（ヒビキ

「「そ、そんなバナナあああああああああああああ！」」
（アヤメ・ヒビキ

そう突っ込んでくる瞬間を狙われた。

絶妙のタイミングでそんなバナナを足下に転送されていた。

倒れた二人に襲いかかるモミジとプレオ、あっという間にフルボッコだった。

クロスリードは見ている物が信じられなかった。

あの強いヒビキが、生徒会Bチームがあっという間に崩壊していく、指揮官研修でもライバル同士、実力を認め合った仲なのにそれがこ
うも簡単にやられるとは？

そして残る二人も肉弾戦の末に打ち倒された。

「残りの二人に手間取っちゃったね？」（プレオ

「仕方ないよ、魔力も奥義も無しじゃあやっぱりきついし」（モミジ

圧倒的強さを見せ付けてチームTN2Tの勝利だった。

2回戦を突破せよ（後書き）

次回…3回戦はどんどん進む、ジョン達は勝てるのか？

偶然の勝利（前書き）

その瞬間、ジョン達は六面防御陣に閉じ籠もった。

「おい、狭いぞ、もっと広くならないのか？」（ジョン

「無理！そこまでの魔力ないし」（ブランドン

周りを教導隊チームに囲まれていた。

偶然の勝利

「まさか生徒会チームが3回戦で消えるとは思わなんだわ？」（はやて

「プレオ様達よく鍛えられてますね？」（ヴァロット

「当たり前よ、私とお父さんとスクラティと時々ヴィーニャも寄って集って鍛えてますから、そう簡単には負けないわよ」（なのは

「でもあのバナナ転送は別の誰かさんを見てるみたいやなあ？」（はやて

「あれはあの子達が一番最初に覚えた事だからね」
ヴァロット君の試合を見ている内に真似するようになって、それから暫くは悪戯の嵐だったな、それだけ悪戯でやり込んでるから年季が違うのよね？」（なのは

「何か俺より質悪そう？」（ヴァロット

などと言っている内にどんどん3回戦が進む、そしてジョン達は強敵と相まみえる。

「不味いなあ、向かい風だよ？」（ブラントン

「どうする？向こうのチーム割りとおばさんが多いよ？特に後ろの3人」（ジャック

その言葉は相手チームにも聞こえていた。

教導隊チーム、

FAリオ・ウエズリー(25) GWラヴィーユ・ヤマザキ(41)
CGキュヴェ・エリカ(27) FBローヌ・ヴィラージュ(34)

ボーダーラインはリオとエリカの間が存在した(笑)。

「お、おばさんって言ったなああああああああ！」(エリカ)

そう本人が一番気にしている事、言っては成らぬ事を口にしたジャック、

でもそれが偶然にも彼女たちの判断を誤らせる事になる。

因みにエリカは目だけでなく耳も地獄耳なのだ。

「何かもの凄くやばい雰囲気なんですが？」(ジョニー)

もの凄い魔力が湧き起こっている。

エリカはSSSの魔力の持ち主、絶対に怒らせては行けない。
にもかかわらず神経を逆撫でしてしまったジョン達、一体これで勝てるのだろうか？

「始め！」

その瞬間、ジョン達は六面防御陣に閉じ籠もった。

「おい、狭いぞ、もっと広くならないのか？」(ジョン)

「無理！そこまでの魔力ないし」(ブラントン)

周りを教導隊チームに囲まれていた。
何時フルボッコにされても可笑しくない体勢、もう逃げ出す事は出来なかった。

カシヤン

風上のちよつと離れた所で音がした。
そうブラントンが屁玉を転送していたのだ。

むあああああああああああああああああああ

「く、くつさあああああああああああつ！」

次々と倒れる教導隊チーム、次の瞬間、試合場は結界の中に閉じ込められた。

白い科学防護服を身に纏った特殊チームがやってきて消臭剤を散布する。

どうやらこれで匂い対策はバッチリのようなだ。

そう、苦し紛れに撃ったブラントンの作戦が教導隊チームをも倒してしまった。

屁玉はある意味最強のアイテムだった。

そして運び出されていくエリカ達、ブラントンもようやく防御陣を解除する。

「ど、どうして勝てたんだ？」（ジョン）

「何か恐ろしい偶然みたいだね？」（ジャック）

「つ、疲れたあゝ」(ブランドン)

「あの子達なかなかやるなあ」(はやて)

「自分達を囿に防御陣を使う所なんかなかなか良い作戦だ。

あれなら死角から防ぎようのない攻撃が出来る」(ヴァロット)

「あの臭さのど真ん中にいようって言う度胸が凄いわよね？」(なのは)

「まあ、防御陣や結界陣は音と光以外殆どシャットアウト出来ますから」(ヴァロット)

これは大波乱だった。

まさか優勝候補の教導隊チームがこんなに弱いチームに倒されるとは思っても見なかったからだ。

実は、スクールの模擬戦大会は裏の世界では賭け事に使われている。放送を利用して賭を行っているのだが、これは相当な大穴だったようだ。

「予想通り勝ち上がってきたね？」(プレオ)

「じゃあ次はあの作戦で行く？」(モミジ)

「そうだね、でもあれ以外にも相当仕込んでいると思うよ？」(テイント)

「まずは持っている仕込みを少しでも取り上げる事だね？」(カエデ)

そうあのひそひそ話をしていたのはこのチームだったりする。

そして、またよからぬ事を相談していた。
彼女たちは黒い笑いを浮かべる。

そして3回戦は終わりベスト16が出そろった。
ここまで生き残っているチームは1年生はジョン達だけだった。

そしてお昼、まあ今日は試合がさくさく進んでいるので少し日程に余裕が出たりしている。
昨日みたいに除染に余り時間を取られないのもその要因だったりしている。

「……なるほど分かった、俺の言ったとおりだったな？」（ヴァロット）

「申し訳ありません、あんな簡単なトリックに引つかかるとは思っても依りませんでした」（アマローネ）

「もう現場検証は終わったんだろう？ 引き上げて良いぞ、後は盗まれた宝石を取り返すだけだから？」（ヴァロット）

昼休みを利用して指示を出すヴァロット、部隊長は大変である。

「何かさあ、ここまで残ってる事が場違いだね？」（ブラントン）

「いや、まさかこんなに勝てるとは思わなかった。

ただどあの人はスゲーな、頭だけでここまで勝てる事を最初から読んでた」（ジョン）

「でも次は相当な強敵だよ、校長先生の娘だって、しかもかなり鍛えてるし、性格悪そうで何を考えてるか分からない

し」(ジャック

そう、実際性格悪かったりする。
そしてまた汚い作戦を立てる事も事実だ。
ジョン達は4回戦も勝てるのか？

偶然の勝利（後書き）

次回..そして始まる4回戦、悪知恵対決を制するのは？

真の実力（前書き）

「オラァ！」

まさか苦し紛れのマッハ拳が当たるとは思わなかった。

どおおおおおおおおん

まともに食らったモミジがスタンドまで飛ばされる。

真の実力

お昼休みが終わると、ベスト16の試合が始まる。

ここまで残っている優勝候補は、ティーチャーズ、TN2T、生徒会A、チームハラウン、まあそんな所だ。

残りは、2年生チームが4チーム、一般参加のチームが7チーム、そして1年Aチーム、まあ順当にここまで勝ち進んできた事が不思議なチームがこのAチームだ。

そして情け容赦なく始まる4回戦、まずティーチャーズが、それに続いてハラウンが勝ち抜け、生徒会Aチームも続く、因みに、SEALSやラベルダ、スペシャルフォースは精鋭過ぎて大会への参加が禁止されている。それだけ精鋭部隊は強いのだ。

そしてとうとうジョン達の番がやってきた。

相手はチームTN2T、士官学校のチームながら2年生に匹敵する強さを持っている。

その上生徒会Bチームをあっさりと破って勝ち上がってきた。

「今度のチームはただ者じゃあないよ？」（ジョニー

「脱がしてやりたい所だが上手く行くかな？」（ジョン

「インセクトいっとく？」（ブラントン

「あれなら何とかかなりそうだね？」（ジャック

そして開始線で睨み合う。

チームTN2Tは全員エマルジョンシールドを装備、補助魔法陣も全て出している。

これは何か仕掛けてきそうな予感だった。

「始め！」

「行くぞおおおおおおおおおおおおおお！」（ジョン

そう叫んで突っ込んでくる。でも読まれていた。

2枚の補助魔法陣がコースを塞いで牽制する。

直後に落ちてくる蛇やらカエルやらの気持ち悪い物を残りの補助魔法陣が全て飲み込んだ。

「へっへっへ、頂きいゝ」（プレオ

「これでも食らえ！」（ジョン

消化液玉を叩き付ける物の、それさえ補助魔法陣に飲まれた。

「これだったらどうだ！」（ブラントン

ありったけの仕込みをあらゆる場所に転送したり投げつけたりしたが、

全て補助魔法陣に拾われて終わった。

「く、くそう、もう奥の手がねえ」（ジョン

「諦めなさい、もうあなた達に勝ち目はないから」（プレオ

後輩のくせに上から目線でそう言われる。

完全に見下されていた。

「こうなったら肉弾戦有るのみだ!」（ジョン

プレオとモミジが突っ込んで来る。

「オラァ!」

まさか苦し紛れのマツハ拳が当たるとは思わなかった。

どおおおおおおおおん

まともに食らったモミジがスタンドまで飛ばされる。

「嘘? あいつらまだとんでも無い実力を隠してる」（プレオ

そう、マツハの拳は当たればバズーカ砲にも匹敵する破壊力を持っている。

（嘘? 俺ってこんなに強かったんだ?）（ジョン

一人減って圧倒的不利になったプレオ達、しかも相手の前衛二人は強力な空手家、

下手に喰らえば自分達が終わる。

そう、ジョン達はここまでかなり鍛えられてきた。

でも、失敗続きで何処まで強くなっているのか? さっぱり分からない

かった。

でも、今の一撃でそれは証明された、自分達は強い、それも滅茶苦茶に。

強いと分かればそれが自信になる。

今度は思いっきり強気に出るジョン、プレオ達を挑発する。

「ふっ、もう少し実力を隠しておくつもりだったんだがなあ、仕方ない、遊んでやるぜ？」（ジョン）

「まさかあの子達あそこまで強かったなんて……」（なのは）

「スゲーじゃねえか？ まだあそこまでの強さを隠していたとは？」
（ヴァロット）

「なんやその割には余裕のない戦い方をしてたけどなあ？」（はやて）

自信を持てば、強気になればそれだけ相手が小さく見える、でもそれは慢心を生みやすい、そう、まだジョン達はプレオの頭を舐めていた。

そしてフィールドの状況を見失っていた。

プレオがニヤリと笑う。

「それでも喰らいなさい！」（プレオ）

プレオは屁玉をジョンの足下に叩き付けた。

カシャーン むあああああああああああああああ
あん

「く、臭っさあああああああああああ！」（ジョン）

「た、助けて……」（ジョニー）

「目が痛い……」（ブランドン）

そう自分達の仕込みにやられた。

いつの間にか風向きが変わり向かい風になっていた事に気が付かなかった。

そして、この屁玉の恐ろしさを自ら味わう結果になった。

ジョン達、全員ノックアウト負け、ここで1年生チームは全滅した。

すぐに結界が出来、除染チームが出てきたのでプレオ達は防御陣の中で匂いが消えるのを待つ、

程なくして除染が完了し、どおやら匂いにやられずに済んだようだ。

「そうだモミジちゃんは？」（プレオ）

すぐに保健室に走っていく。

「大丈夫よ、次の試合までに何とかするわ、でもギリギリ間に合うかどうかって所よ、

バリアの上から叩かれてるけど、ガードした腕と肋骨が曲がってるの、痛みは暫く残るかも？」（スー）

そう戦闘機人の骨格は簡単には折れたりしない、金属で出来ている為折れるより曲がる。

その分、内蔵に対するダメージは軽減されるのだが、治療魔法は使いくくて高度なテクニックを要求される。

まあ、シャルの弟子であるスー先生にとってこのくらい朝飯前な

のだが……

「あいつらを舐めすぎてたよ、とんでも無い化け物だった」（モミジ）
勝つまでは絶対に油断しては成らない、士郎の教えを今頃思い出した4人だった。

私はその試合を驚きを持っていた。

まさかあのバカがあんなに強かったなんて、
負けたとは言えそこまで圧倒的な強さを見せ付けられるとは思わなかった。

破壊力だけなら相当な物だ。

まあ、頭はバカだけど、性格はスケベだし、品位の欠片もないし、それを補って余りある強さ、一体あいつら何者なの？

「あいつら2学期には頭角を現すだろうな？」（ヒビキ）

「お兄ちゃん、あいつらただのバカじゃあないんだね？」（リン）

「ああ、あいつらはただのバカじゃあない、もの凄いバカだいろんな意味で……」（ヒビキ）

こうしている間にベストエイトの試合が始まっていた。

でも、モミジの回復が間に合わずプレオ達TN2Tはここで不戦敗の宣告を受けた。

試合がことのほか早く進んだ為、回復が追い付かなかったのだ。

その後試合が進み、決勝は生徒会Aチームとティーチャーズだった。
流石に実戦経験の差が物を言う世界、先生達の勝利で大会は終わった。

た。

真の実力（後書き）

次回…互助会で金を借りたジョンやリン達、バイトを始める。

嗚呼、青春のアルバイト生活（前書き）

閉会式の後私達はあのマスクが溶けてしまい返せなくなった事を謝りに行った。

そこで教えて貰った金額はとんでも無い事になっていた。
4人で160万、お小遣いじゃあ払えないよ。

「どうしよう、すぐにマスクを返さなければいけないし、
買うお金なんてないし、バイトするしかないよね？」（デュワーズ

嗚呼、青春のアルバイト生活

「えっ、一つ40万もするんですか？あのマスク」（リン

閉会式の後私達はあのマスクが溶けてしまい返せなくなった事を謝りに行った。

そこで教えて貰った金額はとんでも無い事になっていた。4人で160万、お小遣いじゃあ払えないよ。

「どうしよう、すぐにマスクを返さなければいけないし、買うお金なんてないし、バイトするしかないよね？」（デュワーズ

「こういう時の為に互助会があるんじゃない？」（マリー

そう、ここの互助会は結構な額まで貸してくれる。

ただその後は返済計画に従ってアルバイトする訳だけ……

はあ、お父さんに何て説明しよ？

翌日、終業式の後には生徒会室に行く、

「何であんたらが来てるのよう」（リン

「仕方ないだろ、あの仕込みには結構金がかかってるんだ。

アルバイト覚悟で仕入れなきゃあんな仕込みは出来ないぜ」（ジョン

「まあそれは僕らも同じかな？」（バランタイン

結局みんな揃ってアルバイトする事になった。

「これが校長先生へのアルバイト許可申請書、こっちが借用証書、それから誓約書だ、絶対に互助会の指示するバイトを辞めない事、必ず金を返すと誓約すると誓って貰うぞ？」（アード）

「仕方ない、まあ一月の辛抱だ」（ジョン）

「そうだね、そんなに大した額じゃあないし多分一ヶ月、長くても3ヶ月だね？」（バランタイン）

「嘘？ 私達半年以上だよ、割の良いバイトでないときついよ」（リン）

そう、まずは書類にサインし、借りる金額を申請する。

ジョン達は4人で15万、バランタイン達は4人で10万、そこへ行くと私達は4人で160万、えらい事だ。

ここの互助会の紹介するバイトはそれぞれにバイト料の高い物が多い、

何でもこの互助会を作ったのはあのヴァロットさんだそうだと。互助会がなかったら私達はサラ金に手を出すしかなかった。そんな事したらどうなっていたか？考えるだけでも恐ろしい。

「じゃあ、この求人票から好きなものを選んでね？」

それと4組の生徒は強制的にローエン商会ね？」（イスズ）

「何で僕らだけ強制的に？」（ブランドン）

「あ、この方法はあのヴァロットさんが編み出した修行法でもあるの、

エマルジョンコレクトの練習をしつつ、魔力アップを図る最適の方法でもあるからって、

今の会長もそうやってSSまで魔力を上げたのよ、頑張れば相当強くなれるわ」(イスズ)

「何かちょっと羨ましいぞ？」(ジョン)

「同じく」(リン)

もう決まってしまった連中はほっというて、求人票を見る9人、

「居酒屋の店員か？夕方6時から夜10時なら昼間は遊べるし、別のバイトだって掛け持ち出来る、時給1500なら結構割が良いな？」(ジョン)

「美少女限定・海の家？ただしユニフォームはビキニ？何かイヤらしいよね？このバイト？でも時給3000か？ちょっと魅力かも？」(リン)

「スタンドの店員時給850？安すぎだろこれ？」(ジャック)

「ファミレスのウェイトレス時給1400かあ？昼間のバイトだし時間が長いからお金は稼げるね？」(マリー)

「仕方ねえ俺は居酒屋にしよう、ここの寮からも近いしまかないも付いてる、まあ何とかなるだろう？」(ジョン)

「この海の家って期間限定で働けるんですか？」(デュワーズ)

「そう言う働き方もありね？」(イスズ)

こうしてそれぞれのバイトが決まってい

まずは運送屋のローエン商会、ここはブラントン、エヴァン、ジムの3人が、

ファミレスのウェイトレスはマリー・ボーンが、
居酒屋の店員にはジョン、バランタイン、ジョニー、ジャック、デューワーズ、リンの6人が、

デューワーズとリンは期間限定で海の家も掛け持ちする。

フェイマスとヘンリーは工事現場の作業員を選んだ。

因みに一番きついが工事現場の作業員が一番時給が高い。

何せ高所作業とか、かなりの危険を伴う為それなりに鍛えられてないと出来なかったりする。

こうして私達のバイト生活は始まった。

私達は林間学校の前日まで海の家と居酒屋を掛け持ちするつもりだ。

取り敢えず、借りたお金であの防毒マスクを買いに行く、
40万は卸値だった、売値はもっと高い。

これじゃあお金が足りないと思ったら、イスズさんが卸屋を教えてください。

そう、ナカジマ家の紹介があれば直接卸値で買う事が出来る。

何せ108部隊に睨まれたらこのクラナガンで商売なんて出来ないのだから。

「あーあ、借金を返す為にアルバイト生活か？何か虚しいな？」
（リン）

「何か青春を無駄に過ごしている気がする」（デューワーズ）

私達はバイトを決めたその日から働き始めた。

居酒屋の店員からだった。

ここの居酒屋他にも先輩達が随分働いている。

調味料やお酒の多くを地球から輸入し、非常に美味しい事でも知られている。

それに先生達もよく飲みに来る。

「そう言えばリンって地球出身なんだよな？」（ジョン）

「違うよ、地球出身はお父さんだよ、私はこっちの生まれだし、向こうには小さい頃に何度か行った事があるだけ、最近は行ってないなあ」（リン）

「ふーん、じゃあ向こうの味とかあんまり知らないんだ？」（ジョン）

「そうだね、でも向こうの方が美味しいかな？ここの料理ぐらいのものは食べられるし」（リン）

「何か地球って美味しい物が多いんだな？」（ジョン）

ここのビルは12階建てかなり大きな居酒屋、私達は主にウェイトレスとして働く、

ジョン達は裏方と用心棒、裏方は重い物を各階の厨房まで担ぎ上げるのが仕事、

用心棒は酔って暴れる客を取り押さえたり、毎回暴れる客を玄関で追い払うのが仕事、

後、重いジョッキ持ちも男の子の仕事、一度に10個ぐらい運ぶ子が多い。

これはこれで結構なトレーニングになりそうだ。

それにここの制服、着物風で可愛いから好き。

「何よ、このビキニは？」

翌日とんでも無い制服に私達はお冠だった。

それは最早ビキニと呼べるのだろうか？

所謂マイクロビキニという奴だ。

殆どヒモ、肝心な部分が隠れてるだけ、ちょっとズレたらいろいろ見えちゃうよ？

Tバックだし前の方もギリギリだし食い込むし、時給3000の訳が分かった気がする。

ここのお店入るだけでお金を取る、その上売っている物自体は大したこと無いのに単価は滅茶苦茶高い。

女の子にお触りは禁止だけど、何か見せ物にされてる気分、でも辞めたくても辞められない。

あの誓約書にサインしてしまったし、お金を返すにはそれなりに時給の良い所でないといつまで経っても返せない。

何か随分貧乏くじを引いた気がする。

嗚呼、青春のアルバイト生活（後書き）

次回…カレルの結婚式、一方ジョン達は鍛える事の大切さを学ぶ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7903v/>

魔法戦記リリカルなのはSchool?～10年後の物語～

2011年10月9日20時45分発行